

# Father, Sheep, and the King

穂積りょう

## Father, Sheep, and the King epi.1-1

---

彼は、おなかがすいた、と言った。

梅雨ももう終わる頃の真夜中で、私が出し損ねた郵便をポストに放り込んだ帰りのことだった。彼は掲げられた十字架の下、石畳を辿った扉の前に身体を丸めて転がっていた。まるでボロ雑巾のようで、放浪の末に力尽きかけた野良犬のようで、それでも確実に人間だった。私を見上げて、淡く笑った。

どこか他人事のような、現実感のない、それでいてどこか面白いような響きの声だった。少年と青年の狭間の、高いような低いような不思議な音で、こう続けた。

んで、オレちょっと動けそうにないからさ。一晩ここ貸して欲しいんだ。あ、だいじょぶ。ここで死んだりとかしないし、メーワクかけないから。明日んなったらどっか行ってるから。だから、オネガイシマス。

ちょっとだけ、ここにいさせて。

最後の方はほとんど息だけの呟きになって、とろりと目を閉じた彼を、当然のことながら私は許さなかった。

当たり前だ。それならもっと別の所に行くべきだ。

よきサマリア人たるべき姿は、祈りの場を守る司祭こそが率先して示すべきものなのだから。

「……【施しは、それをするすべての者にとっていと高き方の御前にささげる善い献げ物となる】。それによって神の国に徳を積むわけだ」

「うんうん。んで、おっちゃんは見知らぬオレにご飯と寝るところを施してくれてる、ってえことなんだね」

「分かってんじゃねえか。なら不満顔してねえで食え。それとも不味くて食えねえか飽食世代」

「いやいや、そーゆーことでもないんだけど、つつかまだ食ってないからマズイとかウマイとかわかんないんだけど」

「なら食ってから感想を述べよ。三字以上無制限とする」

「……おっちゃんって、さりげない親切が苦手なの得意なの、どっち？」

「好きに解釈しろ」

喉の奥で笑う私を見て、彼は困ったように瞬きながら渋々箸を取った。少し眠った後で、顔はさっぱりしている。汚れはそのままだがしかたがない。

細い少年だった。身体に大きな傷はないように見える。殊に手首と静脈は無傷だ。ただ、両の掌に小さく抉ったような傷があった。多分自分の爪でやったのだろう。出血もしただろうが、ほぼ塞がりかけている。

まるで無銭の長旅でもしてきたように、着衣はあちこち破れてすりきれて汚れていた。元もそんなにいい類の服ではなさそうだ。アクセサリは時計も何も着けていない。何かに怯えている風でもないから、着の身着のまま逃げてきたというものではなさそうだ。ただ、落ち着きはない。これは、あれだ。家族と食事に出たはずなのにいつの間にか見合いの席にいたみたいなの、何故

自分はここにいるんだらうって顔だ。

しかし、腹も良く鳴っているのに粘る。

のろのろと箸を動かして、みそ汁を一口。メシの数粒と野菜の煮物を口へ運ぶ。噛んで、嚥下して、うう、と唸った喉も細い。それから、割と白い。喉仏が動く。

「ウマイ……」

敗北感を形にしたような声だった。

そうか、と笑って、私は茶を入れてやった。

「いいことだ。生きてるってことじゃねえか」

「……生きてるよー、そりゃ。体温あって、息して、内臓でもなんでも動いてりゃ」

生きてるんでしょ、と溜息混じりに彼は言う。投げやりに、倦んだように、どこか苦しげに。

「病人か老人の言いぐさだな。悩み相談でもしてみるか少年」

「いーいーよー。くそーウマイ……。アンタみたいなのが作ったとか思いたくない」

「じゃあ思わなけりゃいい」

悔しげに煮物をつついていた少年が、ちらりと顔をあげた。

その拗ねた目は色素の薄い茶色で、髪の色と揃いのように似ていた。今どきの若者らしく脱色でもしたかと思っていたのだが、もしかしたら生まれつきなのかも知れない。

「この料理は、近所に住んでる若い女の子が作ったもんだ。絶賛花婿募集中、の花嫁修行中。一人暮らしの独身司祭の栄養状態を心配して、時折母親と一緒にこうして出前に来てくれる。作り始めた頃は黒こげで酷いもんだったが、最近ようやく腕を上げてきた。好きな男でも出来たのかもしれないが、私は見たことがない。気は強いが笑うと可愛い。美味しいと言われりゃ喜ぶだろうな。どうだ、美味しいか？」

彼は、忙しなく瞬きをして視線をあちこちに動かし、やがて頷いた。

「……うん。ウマイ」

「そうか。じゃあ食え」

促すと、今度はもう少し素直に食べはじめた。元々腹は減っているので、理屈よりも食欲が勝つのは自然の理だ。

食べあげるのを待つのは数分で済んだ。

「ゴチソウサマ」

「よしよし。ちなみに全部嘘だ。私が作った」

彼が盛大に茶を吹いたので、台ふきを放ってやる。

「なんっ、アンタ、うっ、そって」

「私が作ったのじゃ嫌なんだろう。だから、受け入れられる理由をやったんだ。感じたことを理屈でまげるのは心に良くねえからな」

「げほっ……教義にウソをつくなつてのがあるべきだと思うんだけど、オレ！」

「確かにあるな。じゃあ後で告解をしよう。飢えて死にかけてる子ども一人を救うためのささやかな罪だ。神もお許しくださるに決まってる」

「いーかげん……」

神妙に十字を切ると、彼はひどく脱力してテーブルに身体を伏せた。

拭いてから懐け、と言い残しておいて、すっかり空になった食器を下げる。軽く洗って戻ってみると、彼はテーブルに懐いたままおためごかしのように手の届く範囲だけを拭いていた。

「……まあ、構わんが。そのナリなら、今更少々汚れたところで変わりゃねえか」

「あっ、そうか」

仕掛けが跳ね上がるように、彼が唐突に身体を起こして部屋を出ようとした。嫌な予感がして、咄嗟に履いていたスリッパを蹴る。綺麗にストレートの線を描いたスリッパは、彼の後頭部にぶつかって大変いい音をさせた。ぎゃっ、と悲鳴をあげた彼は、つんのめって該当箇所を押さえ、振り向く。

「痛たい……！！ ちょ、なにこれっ、スリッパ!？」

「良かったな。命を満喫しろ」

「アンタ全部それで済ませる気じゃないよね痛ってえマジ……つま先当たったでしょ、どーやって投げたの、今」

「こう」

彼の傍らに転がったスリッパを履き直して、もう一度動きを実演してやる。

投げてすらねえし……と嘆きながら、彼は後頭部を押さえたまま床に転がった。

「……まあ、なんだ。今考えたことがなんとなく分かっちゃったからな。別に床もテーブルも汚れて構わねえから、すぐに出てくのはやめとけ」

「素直にうん分かったアリガトウって言いたくないのはなんでかなあ……？」

「気にするな」

頭を撫でてやると、彼は嫌がって転がっていった。少し離れたところからじと目で睨んでくる様子が面白くて笑みを零すと、一度吠えられた。

「……別にペットを飼う気はねえけどよ。親切は嫌か」

自身を馴れぬケモノと見立てた彼は、私の言葉に目を細めた。まるで満月が一気にやせ細るように、鋭い三日月になった。薄茶色の瞳は、淡い闇に冒された月色だ。

ねえ、とその月が口をきいた。

「施しが徳ならさ。……神の国って、そこまでして行きたい、何があんの？」

「——【神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ】……」

小さな聖堂には、数人の信徒。

特に敬虔な者たちではない。洗礼を受けたものは稀で、なんとなくクロスを身につけ、開きもしない聖書を持っている者が多い。ミサも毎回は来ないし、典礼の間も居眠りや話に余念がなく、何年経っても聖歌はあやふやだ。

この様子をお偉いさん方に見られたら、私は司祭クビだなあ。と冗談でつぶやいたことがある。彼らは一緒になって笑って、その次の週だけは真面目にやった。ミサ中はなんとかこらえたが、笑い死ぬかと思った。

まあそんな感じなので、雰囲気は緩い。そして、いつもと違う顔が来ていれば、すぐに分かる。何しろ私の目が二つきりではなくなるからだ。

「神父サン。なんか妙に細っこいのが門のトコにいたよ。見たことねエ顔だけどあんたのファン？」

「主のファンなら歓迎するがな。絡むなよ」

「絡まねエよ。ってか声かけようと思ったら逃げられた。足早エ」

「前言を訂正する。脅すなよ」

脅さねエよ、と一番若い信徒は肩をすくめた。脱色した襟足の長い金髪、緑のカラーコンタクト。体格の良い長身に纏うのはだぶだぶのカジュアルルックで、ズボンの尻ポケットからはみ出した携帯電話には小さな飾りのついた紐が山ほど下がっている。首や腰に同じようにじゃらじゃらしたクロスとアルファベットの“S”の形のペンダントを下げ、耳にはピアス。口には火の点いたピース。

「でもさァ、【だれかれかまわず家に招き入れるな】だろ。神父サンはそこら辺がビミヨーだから」

「先週の一節を覚えてたとは感心だな。私はビミヨーに見えるか」

「こんなが入りしてる時点でビミヨーもビミヨーだろ」

でもそーゆーとこキライじゃねエよ、とからりと笑う。私も笑う。

「覚えておこう。ところで今度ステンドグラスを磨く奉仕をしてみねえか。最近煙がよく入る」

「あァ、ごめん。ばれてた？」

「これでも司祭だからな。まあ気が向いたらまた来い。お前相手に閉める扉はここにはねえから」

「.....出た出た、ウゼエ感じ。んじゃ気が向いたらね」

だるそうに手を振った背中はまだ笑っていた。ちらりと見えた口元も。

私一人になってしまえば、狭い聖堂内は無音に満たされる。喧騒は遠い。それでも耳を澄ませていけば、やがて音は戻ってくる。ごく小さな音だ。それは命の音だ。

「【友をつくるときは、試してからにせよ。すぐに彼を信頼してはいけない。都合の良いときだけ友となり、苦難のときには、離れてしまう者がいる】」

呟きは、静かに反響した。高い天井に、掲げられた神の子に、描かれた聖母に、目に見えぬ聖霊に触れて喜びの声を上げるように。そう信じて言葉を紡げ、と教えてくれた人が私にはいる。

「.....【誠実な友は、堅固な避難所。その友を見出せば、宝を見つけたも同然だ。誠実な友は、何ものにも代え難く、その素晴らしい値打ちは計り難い】」

語り終えたところで口を閉ざして、しばらく待つ。待つことには慣れている。

やがて、扉の辺りで音がした。小さな、小さな、石を踏む音だ。

「.....お前は賢い。考えろ。警戒しろ。あらゆることから学び、悟り、得ることと捨てることを恐れるな。それから選べ。.....まあ、あれだ。要はお前の人生なんだからお前のいいようにしろ」

「——宗教って、そんなやる気ない感じだっけ？」

「私にも友を選ぶ権利はある。だがまあ、間口は広いぞ。迷える子羊は拒めねえからな」  
彼は軽く笑い声を立てて、メエエと鳴いた。  
結構似ていた。

「神父服だ」

「珍しいか」

うん、と彼は頷いた。礼拝席に座り、前の席の背もたれに寄りかかって丸い目で私を見ている

。

「だってこの間会った時は普通のおっちゃんだったのにさあ。それ着てると別人みたい」

「イケてるだろう」

「おっちゃんはその言い方がイケてない」

彼は、何故か安心したように笑った。

あの日、彼は私が起きる前に姿を消していた。広告の裏に、ありがと、という走り書き、それからいくばくかの小銭だけが残されていた。

ぼろぼろの衣服に泥だらけのズダ靴は相変わらずだ。けれど浮浪者に見えるほど小汚くはない。薄茶色の髪にはきちんと艶がありふわふわと柔らかく揺れる。同じ色の瞳に宿る光はまだ若く強い。それなのに、どこか醒めている。

私の視線に気が付いて、彼が姿勢を少し正す。

「なに？」

「……いや。そろそろおっちゃんというのを訂正するべきかと」

「……………えええええ？」

今度は、彼の方がひどく驚いた顔で私を眺め回す。予想外の反応に、私も面食らった。

「なんだ」

「いや……実はオバチャンとか言わないよね？」

思いっきり吹き出してしまった。

「だってアンタ変なウソつくじゃんか！ 見るからにオニイチャンじゃないのにそんなこと言うから」

私があんまり笑うので、彼は真っ赤になってそう弁解した。

「それにしたってお前、ああ分かった、私が悪かった。お前がそんなに傷ついてたとは知らなかったんだ。許せ」

「べつにっ」

彼がむくれてそっぽを向いている間に、私は脇腹を押さえて呼吸を整える。それにしてもオニイチャンよりオバチャンの方が納得出来るのだろうか。確かに若くはない。が、女顔でもない。汚くはないと思うが綺麗な顔でもない。彼らのような若者連中の方が、よっぽど整った顔をしている。

彼はしばらく機嫌を損ねた様子でこちらを見もしなかったが、私が通路を挟んだ隣の長椅子に腰掛けたのを機にちらりと視線を寄越した。

「分かった。呼び方は、好きにしてい」

「.....じゃあ、おっちゃん」

「分かった」

無抵抗の印に両手を挙げると、その口元にやっと小さな笑みが浮かんだ。

「ねえ。今日話してたのって、この間の続き？」

「聞いてたのか。途中で眠られて消化不良だったからな」

「.....眠かったんだよ」

「だろうな。見えたかどうかは知らねえが、今日来てた常連だってよく寝てる。たまに催眠術師でもやってけるんじゃないかねえかって思うよ」

「うわあ、チョーいかがわしい響き」

「そうか？」

「だって催眠かけて何やんのさ」

なにして。

「.....【主よ、父よ、わが命の神よ、わたしにみだらな目を与えないでください。わたしから情欲を遠ざけてください】」

祭壇に向かって十字を切ると、彼は軽やかに笑った。嘲笑のような下卑た響きはなく、穢れを吹き払うような涼やかな笑い。

「神父って大変だね」

「お前らの方が大変だろうよ。まあ若い間はいろいろあるわな」

やれやれ。子どもに乘せられて告解の真似とは、我ながらなんとも情けない。

だが、彼はそうして笑うと本当に少年らしかった。まだ伸びてゆく若木のように、未熟さや青さも魅力に変える力があつた。

「でも、切れ切れだったからかな。結局よく分かんなかった。オレは神の国ってどこかにあつて、SF映画みたいに空から来るもんじゃないかとか思ってたんだけど」

「映画って、『未知との遭遇』か」

「なにそれ」

「.....昔の映画だ。知らねえか」

彼は首を振った。横に。

「ちょっと古いけど『インデペンデンス・デイ』だよ。テレビで見なかった？」

今度はこちらが首を横に振る番だった。ちょっと古いと言っても『未知との遭遇』よりは新しいのだろう。これが世代間格差というものだろうか。私が映画にあまり興味がないということ差し引いても埋めがたく感じる。

彼も同じ戸惑いを感じたらしく、首を傾げて茶色い髪を掻き回した。

「.....ま、いいや。とにかく、どっかから来るんだと思ったんだよ。地球上にはもうそんなところなさーだし、じゃあ宇宙とかから来るしかないじゃん？　それで、あれだ——モクシロク。だよな？　なんか天使とかいっぱい来るスゴいやつ。それで今あるもの全部ぶっ壊して、綺麗にして、その上に乗っかるんだって」

身振り手振りを加えて説明されたその情景は、私にも結構な確率で正しくイメージ再現できた

、と思う。

かなり色々なものが入り混じってはいるが。そもそも宇宙から来たのならそれは神や天使ではなく宇宙人なのではないだろうか。そのうち『猿の惑星』も混じってきそう。いや、あれは『未知との遭遇』より古いんだから知らないか。

「あ、『猿の惑星』なら知ってる。ちょっと前にテレビでデジタル・リマスター版をやった」  
「……」

主は高層ビルがひとつ建つ度にちょこちょここと全地の言葉を混乱させてるんじゃないかねえか、と最近よく思う。そして年配の信徒によく同意を貰うが、若い信徒から貰ったことはない。

その日はそのまま『猿の惑星』の話で終わった。あのラストは驚いたとか、続きがあるのを知ってるかとかそういう他愛のない話だ。

そうして彼は、時折訪れては話をして帰るということをするようになった。毎日ではなく、二、三日に一度ほど。内容は彼が手持ちぶさたに捲る聖書の話から始まり、大概は話がそれて世間話で終わった。彼はくつろいでいてもどこか遠慮があったし、私に迷惑を掛けることを極端に嫌った。邪魔をすることを気遣い、忙しくなさそうな作業の片手間に話すことや、私の暇つぶしになるということに安心したような顔を見せた。

ミサに誘う気はなかった。そもそも彼は私が一人の時でなければ姿を現さなかったし、紹介など試みようものなら言語道断といった体で姿を消すこともままあったからだ。

加えて、彼は聖書や教義に興味があるのではない。説かれる救いには懐疑的な目を向けていたし、意味不明という顔をしていた。物語的な部分を読み飛ばし、箴言やシラ書と言った訓戒や処世訓を読んでは細かいことを気にし、現代においてはどう使えるのかを聞きたがった。

時に詩編の一節を戯れに口ずさみ、創世記の冒頭からツッコミを入れ、雅歌を喜び私のそばで朗読した。

「【あなたの立ち姿はなつめやし、乳房はその実の房。

なつめやしの木に登り

甘い実の房をつかんでみたい。

わたしの願いはぶどうの房のようなあなたの乳房

りんごの香りのようなあなたの息

うまいぶどう酒のようなあなたの口】……」

彼は明らかに私をからかう意図で読んでいるが、これも正典である。エロいよねこれエロいよね、とかわくわくした目で同意を求められてもどうしたものか。

「【あの方が左の腕をわたしの頭の下に伸べ、右の腕でわたしを抱いてくださればよいのに】」

それでも、そうして雅歌を読む彼の声は不思議に優しく、清浄な聖性を保っている気がした。大人とも子どもともつかない、男とも女ともつかない、昇華された声で謳う愛の姿。

「【愛は死のように強く

熱情は陰府（よみ）のように酷い。

火花を散らして燃える炎。

大水も愛を消すことはできない

洪水もそれを押し流すことはできない。

愛を支配しようと財宝などを差し出す人があれば

その人は必ずさげすまれる】……」

ねえ、と彼は雅歌を指で辿りながら私を呼んだ。

「おっちゃんは、好きな人がいたことある？」

なんともストレートだ。主に仕える司祭に向かって何を聞いてるんだ、と思うとおかしくな  
って、正直に答えた。

「あるよ。司祭の職に就く前だけだな」

ふうん、と彼は鼻を鳴らした。理解できないときに必ずする、彼のクセだった。

その話は、それ以上は広がらなかった。

## Father, Sheep, and the King epi.1-2

---

2.

そんな日々が二週間ほど続いたある日、少し早めに大型の台風が発生し、近づいていると聞いた。

まだ雨風はほとんどなかったが、酷くならないうちにと忙しく雨戸を閉めて回り戸を打ちつける。そこに、いつもの如くふらりと彼がやってきた。

「おっちゃん、何してんの？」

「ああ、いいところに来た。そこ押さえててくれ」

「はしご？」

「屋根を補強する」

すぐにどうにかなることはないとは思いますが、万が一吹き飛ぶと修理代がかさむ。細々と活動を行っている身にそれは辛い。

「おっちゃん、だいじょぶ？ オレ登ろうか？」

「補強作業が出来るのか？」

「出来ない」

意味ねえな。

「つつか、やったことない。かな。オレンちマンションだから」

「なるほど。じゃあ今日はそこで支えててくれ。後で教えてやる」

とは言え、私も本格的な補強など出来ないのだから、折を見て業者に頼まなければならない。今回の台風を越したら帳簿と一緒に考えてみよう。特に、聖堂に雨漏りをさせるわけにはいかない。

押さえて貰ったはしごを登って、弱くなっていそうなところを探す。放っておかれた彼は退屈なのだろう。下から叫ぶように話しかけてきた。

「でもさあ、おっちゃんって結構何でも出来るよねえ」

「出来るというか、な。しなきゃならんとなったら出来る出来ねえは二の次だ。それで、とりあえずやってみりゃ出来ることは出来るようになるし、出来ねえことは出来ねえよ」

「そんな簡単なもん？」

「違うと思うか？」

問い返してみると、沈黙が落ちた。

多分、自分の経験や知識に照らし合わせて考えているのだろう。彼は考えることを好む。一人で考えて、納得するまでそれを続ける。多少行動力に難は出てくるが、それはそれで悪いことではない。

しばらく補強作業を続けていると、おっちゃん、と再び呼ばれた。

「あのさあ、やってみて出来なかったらどうす……ギャー！！」

あまりに唐突に上がった悲鳴に、私が屋根から落ちそうになった。

「どっ、どうした」

なんとか体勢を整えて下を覗き込む。

そこでは、なんとも言い難い光景が繰り広げられていた。

「あっはっは、噂のコロボックルはっけェん。我捕獲ニ成功セリ」

「うわー！ うわー！ 離せえええやだーおっちゃん！ おっちゃんああああん！！」

泣きそうになりながら大暴れしている彼を背後からしっかり抱き上げているのは、金髪に緑のカラーコンタクトの、あの一番若い信徒だった。今日は派手なアロハシャツにチノパンにサングラスというどこからどう見ても柄の悪いチンピラスタイルだ。なんであいつはああいう妙な格好をしたがるんだ。

「あァ神父サン台風対策？ お疲れサマー。元気？」

「離せー！ 離せたら、は一な一せー！ おっちゃんナニコレ誰コレー！！」

「おオ、コロボックルは元気一杯だなァ。高い高いしてやろオか？」

.....まあ、気持ちは分からんでもないが。いきなり後ろからでかいのにとつつかまえられりゃあ、大概の人間は怖いだろう。しかも彼が異様に怖がるものだから、とつつかまえた方は面白がって余計構うときている。

「.....とりあえず、どっちはしごを押さえててくれねえか。降りるから」

眼下の大騒ぎに頭痛を覚えながら頼んだことは、当然のことながら悲鳴と笑い声に紛れてしばらく聞き流された。仕方ないので、まあいいか、放っておいても。取って食われることはねえし。と思い直して作業を続行することにした。

後から、おっちゃんは冷たい、と彼に散々文句を言われたことは言うまでもない。

「いやァ、最近神父サンの前にしか現れねエヤツがいるって聞いたからさァ。レプラホーン、ええと、靴屋の小人とかそなん？ んで来てみたら丁度いるじゃん。そりゃ捕まえるデショ」

台風対策も済み、散々遊ばれた彼が目に見えてぐったりし始めたので、まとめて家の中に移動した。移動と言っても、隣だ。多少の植木で仕切ってある程度で垣根というほどもない。先日彼を保護したのもこちらだ。慎ましやかな、司祭用の住居。

居間兼客間に通したものの、彼をぐったりさせた当の本人は悪びれもなく笑って茶を飲んでいるし、彼は私の背後にぴったりくっついて隠れ、ぐすぐすと鼻を鳴らしている。茶を入れる最中も離れなかったのだから、よほど怖かったのだろう。

「それにしてもいきなり拘束するこたねえだろ。声かけるとか」

「声かけたら逃げられちまうじゃん？ なーコロボックル」

覗き込まれ、彼はびくりと身体をゆらして縮こまった。少し移動もしたが、私から離れる気配はない。

「なんだその、コロボックルってのは」

「知らない？ 北海道辺りの小人。アイヌ神話だっけか」

これだけ怯えられても一切態度を変えない、悠然とした様にはいっそ尊敬すら覚える。実際はただただ自分勝手なだけかもしれないが。

「小人っつーたらドワーフとかトロールとかもいるけど、あァ、日本のメジャーどころならスクナビコナとか一寸法師とか？ んでも俺的にはコロボックルが響きとしてイイと思うんだよね。ってか、俺そいつの名前知らねえし。名前なんてエの？」

「……名前？」

彼の、名前。

身体を捻って彼の様子を伺うと、丁度こちらを見上げていた目とぶつかった。

「……」

「……………」

「……なァ。もしかして神父サン、名前も知らねェのに家に連れ込んでんの？ そりゃあんだ、ビミョーとは思ってたけどビミョーすぎだよ」

「連れ込むとか言うな、人間きの悪い」

「なーなーコロボックル。俺ユウヤ。唐橋裕也。名前、何？」

私のことを綺麗に無視して、ユウヤは首を伸ばして彼の視界に入ろうとする。

「教えてくれねェとコロちゃんとかボクちゃんとか呼んじゃうよ。大声で」

「ヤだよバカ！ 触んなよ！」

「んじゃ教えナサイよ。うりうり」

「うがー！」

お前ら、私を挟んでやり合うな。と言いたいと言っても無駄な気がする。ああ、労働の後の茶が美味い。

とは言え、確かに二週間余り相手をしていながら名前も知らないのは流石にどうかと自分でも思う。ので、無駄に構いたがるユウヤの手を止めさせて、私からも聞くことにした。

「あー。まあ、言いたくなきゃ無理に言わんでもいいが。聞いても良いか」

「……」

不満げなじと目だ。

「だってオレもおっちゃんの名前知らない」

教えた覚えはないからそうだろうな。

「あんたら揃いも揃って何やってんの？ 名乗るのは基本デシヨ、あいさつデシヨ、礼儀デシヨ。ってかコロボックルもさァ、懐く前に名前くらい聞けよ。相手がこの神父サンだからただのボケで済んでんだよ。あァもうどんだけツッコめばいいの俺は」

楽しげに嘆くユウヤのことは放っておくことにして。

「……ペトロ」

「それ洗礼名デシヨ。神父サンともあろう人が姑息な真似しな一い」

にやにやと笑うユウヤは、もちろん私の名前を知っている。加えて、背後から見上げてくる薄茶の瞳の圧力に負けて、私は渋々と本名を口にした。

「……………イズミだ。工藤和泉」

「イズミ?!」

「そォ、イズミちゃん！ 名前カワイイんだよねこの人！ 気にしないで言っちゃえばいいのにもったいぶるから余計カワイイんだよ、学習しナサイよ」

大笑いしたユウヤが、私の肩をばしばしと叩いてくる。

彼も目をまん丸くしてまじまじと私を見つめてくる。

ああ、似合わねえだろうさ。人間生まれた時から名前だけは自分で選べねえからな。親に文句

をつけられた身でもねえが、名付けのセンスだけは多少もの申したい。いい年になって若者からイズミちゃんとかからかわれる息子を思いやってくれ。

まあ、既に主の御許に召され済みの両親に言っても仕方ないので、私は黙って十字を切る。口の中で祈りの言葉を唱えると、少し心が落ちついた。

「ほら、イズミちゃんも名乗ったよ、コロボックル。お前は？」

イズミちゃんはやめろ。と言いたかったが、彼が名乗りやすくするためのユウヤなりの気遣いだと分かったので、溜息に留める。

彼は、私を見て、ユウヤを見て、もう一度私を見て、少し俯いた。

それから、ぼそぼそと小さな声で名乗った。

「シオン。……立原紫音」

「……なんだ、カワイイ名前コンビかァ！」

と叫んだユウヤの頭を、私は無言で殴った。

後悔はしていない。が、軽々しく暴力に訴えたことは後で主に許しを請おうと思う。

それから、彼——シオンと、私の間にユウヤが交じるようになった。

最初は怯えて警戒していたシオンも、ユウヤのあっけらかんとした悪びれのなさに段々呆れてきたようで、それなりに距離を測りながら接し始めた。時折他愛もないことで争い、そうかと思えば二人で息もぴったり私をからかい、その度に楽しげに笑い合った。

ユウヤはシオンが可愛いようで、実の弟のように扱った。遠慮なく構い、放り出し、気が向いたときには聖書の読み解きであってもとことんまで相手をした。ただし、気が逸れていることも多々あったけれど。

シオンは兄のように慕うとまではいかないが、それなりに気を許しつつある。けれど、どこか残る遠慮は、ずっと変わらない。何かに熱中している様子でも、時折ふっとこちらの様子を窺う。邪魔になっていないか、迷惑になっていないか、それだけを確認して、安心したら元に戻る。そして、遅くとも日が沈む前にはどこかへ帰って行く。

変わってンよなァ、とユウヤは笑った。

「あの年ならフツー、あんうかがい方しねえよ。大人なんてマジくだらねえもんに見えて、自分の方が絶対正しいって思いこむ方が多いだろ。好きに遊びほうけて、人のことも自分のことも気にもしねえ奴らが大半だ」

「経験者は語るか」

「あんたも経験者デショ、神父サン。悪ガキの頃がなかったとか言わせねえよ」

ピースを銜えたくぐもり声で、ユウヤは喉を鳴らして笑った。

「……まァ、俺もさァ。成人したっても相変わらずバイト三昧だし、あんまり立派な人生とか送ってねえから、エラソーなこと言えねえんだけど。あいつどーゆー大人になんのかなァ。ってか、どーゆー大人になりてえんだろーな。とかなんとかァ。柄にもなく思っちゃうわけデス」

“S”のアクセサリーを片手で弄りながら、ふうっ、と紫煙を中空に吹きかけるユウヤに、私は肩をすくめる。

「【知恵は、最初、お前を険しい道に連れて行き、恐れを抱かせて、おじけさせる。知恵

の試練は、お前を激しく苦しめる。知恵は、お前を信頼するまで、数々の要求を突きつけて、お前を試みる】」

「……えーと。そのココロは？」

「お前は今、お前自身の悩みを考えている。シオンを見ることによってより明確な知恵を得、同時に深い恐れによって試されている」

「えっ、俺の話？」

「最近よく来ていただろう」

そうだけど、とユウヤは苦笑した。けれど私の言葉に、否定は返さない。

「シオンはシオンの道を行くだろう。お前はお前の道を行く。その知恵はそれを真摯に助けてくれる。知恵に目を向けずいたずらに自分を恥じれば、お前はお前を見失う。……どうせなら、シオンに手本を見せてやるといい」

「……えー。神父サンらしくない無茶ぶりだね」

「【必要なときに発言するのをためらうな。〔お前の知恵を、見栄のために隠してはならない〕】」

「……俺の知恵をシオンに分け与えるのくらいケチるんじゃねえよってことね。はいはい」

ふてくされるユウヤに、私は微笑を返す。

「あらゆることから学ぶ姿勢を保つ者は、賢い。その賢さとお前の慈愛が必ずお前を救う。それまで目を開き耳を澄まして、耐えることだ」

「……ジアイ」

ユウヤは、何か甘ったるいものを口にしたようにもによもによと唇を動かして、ハハハと笑った。

「神父サン。あんたがどーやってシオンをたらしこんだか、ちょっと分かったカンジ」

「人間きの悪いことを言うな。それとステンドグラス磨け」

「奉仕活動を強要すんなよ」

言い合っている時に、シオンがやってきた。

何話してたの、と聞かれ、別に、なんでも、と二人同時に答えてしまって、ちょっとシオンの機嫌を損ねた。

その年の夏は、ひどく暑かった。

聖堂裏の木々に水をやる間にも、汗は絶え間なく吹き出した。

天からは光と熱と蝉の音が降り注ぎ、地からは夏草と土の濡れた匂いがする。

若者二人は、若者らしく半裸とショートパンツという格好で涼んでいる。ユウヤは襟足をカラフルなゴムで結び、“S”のペンダントを外さずに下げている。肩口や脇腹に引き撃れたような古い傷跡がいくつも見えた。力仕事で鍛えているという彼と並ぶと、シオンのはより細く、子どもの体に見える。シオン本人もそれが面白くないのだろう。悪戯に攻撃を仕掛けては、軽くいなされていた。じゃれあう中で時折ホースの前の中に飛び込んできては、見たこともない魚のように水しぶきを振りまく。

「ひゃー、キモチいー！ おっちゃんもそれ脱いじゃえば？」

「そんなわけにいくか」

「なんでえ？」

「メタボだからデシヨ」

「メタボなの?!」

「お前らなあ」

渋い顔をしながらも、私は自分の腹をさすってしまう。中年男の性だろう。

ああ、しかし彼らは本当によく笑う。なんの憂いもないように。生きていることが楽しくて仕方ないと言った顔で、歓声を上げ、喜ぶ。夏の日差しに輝く。

(【愛らしさや美しさを、人の目は慕い焦がれる。だが、いずれにもまさるのは、野に生える若草】)

彼らが眩しいのは刹那に失われる美しさの故ではなく、伸びゆく命の躍動のためだ。不自然に時を止められた人形ではないからだ。ビスクにはビスクの愛らしさがあり、移り変わり失われるものには耐え難い美しさがある。

今、私の目の前の命はそれらとは似て非なる。滅び行くさだめなど関わりなく、危うげも迷いもない強い光だ。ただただ命を燃やす鼓動だ。

なるほど、その時を生きる命、ということはいずれにもまさる。

「ユウヤ、おっちゃんがなんかニヤニヤしてて気持ち悪い」

「暑さでやられたんだろ。水ぶっかけてやれ」

「ラジャ！」

「やめろお前ら！」

「よし、そっちだ！ 回り込め！」

若者たちからホースを死守することがどれだけ大変か、知らない者はやってみるといい。

幸いにして、主の遣わしたと思われる御使いの手によって私は救い出された。要は、来客のチャイムが聞こえた。背後で獲物を逃がした肉食動物の舌打ちが聞こえたが、聞こえなかったことにしておく。

汗だくにはなったが、不審に思われるほどではない。私と同じ年頃で顔見知りの配達員は、暑いですねえ、と玄関先で笑った。彼も汗だくで、シャツの色が大半濃く変わっている。この熱気の中をバイクで回っているのだから、当然だろう。印鑑を取ってくるついでに冷えた麦茶を出してやると、私を拝むほど喜んだ。

「そういえば、神父さん。あなたのそこは大丈夫ですか」

「はい？」

「いや、少々若いもんが出入りしとるようだから。最近はねえ、夏休みだからかな。ほら、あそこの坂の上のでっかい学校あるでしょ。あそこの生徒が、ここらへんのふらふらしとる若いのとつるんでとんでもないことばっかするって、PTAが大騒ぎしとるんですよ。この間も車盗んで暴走したりコンビニに押し入ったり……」

何故だろう。似たような組み合わせの若いのが、聖堂裏で健康的に水遊びしてますよ、とは言いづらい。なんとなく。

そういえば何日か前に随分騒がしくサイレンが通った日があったな、と思い出した。その日は確かシオンもユウヤも来ていなかったの、ゆっくり過ごせた記憶がある。それだけに外の賑やかさは耳についた。あの二人なら、見物にでも吹っ飛んでいったらどうか。

「幸い死人は出ませんでしたかね。まだ捕まってないのがいるようで、パトカーがうろうろとりますわ。おかげで車はみんな行儀のいいことで」

汗を拭いながら笑う配達員に合わせて、私も笑う。

己の良心よりも、目に見える裁き手を恐れる時代。それを愚かとする教義を私は信仰しているわけだが、なんとまあ何千年も人とは変わらないものだ。大ベストセラーと称されるほどに聖書が流通しても、それを説く者がどれだけ増えようと、真から学ぶ者は少ない。

それに絶望するほど若くはないが、時折溜息はつきたくなる。

(【神の真理と契約の前で恥じよ】……か)

私自身、完璧に守れているとはうぬぼれられない。だからこそ自身の心を律し、他者を許したまえと祈ることで心の平穏を守っている。人の身に、人の子の境地は遠い。

「ご心配くださってありがとうございます。貴方に主の御加護がありますよう」

十字を切って祈ると、配達員は照れたような顔をしてごもごも何かを言い、配達物とコップを置いてそそくさと出て行った。

聖堂裏に戻ると、若者二人はシュロの木の本で眠っていた。水やりはちゃんと終わり、ホースの水は止められている。木漏れ日が金と薄茶の髪、それから水を弾く肌を光らせていた。満足げに疲れ切った顔で眠る二人は、まるで仲の良い兄弟だ。

「……いくら外から見えにくいったってよ……ったく」

愚痴のように零す私の声も、怒りは纏えない。奇妙に口元が緩むだけで、シオン辺りに見られたらまた気持ち悪いと言われるだろう。というか自分でもちょっとどうかと思う。

けれど。

「……【澄み渡る大空はなんと高く壮大であることか。天の姿はなんと栄光に満ちていることか】」

心地よく口ずさみながら、ホースを片づける。柔らかな風が繁る葉の間を渡っている。背後では子どもたちが安心して眠っている。夏の雲は白い。まるで手に取れそうなほどに。口元が勝手に笑う。満たされた時間の幸福さに。

「【太陽は現れ、燦然と昇り行き、宣言する。いと高き方の御業はなんと——】……？」

聖堂の、入口付近だった。奇妙に躊躇うような人影がうろうろとしている。痩せた、誰かに似た印象の男だった。怒ったような表情で唇を引き結び、門前から中を窺うように首を伸ばしていた。

「失礼ですが、こちらにご用ですか」

信徒でなくても、見学を望む人々が来ることはたまにある。だが、その男は私が声を掛けた瞬間に逃げた。何も言わず、顔を背けるようにして。

奇妙には思ったが、追うことはしなかった。

人にはそれぞれ事情があるものだ。救いを求めない時に手をさしのべるのは傲慢な業である。心が決まった時に扉を叩けば良い。

それきり、私はその訪問者のことを忘れた。

「全能の神、父と子と聖霊の祝福が皆さんの上にありますように。アーメン」

祈りの言葉で、日曜のミサは閉会となる。

その日、珍しいことにユウヤがいなかった。毎度毎度、柄の悪い格好で参加する金髪の若者の存在は少ない信徒の間でも非常に大きく知れわたっており、閉会後の信徒同士の交流会ではその話題で持ちきりとなった。

「皆勤賞が途切れましたねえ」

「あんまり真面目にやってる風でもないんですけど、誰より参加してたのに」

「でも、ちょっと柄が悪いから怖いですよ」

まんざら冗談でもなさそうに苦笑する女性信徒の言葉に、座に小さな笑いが生まれる。

「あれは確かに。今どきの若者らしいというか」

「服装も、言葉もだらしないし。大体フリーターってのも」

「キレたら何をするか分からないって感じですよ」

「わたしなどは目を合わせるのもちょっと……」

気弱そうな信徒が言え、大半が頷く。

噂話をしている本人たちに、悪意はない。彼らはただ、普段思っていることをそのまま吐露しているだけだ。己だけかと心に秘めていたことに同意を得られると、人は正義を感じて勢いづく。自分は間違っていない、自分は正しい。そのことに大きな喜びを感じ、置き去りにするものの存在に気付かない。

放っておくとユウヤの陰口大会になりそうだ。適当に発散したところで止めるか——と思っていたのだが。

「でも、あの子はいい子ですよ。この間ねえ、あたしにのど飴をくれたんです」

微笑みながら発言したのは、一番年長の女性信徒だった。私よりも遙かに年上で、多少足腰は弱いが一番熱心に参加してくれる。ここの信徒の中では珍しく洗礼も受けた、最古参だ。

彼女は、場の全員が話を止めたのを見て、皺を深く刻んで言葉を継いだ。

「その前の日曜日にね、あたしがちょっと咳をしたのを覚えてたんですって。ばあちゃん、もらいもんだけどこれあげる、って。まあびっくりしちゃって、お礼も言い損なっちゃって」

ユウヤ本人は、彼女を気遣ったと言うより思いついたことをそのままやっただけなのだろう。特に反応は気にせずそのままさっさと行ってしまったそうだ。その次の週に、彼女がお礼を言ったとき、ユウヤはきょとんとしていたらしい。

「それでね、お礼に小さな猫の紙細工をあげただけど、とっても喜んでくれて。若い人は興味ないかしらって思ってたのに、あたし嬉しくてねえ。なんて優しい子なんだろうって……」

あいつ、結構小さいもの好きだからなあ。小人とか。紙細工も本気で気に入ったんだろうなあ。

笑顔で語られる老婦人の話、場の雰囲気は変わっていた。喜びと共に人の善行を褒め称える老女には、よっぽどのがなければ反論しづらいものだ。それに元々ユウヤに悪事を働かれた

訳でもない。気まずげに顔を見合わせて、論調が変わった。

「ん……まあ、人は見かけによらないってことですかね」

「……なんだかんだ言って毎回ちゃんと来てるんですから、根は真面目なのかもしれないですね」

「ああ、そういえばこの間、弟みたいな子を連れてましたよ。楽しそうに面倒見てました。結構印象が違って、他人のそら似かと思っちゃって」

主婦をやっている信徒が笑った。

一緒にいたのは薄茶色の髪で、よく笑う可愛い男の子。娘と同じくらいだったから、多分中学生か高校生くらいの、と彼女は言った。

それは多分シオンだ。

「でも面倒を見るってよりは対等に遊んでる感じで、勝ったとか負けたとか騒いでましたけど」  
なにをやってるんだ、あいつらは……。

交流会はその後和やかな話題が続き、次回の参加を約束して終了した。

笑顔で帰って行く信徒を見送っていると、あの気弱な男性信徒が顔を赤くしながら最年長の彼女を気遣っているのが見えた。彼らは柔らかな微笑みを交わし、ゆっくりと遠ざかっていく。

「【わたしを大いに喜ばす三つのもの、それは主にも人にも麗しい。仲良く暮らしている兄弟、友情で結ばれた隣人、仲むつまじい夫婦】……」

天へ十字を切る。

主よ、感謝します。貴方の教えを通し、素晴らしい隣人と出会えたことを。

(……それにしても、あいつはなにしてんだ?)

ユウヤにも、急な用事が出来ることくらいはあるだろう。そうは思ったが、何故か釈然としなかった。それくらい、私の中で当然になっていたのだろう。シオンが来て、ユウヤが来て、好き勝手にくつろいで遊んで帰って行くことが。つい最近まではなかったその時間が。

聖堂の掃除を済ませて家に戻ると、電話が鳴っていた。旧式の黒電話だ。取り損ねたが最後、誰からかかってきたかも分からない。

慌てて取ると、受話器の向こうの声は私よりも取り乱していた。何か制するような声と、叫ぶ声が入り混じる。一つは聞き覚えがある声だ。シオンだ。

シオンが言った。

ユウヤが、警察に捕まった、と。

3.

警察署の中は、随分と騒がしかった。

といっても常態をよく知らないなので、意外と人がいるな、というのが正直な印象だ。まあそうだろう。ドラマみたいに刑事が全員出払ったとしても、内勤の人間はそれ以上にいる。というか、いないと不用心で仕方ない。

長机の設置された、会議室のような小さな部屋の中で待っていたシオンは目を真っ赤にして、私の姿を見るなり不満をぶちまけた。怪我は手当されていたが軽いもので、声の方が酷く嘎れていた。

興奮していて話があちこちに飛んだり省略されていたりで分かりづらかったが、ユウヤを待つ間に大体は聞き終えることが出来た。

元は、シオンが物騒な連中にしつこく絡まれたのが発端らしい。

ボロ着を来た細っこい、非力そうな少年だ。暇つぶしの玩具代わりにでもするつもりだったのだろう。シオンが怯えて逃げたか噛みついたかは分からないが、なんにしろ退かせるまでには至らなかった。

そのまま拉致されそうになったのを助けたのはユウヤだ。シオンを逃がして、そこで乱闘になった。

シオンは警察に通報して、ユウヤを助けるために戻った。

結果、その物騒な連中はおよそ逮捕されたのだが——何故かユウヤもシオンも一緒に捕まってしまった。というのが大筋らしい。

「あいつら、どうせ仲間だろって全然話聞いてくれなくて、ユウヤは違うって言っても信じてくれなくて、オレも疑われて、車盗んだのとか、誰か殴ったとか、全然知らないこと聞かれて」

悔しそうに話すシオンが、袖で乱暴に目の辺りを拭う。

シオンの疑いは割と早めに晴れたが、ユウヤは手こずった。なまじ体格が良くて、連中と対等にやり合えたのが良くなかったらしい。外見も手伝って内輪もめと見なされ、被害者及びシオンの保護者とは思われなかった。

疑いが晴れたのは、全員の取り調べが進んでからだ。巻き添えを狙ってユウヤも仲間だと嘘を吐いた者もいたようだが、プロの前で長く続くはずもない。

目撃証言も取れ、そこでシオンの必死の訴えがやっと認められて、事態が正しく把握された。

そこで一応身元引受人を、という話になって、私の名前が出たらしい。シオンはその電話に割り込んできたということだ。

「おっちゃん、オレ悔しい。ユウヤはいいやつなのに、ちょっと腹立つ時もあるけどいいやつなのに、なんで格好だけで判断されんの？ 金髪なんかにしてるからどうせマトモなやつじゃないんだろって言われたんだ。そんなガキだからろくなことしないって言われたんだ。ユウヤは、ちゃんと大人なのに」

——シオンは、真っ赤な目をしてしたが泣くのはこらえていた。

喋っていないと自分が壊れてしまう。そういう喋り方だった。何でも良いから喋って、両手を

自分で強く握りしめて震えるのを押さえて、横に座る私を見ることもなく床の一点だけを見つめて。

肩に手を置くと、細い身体がびくりと震えた。両手にもっと力がこもった。爪が食い込む音が聞こえる気が、するほどに。

両の掌の、傷は。そうやって作られたものか——。

「辛い思いを、したなあ。シオン」

「——っ……」

息を呑んだシオンの両手に、ぼとりと大きな雫が落ちた。次から次へ落ちてくるそれを、シオンが握りしめたままの拳で目を殴るように拭う。頭を振って、掠れた声を悲鳴のように絞り出す。

「ち——が、ちがう……オレじゃなくて、ユウヤが、ユ、ユウヤが、ごめんなさい、オレが悪い、悪いんだ、オレが絡まれなかったら、オレがあんなこと言わなかったら、オレがちゃんと、してたら、ユウヤは」

ごめんなさい、オレが悪い、ごめんなさい、とシオンは繰り返す。

ユウヤの無実を訴えて嘎れてしまった声で、ここにいないユウヤに謝りながら、オレが悪いと自責を繰り返す。

それは驚くほど強烈な自罰的意識だった。

先ほどまでの警察への批判は、ただの隠れ蓑だ。その下で、息苦しくなるほど自分を責めていた。

身を固く縮め、自分の目に拳をぶつけ、何度も何度も自分を責める。

それはまるで緩慢な自傷のようでもあり、自分に対する殺人のような行為だった。

今が初めてではないはずだ。邪魔になることと迷惑になることを極度に恐れていたこの子どもは、こうやって何度自分の中で自分を殺したのだろう。

「シオン」

呼びかけても、私に対する反応はなかった。許しを請うためではない、罰を求める謝罪の言葉が続く。しゃくり上げる呼吸が、ひきつけのように喉を鳴らす。声が掠れて途切れる。

声もなく、自分の命を呪う、子ども。

「シオン。聞きなさい。目を開けて、私を見て。……聞こえるか？ 私が分かるか？」

「……お——ちゃ、ん……」

「そう——ゆっくり、息を吐きなさい。お前が、自分が悪いと思っているのは分かったから。私が一旦預かるから、息を——ゆっくり、深く吐いて、吸って」

シオンは、なんとか誘導に従ってくれた。まだ目を塞いだままだったが、こちらの声は届いているし、私を拒絶してはいない。それが救いだっただ。

「……そう、そのままゆっくり続けて。——いいか、シオン。お前とユウヤは私が連れて帰る。ユウヤは無事だ。ああそうだ、力を抜いて——見えるか？ そうか。泣いてもいいから、目を開けて、息をして、聞いていなさい。ユウヤは無事に帰ってくる。お前はちゃんといい判断と行動が出来たんだ。ユウヤは帰ってくる」

「かえって、くる——」

「そうだ、帰ってくる。あいつは、あいつの正義を貫いたことを誇りに思っている。お前が訴えた罪は、司祭である私が預かる。ユウヤを褒めてあげなさい。ユウヤに報いてあげなさい。それは、全てを見ていたお前にしか出来ないことだから」

低く、極力刺激を抑えて囁く私の言葉に、虚ろだったシオンの目が僅かに動く。瞬いて涙を溢れさせ、私を見た。寄る辺のない子どもの薄茶色の瞳が、その手に掴むべき一本の葦を探している。

「ユウヤは無事だ。ユウヤは帰ってくる。ユウヤに報いてあげなさい。お前の真心に於いて無事を喜び、感謝を以てユウヤに天の祝福があるよう祈りなさい。それによって、私が預かるお前の罪はあがなわれる。——シオン、お前は私に告解をした。私はお前に対してつとめを果たす。お前も、つとめを果たしなさい」

「……は、い」

シオンは、ほうけたように呟いて涙を拭い、それから二、三度大きく頷いた。手はもう拳ではなく、力の抜けた平手になっている。

「父と子と聖霊の御名に於いて、主の御恵が訪れますよう。アーメン」

軽く十字を切ると、シオンはたどたどしく、小さく真似をした。それから祈るように俯いて、身体を小さくゆらした。

多少落ちついてくれた様子に、私も安堵の息を漏らす。

「……お前たちが無事で良かった。お前とユウヤが無事で、私は嬉しい。よく頑張ったな」

「ユウヤが……」

「ああ。ユウヤもよく頑張った」

シオンが、大きく頷く。何度も。それから、私の腕に頭を預けて、しばらく涙を拭っていた。

ユウヤが私たちの元に戻ってきたのは、シオンが泣きやんで落ち着き始めた頃だった。ぽつぽつと一言二言会話はしたが、大したことは話していない。大半は、シオンの謝罪だった。

廊下から話し声が聞こえ、シオンがぱっと立ち上がると同時に扉が開いた。

「ユウ」

「あっ、やっほーう神父サンにコロー。ユウヤ上等兵只今帰還セリ。本日ハ浪高クシテ後なんだっけ忘れたな。あ、ごっめんなー、心配した？ してくれた？ 大丈夫っつーたのに、あア俺愛されてる？ そっかそっか、よしよし。あーでもあれだねー、取り調べてなっげエよねー。うあーもーなんか久しぶりに禁煙した気分。あ、俺のタバコあっちか。神父サン持ってねエ？

持ってるわけねエかハハハ」

……無事と言うよりは、無駄に元気だ。

頭や腕に多少包帯を巻いてはいるが、動いて痛がることもない。唯一、絆創膏の貼られた口の端だけが痛みを主張するように赤い。ユウヤの服にしては多少地味なシャツは、ボタンが飛んで少し裂けて、ジーンズが砂埃で白く汚れていた。変化といえばまあそれくらいだ。

私の隣では、シオンが真っ白になって立ちつくしている。

まあ、あれだけ取り乱して心配し続けた相手がこんな軽い態度で現れたら、そりゃこうなるだ

ろうな。

「ゆ……ゆーや……」

「んー何ー？ あっ、怪我手当てして貰ったんだ？ ちゃんと婦警サンだった？ 美人だった？  
ここの婦警サンって意外とレベル高エよな！ 取り調べもやってくれたら良かったのにー。他のこともしてくれてもいいのにー。そしたら俺ずっといてもいいのにウヒヒ」

ユウヤの後ろから、中年の男が苦笑しながら入ってくる。無精髭を生やしていて、目つきは鋭い。けれど、その目元を和ませると意外にも人懐っこく見える。山本と名乗ったその刑事は、軽く会釈しながら部屋をちらりと見渡した。

「ええと、身元引受人の工藤和泉さんは……？」

「ああ、私です。唐橋がお手数おかけしまして」

立ち上がって頭を下げると、山本刑事は妙な顔をした。その顔のままユウヤを見る。ユウヤは、にやあっと笑った。

「俺の大好きなイズミちゃん。カワイイっしょ？」

「お前っ、騙したな！」

「ダメしたとかそんな人聞きの悪いー。俺ウソはついてないもん、イズミちゃんは本名イズミちゃんだもんー。『聖服』だって似合ってるデショ」

快活に笑うユウヤと憤慨する刑事の、おそらく雑談で交わしたのであろう会話が容易に想像出来てしまう、そんな自分がちょっと哀しい。

「……唐橋がすみません」

何故私が謝らなければならないのかは分からないが、なんとなくそうしなければならないような気がして謝った。刑事は、こちらこそ、とかなんとかもごもご言いながら頭を下げ、ユウヤをちょっと睨んだ。

この場合、刑事か私がユウヤを殴ったら傷害罪になるのだろうか。聞いてみたかったが、聖服姿でそれを聞くのは少し躊躇われる。

「……の……」

俯いていたシオンが、小さく囁いた。ユウヤが首を傾げて、少し屈んで顔を覗き込む。

「おオ？ どした、コロ？」

「ユウヤのバカー！！」

止める間もなかった。

シオンの見事な右ストレートがユウヤの鳩尾に入った。

力ずくのケンカとは程遠いと思っていたが、なかなかやるものだ。いやそれよりも。

「今のは傷害罪とかになりますか？」

「いやあ、あれくらいならかわいいもんですよ。もし本人からの訴えがあったら、ワタシが処理しますし。穩便に」

「それはそれは」

にこやかに交わす私たちの会話を聞いたのか、床に沈んだユウヤが、ひでエ……と呻いた。

「……そう思うんなら、手段を改めろ。自分で仕向けといて文句を言うな。シオンみたいなタイプには通じねえんだから」

手を貸しながら声を低めて笑った私に、ユウヤは歯をむき出して破顔した。

「そォ？ んじゃ寛大で優しい神父サンには俺のとおきの聖書を寄贈シマス」

「卑猥な本を主の御許に持ち込むんじゃねえよ」

「イズミちゃんたら怖エくれエ俺のこと分かってんのね」

「悔い改めねえな、お前は」

ユウヤは、ごめん、と肩をすくめた。笑い顔は相変わらず屈託ない。

殴られた腹をひとなでして立ち上がり、シオンにちらりと視線を流して、私に肩をすくめてみせる。

「謝ってくる」

「そうしろ」

シオンは、ユウヤなんか知らない今帰るすぐ帰ると言い張って入口付近で刑事に宥められている。まだ怒っているようだった。だが、ひどく自分を責めていた時の痛々しい表情はない。ユウヤが謝れば、少し意地は張ってもちゃんと許すだろう。あいつが本当にまともに謝ればだが。

さて、私の役目も済んだ。二人を連れて帰って、放り出してきた諸々のことを片づけなければならない。今日のミサの報告書と、明日からの平穏な日々の準備と、ああそうだ、シオンの手も手当してやらねえとな。

部屋の扉が開いた。

ユウヤがシオンに声を掛ける直前だった。

入ってきたのはユウヤより少し上くらいの男性で、きちんとしたスーツを纏っていた。手には黒いアタッシュケースを持ち、案内してきたらしい背後の人間に軽く会釈した。

その顔を見て、私は既視感に瞬く。

怒ったようにつり上がった目と引き結んだ唇。痩せぎすの顔立ち。誰かに似ている。そしてそれ以上に、私はこの男を見たことがある。

(——聖堂の、前で)

一番近くにいたシオンが顔を上げ、さあっと顔色をなくした。

「……あ……」

引きつったような小さな声が私の耳に届くのと、どちらが早かっただろうか。

シオンによく似たその男は、何も言わずにシオンを殴った。

手加減は、感じられなかった。

外では、ツクツクハウシが鳴き始めていた。

まだ暑い。それでも、真夏のように二十四時間暑いということはなくなりつつある。早朝や夕方には、冷えた風が吹くこともある。稀にだが。

セミの最後の合唱の中、ユウヤと私は沈黙の内にいた。

テーブルの上には一通の手紙が放られている。なんの変哲もない白い便せんと封筒だ。小さな文字が、丁寧に綴られている。宛名は、工藤和泉様。それから、唐橋裕也様。送り主の名前は、立原紫音。住所はない。

「……ミサにさア。行ってみようかなアつつったんだよね。あいつ」

長い間話すことを忘れていたような声で、ユウヤが呟いた。独り言のようで、こちらに届いていようが届いていまいが気にする様子はない。椅子の背にだらりと身体を預けて、仰向き加減にピースをふかしている。心なしか、金色の髪もくすんで見えた。

「ほら、あいつ人見知りのケがあンだろ。だから、知らねエ奴らの間に入るとか紹介されるとかすっげえいやがったんだよね。ンでも、あいつの方から、行ってみようかな、なんつつたもんだから」

——いつも、教会の外から聞いてたりするけど。セミの声がうるさかったり車が通ったりして、聞こえない時もあるんだよね。後でおっちゃんに聞くのもなんか悪いしさあ。そんで、中で何してんのかも良く見えないし。

「だから、俺もね。おオいいんじゃねエ？ つつって。他の信徒だってみんなイイ奴らばっかだし、あアそーいえばさア、最近なんかみんな俺に優しくねエ？ 気のせい？ まアそれはいいや、ともかく、喋るのがハードル高エならまずそこにいてみりゃいいデショ、俺がフォローしてやるから、つつって。そしたらなんか盛り上がってさ。折角だからあんたのこと驚かしてやるっかって」

私に何も知らせずにこっそり行って、礼拝席の一番前に。好きなときに好きな場所に座るユウヤはともかく、シオンがそんなところにいたら、そりゃあ私は驚いたろうな。自分で驚き具合が想像できる。多分礼拝席を見た瞬間に数秒は固まる。その間の抜けた感じは、さぞかし二人を喜ばせただろう。

紫煙を漂わせるピースが光って、短くなる。ユウヤは億劫そうにそれを灰皿に押しつけて新しいタバコを取り出した。

「一本いいか」

私が手を伸ばして一本拝借すると、ユウヤは意外そうに私を見た。

「あんたはやんないのかと思ってた。禁煙してただけ？」

「いや。美味いとも不味いとも思わねえだけだな」

「それ吸う意味あんの？」

「気分だ」

ナンダソレと笑いながら、ユウヤは火を点けてくれた。

かなり久しぶりに喫んだ味は、記憶にあるものと違った。銘柄が違うからなのか、時代につれて中身が変わったのか、それは分からない。舌の先でフィルターがざらつく。相変わらず美味いとも不味いとも思わない。白い煙だけが、私の目の前を昇ってゆく。

「……ミサ前に、俺、早朝バイトあったから。あいつと待ち合わせて、あんたに見つからねエように中に入ろうつつってね。ほら、真田サンとかさア、けっこー早く来て一番前にいたりするデショ。それわざわざどいてもらうのもなんだから、そこそこ早めに行かなきゃなあって。……ンでも、そーゆー時に限って、上手く出られなかったりするんだよねエ」

ユウヤは予定よりほんの少しだけ遅れて、バイト先を出た。それが明暗を分けた。

シオンは、出会うはずのなかった朝帰りの集団と出会うことになった。

その時間は、本来ならもうユウヤと落ち合っ聖堂へ向かっているはずだったのに。

「……それは、悪イことしたなァ、って思うんだよね」

私は白くなった灰を、テーブルの上に置かれたユウヤの携帯灰皿に落とす。

「——告解なら、タバコは不向きだったかな」

「いやァ？ ただの世間話デス。深刻にならないで」

笑うユウヤの声に、セミの音が被って響いた。

ユウヤも灰を落とし、ついでに手紙をさらっていった。本紙だけの手紙だ。礼紙はない。世の中エコが流行っていて、白紙の二枚目は無駄と思われるらしい。シオンがそれを知っているかどうかは知らないが、手紙の内容から言えばまあ間違っではない。

ちっせエ字だよなァ、とユウヤが笑う。それから、読み上げる。

工藤和泉様。

唐橋裕也様。

小さく縮こまった字で始まる手紙には、挨拶文もない。

『この間は迷惑かけてごめんなさい。

ずっと甘えてしまっていてごめんなさい。

オレは元気です。裕也の怪我は大丈夫ですか？

母と兄から、もうそちらにおジャマしてはいけない、と言われました。オレもそう思います。

おっちゃん和裕也といるとすごく楽しくて、このままいられたらいいなあと思ってたけど、やっぱり駄目でした。

オレのわがままで二人のジャマしちゃいけないと思うから、でも会いに行くとうまく言えないと思ったから、手紙にしました。

たくさん優しくしてくれてありがとう。

おっちゃんにも、裕也にも、神のみめぐみが訪れますように。（……で、いいのかな……ごめん）

元気でね。さようなら』

「……ご感想はァ？」

投げやりに、つまらなそうに、手紙から目を離さないユウヤが口を尖らせる。

「感想も何も。あの子が決めたことに私が何を言うんだ？」

「うっわ、冷てエ。ナニソレ。あるだろ色々。こんなんフツーに考えてあいつの本心なわけねエだろ。どー考えても書かされてるだろあの兄貴によ」

「さあな。そりゃ分からねえ。例えそうだとっても、それも含めてあの子の決断だ」

「なんっだその逃げ口上。あんた自身に思うところはねエのかよ。決めたのがあいつにしろうじゃねエにしろう、あんたにまったく関係ねエなんてことがあるかよ。それとも神父サマには俗世のことはどーでもいいってか。あいつがああのクソ兄貴のせいで抑えつけられて苦しいのが何しようが関係ゴザイマセンってか。いいご身分だねエ」

苛々とまくしたて、叩きつけるようにテーブルに手紙を置く。鋭い緑色の目が私を睨みつけて、急に息を呑んだ。私が黙っている間に、ユウヤは視線を泳がせ、落ち着きなく指の先でテーブルを叩き、あーとかうーとか呻いた挙げ句に髪を掻き回してテーブルの上に身体を沈めた。

「ごめん、言い過ぎた。そんなわけねエよな……マジごめん」

.....私は何も言っていないのだが。

口を開こうとして、自分がタバコを銜えていることに今更ながら思い当たった。

普段し慣れないことをしている者は、おおよそにおいて何か動揺している。ユウヤが急に態度を翻したのはこれのせいかと思うと、タバコを貰ったことが至極不思議に思えた。

ユウヤに言ったことは真実だ。あの子の決断に関して私が言うことなど何もない。けれど、ユウヤは私の中に動揺を見出している。

私の中に、本当にそんなものがあるのだろうか。探ってみても、奇妙に冷たいものが触れて居心地が悪くだけで、答えは出ない。

「.....お前は、気に入らねえのか。ユウヤ」

声と共に息を吹き込まれ、タバコの先に赤い光が明滅する。そんなことがやけに目につく。

ユウヤは、当ッたり前だろ、と勢いよく身体を起こした。

「あんな兄貴、信用出来るかよ。いくら家族だからって言って悪イことだってやって悪イことだってあるだろ。話も聞かねエでシオンだけが悪イみてエな、あんなやり方あってたまるかよ。ああ胸くそ悪イ」

乱暴に椅子の背に身体を預け、ユウヤは口を歪めて吐き捨て、フィルターを噛みつぶした。

ふつつつと心の奥を沸かせるユウヤの憤りは、あれから四日ほど経った今も冷めることを知らないらしい。

「——この、馬鹿が！ どれだけぼくらに迷惑を掛ければ気が済むんだ、お前は！」

苛烈な怒声だった。

一瞬の沈黙は、その怒声を受けて更に凍りついたように見えた。

山本刑事も、ユウヤも、もちろん私も。長机にぶつかって身を縮めたシオンと、その目前にあって乱暴にシオンに手を伸ばす男のことを、ただ茫然と眺めて立ちつくした。

「いくつになってもこんなみっともない格好をして！ そんなことだから警察に捕まるような馬鹿になるんだ、馬鹿！ 死ね！ 大体母さんが甘やかして育てたりするから凶に乗ってるんだろう、だからお前は駄目なんだ！」

髪を掴まれ怒鳴りつけられたシオンは、言葉も失うほど怯えている、ように見える。それを無視と取ったか、男は更に頭に血を上らせたようだ。

「聞いてるのか馬鹿！」

もう一度手を振り上げられ、シオンが目に見えるほどびくりと身体を震わせる。

鈍い音がした。

振り上げられたその拳を、ユウヤが掴んで止めていた。

「.....何してんだよ、シオンに」

低い声に、男は鼻白む。じろりとユウヤを睨んで、なんだお前は、と言った。

「なんだじゃねエよ。テメエが誰だか知らねエけど、シオンに何してんだよ。あァ？」

眉間にしわを寄せて怒りをあらわにするユウヤに、男はひどく嫌悪の籠もった目を向けた。

「.....自分の弟に躰をして何が悪い！ ッツ、離せ、ごろつきが」

「しつけれ？ 暴言吐いて殴りつけるのがしつけれかよ。バカはデメエだ、ふざけんな」

「こいつにはこのくらい言わないと効かないんだ。何も分からずに口を出すのはやめてくれ。まったく、ろくでもない知り合いばかり作って、恥知らずが」

「ンだとオ？」

「おい、待て待て」

「ユウヤ、よせ」

暴発寸前の危うい空気に、刑事と私が慌てて割って入る。

引き離されてユウヤは渋々男から手を離し、男はシオンから手を離した。

男は、立原久音と名乗った。

シオンの兄だと言い、山本刑事には礼儀正しく頭を下げ謝罪をしたものの、私とユウヤには目もくれない。シオンを振り回すように引っ張って私たちから遠ざけ、その首を押さえて頭を下げさせる。

私は私でユウヤを抑えるのに精一杯だ。シオンのことも心配ではあるが、目の前で起こりそうな暴力事件を放置する訳にもいかない。なるほど、さっきシオンが行った殴打など可愛いものに違いない。

困っているのは山本刑事もだった。シオンは被害者側の人間だ。あたかも悪事を起こしたように謝られても、受け入れることは出来ない。立原久音は、謝罪は丁寧であったが人の言葉には聞く耳を持たなかった。それは、怒りに身を任せた者にまますることだ。

やがて刑事との話が終わり、立原久音は私たちを一睨みしてからシオンを乱暴に引き立て、部屋を出た。

ユウヤを刑事に預け、私は後を追ってシオンに呼びかける。

「シオン。落ちついたらまた捜査協力があるだろうから、今日はゆっくり休みなさい。提出用に怪我の状況を書きとめておくといい。ご家族にもちゃんと説明して、安心させてあげなさい」

シオンは少しだけ振り返って、強張った目で私を見た。

立原久音は振り返らなかったが、苛立たしげにシオンを掴んでいた手の力を緩めたようだった。

立ち去っていく二人を見送った私の背後で、山本刑事が咳払いをする。

「困りますね、工藤さん。勝手にワタシどもが呼び出しをかけることにされては」

振り向くと、苦笑する刑事と戸惑った顔のユウヤが立っていた。山本刑事はユウヤの腕をしっかりと拘束してシオンたちの後を追えないようにしている。

「.....すみません。偽証罪になりますか」

「いやあ、いいんじゃないですかね。ワタシもね、子どもが殴られるのはあまり良い気分じゃない。お気持ちはお察しします」

山本刑事はからりと笑い、ユウヤの拘束を解いて私の方にぽんと押し出した。

「ほら、お前も帰れ。あんまり工藤さんに苦勞かけるなよ。この人に見捨てられたらお終いだぞ」

冗談を解してくれる山本刑事に深く頭を下げ、私は毒気を抜かれたように大人しくなったユウヤを連れて帰った。

そうして、私たちはシオンと別れたのだ。

私は、あまりにも無力だった。

嘘を吐いてさえ、あの子のためにしてやれることは僅かすぎた。

私が引っかかっていることがあるとするなら、そういうことなのだろう。その身に落ちる暴力と言葉の刃に怯える子どもを、守る力もない。そういう自分が嫌なのだ。その考えは、余計私を腐らせた。そんな馬鹿な自己嫌悪のために、美味しくもないタバコを貰い受けてユウヤを相手に韜晦している。

「……立原久音は、日常的に暴力を振るう人間じゃない」

「どうだか」

「お前が一番分かるだろう。人を殴り慣れた拳は荒れて固い。人前なら狡猾に手加減もしてみせる。……あれは、一時の激情だ」

ユウヤは、不快な何かを思い出すように眉間にしわを寄せた。振り下ろされる拳を止めたとき、ユウヤには分かったはずだ。その力に理性による加減はなく、それと同時に慣れない暴力を振るう恐怖と、それに目を瞑る虚勢もあったことが。

「シオンの身体に、虐待の痕はない。酷い自傷もだ。……まあ、あまり樂觀するのもどうかと思うがな」

水遊びをしていた時のシオンの身体。細くはあったがやつれてはおらず、傷も痣もなかった。なんの躊躇いもなく私たちの前で肌を晒した。虐待を受けている者に、そんな真似は出来ない。人に言えない傷を持つ者は、常に傷を隠し続ける。まるで償いきれない罪を隠すかのように。——その心に抱える闇を、恥じるかのように。

「だからって、放っとくのかよ。勝手に縁切られて、ハイソウデスカって受け入れるのかよ。身体に虐待がないから大丈夫とか、そんな理屈つけられたって俺は納得いかねえな」

むっつりとしたユウヤの言葉に、私は口元を緩めた。

「【誠実な友は、堅固な避難所】——か。シオンに必要なのは、お前のようだな」

「あァ？」

すっかり短くなったタバコをユウヤの灰皿に押しつけ、私は立ち上がった。

「どこ行くんだよ」

訝しげなユウヤの問いに、聖堂、と答える。

「スタンドグラスを磨く。帰るんなら適当にしといてくれ」

「……あんた、それすっげえ気になってんだね。ずっと」

呆れたように呟くユウヤに手を振って、私は聖堂へ向かった。

ユウヤがいつ帰ったかは分からない。

スタンドグラスは、丸一日の時間をかけたところでピカピカになった。

## Father, Sheep, and the King epi.1-4

---

4.

それから、ユウヤと話す機会もあまりなくなった。

ミサの時にはちゃんと顔を合わせていたが、お互いに心地良い話題など今はない。無視と言うほど冷たくはなく、屈託ない笑顔を交わすほど何も思っていないわけではない。

その代わりというわけではないだろうが、ミサ後に他の信徒と親しく話す姿を見た。そこではいつも通り快活に笑い、おどけ、祖母のような年齢の最年長者に頭を撫でられていた。彼女は苦勞を重ねてきたからか、人の痛みに聡い。ユウヤは複雑そうな顔をしていたが、若者の導き役としては彼女は申し分ない。

ユウヤには心配はいらない。そのことは少しだけ私の心を軽くした。

「……マジで？」

ある日曜日の早朝、ひどく頓狂な声を耳にして、私は聖堂で捧げていた祈りを中断した。あれはユウヤの声だろう。ミサに来るのはおかしくないが、随分と早い。よもや時間を忘れすぎたかと時計を確認したが、やはり早すぎる。

入口の方を窺うと、女性の手を引くようにして急ぎ敷地を出るユウヤの背中が見えた。

あれは多分同じ信徒の一人——だろう。ちらりとしか見えなかったが。確か娘のいる女性だ。何をしてるんだと気にはなったが、後を追うことは出来なかった。

理由は単純だ。珍しくもやる気のある信徒が、人を連れてミサの準備を手伝いにやってきた。初めての参加を決めた友人に、少し段取りを教えてあげたいという。断る理由はない。

その後、いつも来る時間にやってきたユウヤはどこかそわそわしていた。

特に熱心ではないのはいつものことだが、終わると同時にどこかへ吹っ飛んで行ったのは初めてだ。次のバイトの時間でも差し迫っていたのだろうか。

この時の私が、色々と考えることに疲れて思考放棄していたということは否めない。自己嫌悪というものはかくも容易く人間の中のエネルギーを奪い去る。今はどうにもならないことを考える、ということも。

シオンは、どうしているだろう。

強すぎる自責を抱えて、また自らを傷つけてはいないだろうか。

そうして気にするには、私はあまりにもシオンのことを知らなかった。住まいも、連絡先も、学校に在籍さえしているのかも、何もかも。

なんのことはない。私は彼の良き隣人であるには、あまりに怠惰だった。私が関わったところでどうなるものでもないという思いもあった。目も耳も塞いだように、一皮剥けば何も感じていない私がいる。

そういう私に、私自身が失望していた。その失望に疲れ果てていた。

それだけだ。

ユウヤから唐突に電話があったのは、その数日後だった。

俺俺、から始まる、ある意味詐欺かと思うような語り出しで、それでもまくし立てられる言葉

は確かにユウヤ以外の何者でもない身勝手な内容だった。

『あのさ、今ヒマ？ ヒマだよな？ そしたらさ、四時に駅前に来てくンねエかな！ あっ、聖服じゃなくてね。なんか俗世っぽい格好で、んでも怪しくない服で来てよ！ 説明とか後ですからさ、ああごめん、ちょっと人待たせてツから、後でね！ 四時ね！』

勢いよく通話が切れた後に流れる電子音を聞いて、私は受話器を眺める。電話番号を知らないで、かけ直して問いつめることも出来ない。……する気力もない。

「聖服でなく怪しくない格好ってどういう意味だ。お前じゃあるまいし、私がいつそんな妙な服を着たんだ。そもそもその言い方だと聖服も怪しいことになるじゃねえか、なんだそりゃ」

ぶつくさと独り言で文句を言いつつ、時計を見る。今は一時だ。駅前まで徒歩で二十分。ということはかなり間がある。

やるべきことを済ませ、のろのろと準備をし、駅へ向かったのが三時半。

ユウヤの言う『怪しい』の基準がどこにあるかは分からなかったので、普通のスーツにした。平日の夕方にうろうろしていても特段目立たない、ダークグレーのスーツだ。

何故私は諾々と言うとおりにしているのだろう、という疑問もあったが、考えることは面倒だった。後で説明があるというなら、行けば分かるのだろう。

特に遅れもなく、駅前に着いたのが指定の十分前。かなり待たされる覚悟で、ポケットサイズの聖書も持ってきた。

小さな駅ではあるが、無人駅ではない。自動券売機だって自動改札だってちゃんとある。電車移動をあまりしないので、使い慣れてはいないが。

バスも止まる広場には古びた銅像が一体建っている。この地域出身の文化人で、全国的に有名とはいかないものの、住人に聞けば大体九割は知っている。敬意と言うよりは親しみを込めて、じゅんさん、と呼ばれていた。本名は確か全然違うはずだが。

駅前、とは言われたものの、どこという細かい指定が全くなかったので、私はその銅像の近くで待つことにした。

学校や職場から帰ってくる人々が駅から出てくるには、まだ少し早い時間のようだ。辺りは閑散としていて、先客は一人だけだった。彼も誰かとの待ち合わせのようで、銅像前の長ベンチに座って文庫本に目を落としている。

軽く会釈をして少し離れた隣に座った私に、彼は柔らかく微笑んだ。

黒く爽やかな襟足の短い髪に、縁なしの眼鏡。秋の気配を感じさせる落ちついたトーンの服装で、さながら文学青年とでも言える雰囲気だ。服に隠れた体格はいいようだが、それを感じさせない。すらりと長い足を品良く組み、纏う空気はひどく穏やかで、それでいて人目を引くような華がある。

なんにせよ、騒がしい隣人でないことは助かった。

四時まで後数分はある。私もゆっくり待つかと聖書を取り出しかけた時、傾きかけた日が、何かに反射して鋭く目を射た。

光っているのは、文学青年の胸の辺りだ。何かのペンダントのようで、ちらちらと光を弾いて揺れている。

(……………?)

そのペンダントの形には、見覚えがあった。どこで見た、と考えることもない。

それはアルファベット一文字だ。イニシャルはKとYなのに、何故かその一文字を身につけて離さない奴がいる。

——“S”の。

思わず青年の顔を見ると、彼もこちらを見ていた。口元は笑いをこらえるようにひくつき、眼鏡の奥の黒い瞳は期待に輝いている。目を見開いた私を見て、口元が見慣れた形ににやあっと緩んだ。

「……っ、ユ、ウ、ヤっ……?!」

「うははははは！ やっと気が付いた！ どォよ俺の好青年ぶり！ イケるっしょ、ってかあんたダメせるなら満点、カンペキ、パーフェクツ！ おっしゃあ！！」

両手を突き上げて勝ち誇るユウヤに、私は言葉もない。なんで、とか、髪、とか意味もあまりない単語を並べるのにつかえた挙げ句、むせてひどく咳き込んだ。

小躍りしながら高笑いをするユウヤは、そうしていると確かに正しくユウヤだった。金髪緑眼でも趣味の悪い派手な服でもない。ピアスは外して穴を黒髪で隠してある。じゃらじゃらとつけていたアクセサリは“S”のペンダントだけに留まり、何度見ても全体的に大人しい。が、中身はそのままだ。外見から感じる穏やかな雰囲気、笑って喋って踊る様子に凄まじいギャップを与える。

「ってかさァ、マジ気が付かねェんだもんなァ！ 俺どんくらい待てばいーんだって思ってちょっと焦っちまったよ。あっははは、うわー気分いいー。完全無欠に驚かしてやったぜヒャッホー」

「な、ん……そ、ゴホっ……、わ、私を驚かすためだけに、やったのか……?!」

まさかと思いながら訊くと、ユウヤは眼鏡を押し上げながら、まさか、と笑った。上機嫌に懐からピースを取り出して銜え、火を点ける。紫煙がゆるりと立ちのぼる。

「まァあんたを驚かすのも面白エとは思ったけど？ なんでわざわざここまで来て貰ったか、ってことデスよ。あんたを教会まで迎えに行ってるちょっとタイムロスすぎるんで、ここで待ち合わせたの。向こうにクルマ止めてあるからさ、来るつもりなら乗って。悪ィけど二度は誘わないよ。あんたがどうしたいかを聞かせてよ」

「……何の、話だ」

ショックも覚めやらぬ私に、ユウヤはにいと口角をあげる。夕日に照らされて、確固たる影が落ちる。格好つけて前髪を払う。

「モチロン。我らがコロボックル・シオンくんに会いに行く話、デスよ？」

それは偶然だった。

偶然だったけれど、不思議な力が働いているようにも見えた。

以前、ユウヤとシオンを見かけた、と言った、あの女性信徒。彼女の娘が、シオンを見知っていた。たったそれだけの、偶然だ。

「なんかさァ、俺が元気ないってみんな心配してくれててね。あァ、あんたの話も出たよ、言っ

とくけど。なんでかは自分で分かると思うけど。それで、言ってもしよーがねエかなーとは思ったけど、シオンの話をしたんだよね。俺のコロボックルがどっかに消えちゃったのよーってさ」  
「……驚いた。ちょっとは進歩したじゃないか」

私の評価に、ユウヤは眉を下げて苦笑した。

「ありがとー、つつっていいの？ まあ、とにかくさ。その時に斎藤サンが、前に一緒にいたあの子？ って言い出して」

斎藤さんというのは、その女性信徒の名前だ。

「知ってんの？ って訊いたら、その時は俺らのことどっかで見ただけだったらしいんだけど。この間の日曜にさ、ミサ前に声かけられて。どうもあの子の娘サンがシオンと同じ学校らしいんだよね。学年は違うんだってよ。んでさア、女の子って写真ってのがけっこー好きだったりするデショ。なんか、隠し撮り？ みたいな感じでね、ちょっとよさそーな先輩とか同級生とか、そーゆーのを無邪気に持っていたり見せあったりしてたみたいなのさ」

その写真の中の一枚に、シオンがいた。何人が映っているスナップだったから、その子の目当てが誰なのかは分からないけれど。気弱そうな表情で、大人しく隅っこにいるようなその少年は、それでも確かにシオンだった。

「それをたまたま斎藤サンが見て、あらこの茶色い髪の子って、なんて言ってみたら、おかーさん立原センパイのこと知ってんの？ なんで?! とか言う話になったそーで。それで俺の方に、あの子ならうちの娘と一緒に学校だったわよーってわざわざ教えてくれたンデス。ってエことで立原紫音くん、涼風館高校二年生、自転車通学の帰宅部。成績は中の上ランク。ちょっと大人しくて頼りなさげだけど、笑ったときの可愛さが上級生と下級生からチェックを受け始めて特に最近人気花マル上昇中。ケーキセットと引き替えに住所も電話番号もゲット済みです。褒めて褒めて」

「涼風館……」

「割と近いよねエ。坂の上のあそこデショ。まあシオンがあんたんところに足繁く通って来れてたんだから、あり得ねエことでもねエわな」

頭を抱える私に、ユウヤはからからと笑う。

確かに、うちからは一番近い学校だ。何も分からないと思いきんで、意識から外していた。『怠惰だった』どころではなく、現在進行形でただの怠惰と断じられても仕方ない。

「まア、あそこは生徒数も多いしね。この間パクられたガキどもだって、同じ学校でもシオンとは面識なかったみたいだし。まともに調べようと思ったらやっぱ難しかったと思うよ。今は個人情報管理とか厳しいし……つとオ」

ユウヤは腕時計を見て、もたれていたベンチの背から身体を起こした。

「ってエことでよ。シオンくんには会いに行けるよ、神父サン。あいつが来ねエならこっちから行くしかねエし、俺は準備をととのえました。とつつかまえるなら、学校終わりの家に帰るまで勝負デス。あんたはどうしたい？ 離れるのはあいつの決めたことだからって余裕かましてみる？ それならそれで、俺は一人で行くよ。他の情報もあんたには教えねエ。あんたにはシオンが必要ねエってエことだからね」

突きつけられた言葉に、私は一瞬、息を止めた。

友人関係は、一方的では成立しない。

懐いてきたシオンを受け入れるのも突き放すのも、私の自由だった。その上で、私は受け入れた。

今、シオンは私を拒否している。ベクトルは全く違うが、それは私に対する意思表示という点で同一のものだ。

それはシオンの自由だ。そして同じようにそれを受け入れるのも、拒否するのも、私の自由だ。

私から、お前の良き友でありたいと、シオンに言う。それは簡単なことだ。——そのはずだ。ユウヤが、いつもと違う黒い瞳を細めて促す。

「今、決めてよ。あんたも考える時間は充分あったデショ。俺はこのまま何もしねエであいつの手を離すのは嫌だ。あいつが嫌がっても、嫌だ。だから会いに行く。あんまり強情ならケンカする。それをやりに行くんだよ。——あんたは、どうしたい？」

さァ、あんたも覚悟を決めろ。とユウヤは笑う。

黒い髪と瞳は、彼の覚悟だ。シオンの関係者に目撃されて、シオンを不当な攻撃に晒さないための。誰に恥じることもなくシオンの友人でいたいのだと示す、強い意志だ。金の髪と緑の瞳でそれを貫くことも出来る。けれど、敢えて自分を変えてみせたその優しさにシオンはきっと抗えない。

私は深々と溜息をついて、掌で顔を擦る。

「ったく、容赦ねえなあ……！」

顔を上げて真っ直ぐ前を見た私のことを、ユウヤはにやにやと眺めている。ザマーミロ、と言いたげなその顔を見るのは業腹だったが、言っても始まらない。

始まらないことを思い悩むのは、止めた。会って何を言うかは、会ってから決めればいい。それは多分に、目の前の友人に感化された考えでもある。

「行くよ。連れていってくれ。私もシオンと話をしたい」

「……ラジャ！」

ユウヤは、嬉しそうに笑った。その顔はどことなく誇らしそうで、満足そうで、私は彼の友人としての信頼を裏切らなかったのだと知った。

それにしても、よくこんなに上手く話が運んだものだ。

ユウヤの車に乗り込みながら何気なく呟くと、ユウヤはハンドルにもたれて私の顔を覗き込んできた。

「神父サン、知らないの？ こーゆー時の決まり文句デスよ。——『俺たちには神様が味方してくれてる』ってね」

……そりゃあ心強い。

苦笑して十字を切り感謝を捧げる私に、ユウヤは破顔した。

予想はしていたが、シオンの驚き具合は素晴らしかった。

私と同じように、初めは目の前にいるのが誰だか分からず普通に会釈をし、引き止められてか

らぼかんとして、絶叫と呼べるほどの驚愕の声を上げた。

もちろん数少ない通行人の注目を浴びたが、今のユウヤは誰が見ても非の打ち所がない好青年だ。もはやネコを被っていると言ってもいいほど、黙ってさえいれば穏やかで柔らかな雰囲気纏う。一皮剥けばアレなのだ。

ともかくユウヤも、我に返ったシオンも、事件性のないことをアピールして素早くフォローに成功し、シオンの押していた自転車ごと近くの公園に場所を移した。そこら辺は若者らしい機転だ。

私は、という。神父サンがいるとバレちまうから隠れててよ、そんでてきとーに出てきて、とユウヤに追いやられてやむなく遠くで様子を見ていた。合流した瞬間にかなりの勢いでシオンに怒られたのだが、私に言われても困る。驚かせたがったのはユウヤだ。

まあ、同じく驚かされた身としては、仲間が出来ることが嬉しいのは否めない。

かくして、ブレザー姿のシオンと、見た目文学青年のユウヤと、スーツの私という何だか妙な取り合わせが公園にたむろすることになった。夕暮れ時だが、子どもの姿はない。何気なく触れた低い鉄棒は薄汚れていて、支柱には赤茶けたサビがこびりついている。広場は夏の名残で長く伸びた雑草だらけだ。風にブランコが揺れるかすかな金属音と、遠くから聞こえる車の走行音。側に止めた自転車の金具が夕日を弾く。どこかから甘辛い匂いが漂ってきては、思い出したように吹く風に飛ばされていく。

「あーもーびっくりしたあ……ユウヤもおっちゃんも何考えてんのさ。びっくりした……」

私とユウヤに一通り怒った後は、一転して虚脱状態に陥ったらしい。古びたベンチに座り、びっくりした、と力なく繰り返すシオンを見て、隣に座るユウヤが満足げに笑う。

「ザマーミロ。あんな勝手な手紙一通で縁切りなんかしやがって。あアすっとした」

「……別に、縁切りとか……オレは」

手の甲で気安く小突かれて、シオンは気まずそうにもそもそと口の中で呟く。

「ウソつきィ。俺らを捨てるつもりだったんデシヨ。アタシずっと寂しかったのにシオンくんたらひどいオトコ」

「ユウヤ。ユウヤ、痛い」

ぐりぐりと人差し指で頬を抉られて、シオンは情けない顔で弱々しく抵抗した。

見てないで助けてよおっちゃん、と求められたが、助けようがない。肩をすくめてみせると、シオンは余計小さくなった。

「だから……さ。だって、会いに行って、もう会わないとか……言いたくないじゃんか。でも、もう行けないし、さ。だから、手紙、って」

「なァんでだよ。来りゃいーじゃねエかよ」

「行けないよ。おっちゃんにも迷惑かけたし、ユウヤも……オレのせいでケガして、警察連れてかれて。オレ、なんの役にも立たないし、足手まといになるばかりだ。だから」

「あっそォ。ンじゃなんかオゴれ。マックがいいな、メガマックとメガてりやき食いてェんだ。サラダとドリンク付きな。んでお前はハッピーセットとか食っておまけを貰え。あア、朝マックでもいいな。神父サンって朝マック行ったことある？ ない？ 結構便利デスよ。添加物気になるなら朝ラーとかでも」

「……朝ラーってなんだ」

「朝ラーは朝ラーメンよ。あれは寝起きにガッツリ来るカンジ」

「ユウヤ」

困り顔で眉を下げるシオンに、ユウヤは喉を鳴らして笑った。銜えたピースに火を点けて、ゆったりと煙を吐く。

公園を囲んだ木には、ムクドリの子が集まりつつあった。葉の間に黒々とたかって嵐のように鳴き騒ぐ様は夏場のセミを思い出させる。

「あのねエ、シオンくん。神父サンはどうか知らねエけど、俺は責めたり文句言いに来たんじやねエよ」

「責めてるじゃん……」

「そんなんノリだよノリ。ヘタレた顔すんな、面白エから。んで、俺はお前に謝りに来たわけさ」

目を細めるユウヤに対して、シオンは目を丸くした。

「どこがっ？ ……いや……何が？ 何を？」

今、本気の疑問が入ったな。

ユウヤは、ぼかりと丸い煙を空に向かって吐き出す。……まあ、あの程度のツッコミで堪える男でもないか。

「んー、ほら。ケーサツから帰る前に、俺のこと怒ってたデショ。殴られたし。アレよアレ」

シオンは、今思い出したように瞬いて、ああ、と気の抜けた声で呟いた。

「あれ……あ、うん……怒ってたけど、もう」

「神父サンにも注意されたんだけどさア。俺ダメなんだよねエ、シリアスに心配されんの。お前あれだろ、取調室でさ。俺のことばっか言ってたってやまもっサンが笑っててさあ」

顎を撫でた横顔が、少し照れたように目を逸らした。

——あの子、お前のツレだろ。えらく慕われてんだなあ。まさに必死って感じでお前のことばっか言って、なんにも話聞いてくれねえってあっちの担当者が困ってたぞ。はっは。

「……って言われて、それはちょっと俺にはクリティカルダメージでね？ お前ね、お前も今こっぴどくかしーだろーけど、俺もこっぴどくかしかったんデスよ？ ンでもまア、ケーサツ慣れしてねエのは分かるし、そしたらちょっとパニくるのもしよーがねエなっか、ね。……笑ってんなよ、神父サン」

ユウヤに睨まれて、私は緩む口元を手で隠した。すまん、と謝ると、声が笑っていることをぶつくさ指摘された。

「んで、やまもっサンと話したんだけどさ。あーゆー時って大概自分のことだけで終始すんだよ。人のこととか構ってる余裕ねエの。あらゆる手段を使って自分だけはパクられねエようにするもんなのさ。そん中でのシオンくんの必死の主張は、殺伐とした刑事サンたちに結構な癒しと和みを与えたみたいでね。勢いで一緒に引っ張ってきちまったけど、まアお前らはシロだろなあ、でも印象だけで決めると外野がうるせエからな。ってんで裏付け取りに走ってくれて、俺は待ってるだけで良かったんだよね。ケガも、もう跡形もねエし。だからさア、俺はお前に謝られたり心配されたりする理由がねエんだよ」

柔く口角を上げて、ユウヤが笑う。カラーコンタクトを通さない素の瞳は穏やかに優しい。夕日を受ける濃い茶の煌めきを見て、シオンが眉を寄せて俯いた。反論は言葉にならず、口の中で消えたようだった。

「なァ、シオン。不安な思いさせてごめんな。心配させて悪かったな。ってさァ、あん時は言えなかったんだけどな。だから俺、あのままお前と会えなくなんのやだったんだ。せっかく仲良くなったのに、お前怒らせたまま、最後がケンカ別れみたいになんのやだったんだよ。だから、許してくれんなら仲直りしてくんねエかな」

差し出されたユウヤの手に、シオンは俯いたまま忙しく瞬いた。眉をきつく寄せ、口が開きかけては閉じる。言葉が見つからないその様子に、ユウヤが少し肩を下げた。

「……ダメか？ やっぱ、許してくんねエ？」

囁くような、失望の混じった掠れ声に、シオンが慌てて首を振った。髪が乱れるほど振って、それでも躊躇いながら、手を差し出す。

「オレ、ユウヤのこと怒ってないし。……許すとか、許さないとか……そうじゃなくて、そんなんじゃないから、ユウヤは悪くないから。オレは、もう怒ってないから」

シオンの手がおずおずとユウヤの手に重なった瞬間、ユウヤはひどく嬉しそうに笑った。

その表情の変化を、俯いたままだったシオンが見ていなかったのが幸いだったのかそうでなかったのか、よく分からない。

ともかく。

「あ、そォ？ よかったあ、んじゃ、あの絶縁状はナシってことで、これからもヨロシクね！」

「え。……えっ？ ちょっ」

「神父サン、あんた証人な！ シェイクハンドイズ友情の証。サヨナラなんかは言わせないってか。あっ、あれはなんか違う気がするけどまァいいや。大差ねエしな」

「なっ、なんの話、いや待ってよユウヤ、オレの話聞い」

「聞イかねエー。だってホラ、お前と握手してるし俺。まっさっか、この先全然関わりもしねエつもりのヤツと仲直りする訳もねエし、だったら俺とお前は今パーフェクツにトモダチ状態デショーよ。だったらサヨナラは取り消しでヨロシクだろ。俺の言うこと、なんか間違ってる？」

「だっ、えっ、だって、オレは、ユウヤに、あれ？ えっと」

これは駄目だ。完全にシオンが押し負けている。元々行方の決まり切った勝負ではあったが、混乱しきったシオンを見ているとちょっとかわいそうになってきた。

なにせ心の余裕にも随分と差があるものだから、ちょっとばかりわざとらしくても、

「……あれ。俺がトモダチだといや？」

とかユウヤがしおれたフリで言えば、当然シオンの答えは、

「そんなわけないじゃん！」

となる。

結果として、よーしじゃあ問題ねエな、と笑うユウヤと、頷きながら狐につままれた体で首を傾げるシオンの図が出来た。

ケンカも辞さないユウヤは言っていたが、下手に口論に持ち込むよりもシオンには有効だろう。……あまり褒められた手段でもないが。

「まァそう深刻に考えんなよフレンズ。別になんかしようってわけじゃねェよ、ただお前が赤の他人になっちゃうのがいやだってだけだからさ。とりあえずトモダチのリストの中に入れといてくれりゃいーんだよ。簡単だろ？」

ユウヤはいともたやすく、軽く笑う。その単純な要求に、生真面目なシオンは途方に暮れている。

「……ユウヤは、オレがトモダチでいいの？」

「当ッたり前だろが。大体お前、俺に迷惑とか邪魔とか勝手に決めて諦めてンじゃねェよ。俺のやることはお前のトモダチでいる努力で、お前のやることは俺のトモダチでいる努力！ 努力、友情、勝利は古くからのオヤクソクだろ少年。やることやってダメならそんなとき諦めりゃいーんだよ。はい改めてヨロシクー。ってエことで俺のターン終わり。神父サンどうぞー」

握った手を縦に大きく振り動かして、ユウヤは満足げに私に視線を振った。

どうぞ、と言われてもなあ。

「……しまった。お前の後はやりにくい」

「今頃気が付いても遅ェよ。こーゆーのはスピードが勝負デスよ、速攻イチバン。ってか、俺だっってあんたの後なんか冗談じゃねェ」

「勝手なヤツだな」

ぼやく私に、ユウヤは歯をむき出して笑う。

握手からやっ解放されたシオンも、私に視線を移した。なんだか釈然としないような、好意を受け取っていいのか悩むような薄茶色には見覚えがある。

手を伸ばして頭を撫でてやると、シオンは余計悩ましげに眉根を寄せた。けれど、抗いはしない。

「もう吠えねえんだな」

微笑むと、シオンは寄せた眉をふっと解いて苦笑した。

「……まあね」

かつて野生の獣に自分をなぞらえた少年。警戒し、疑問を持ち、醒めた目で探るように距離を測ってきて、ようやく獣のフリをやめた。

それを私への信頼だとうぬぼれていいものなのか、分からない。けれど。

「そうだなあ……私は、ユウヤほど強引なことは言えねえけどなあ……」

「なァ神父サン、それ褒めてる？」

「やっぱり強引だよな？　なんか微妙だよな？　なんかオレちょっとダマされてるよね？！」

「ちょっとなんだよその俺がペテンにかけたみてエな言い方」

「ペテン！　それだ！！」

「それだじゃねェっての、こらシオンてめ」

すっかり気安さを取り戻した少年は、友の手から逃れて私の後ろに逃げ込んだ。

私を挟んで振り回しながら楽しげにやりあうその様子に、呆れて天を仰ぐ。

結局、シオンを引き戻したのはユウヤだ。肩を落として自転車を押し、とぼとぼと俯いて歩い

ていた少年は、鮮やかに自分の姿を変えて見せた友によって笑顔を取り戻した。

シオンに私は必要ない。それは変わらない。

だから。

「——……」

「え？ おっちゃん、なんか言った？」

すぐ脇から見上げるシオンに、私は肩をすくめる。

「来たいときはいつでも来なさい、ってな。迷える子羊と悔い改める者を主はお見捨てにならない。私も、お前のための灯りを消す気はない。待っているから、お前の望むようにするといいい」

二、三度瞬いたシオンは、私の腕に掴まったまま小さく笑った。

「『お前の人生だから、お前のいいようにしろ』？」

「よく覚えてたな」

「こんなやる気のない神父っているんだ、って思ったから」

「マジでなー。居眠りしてても何も言わねエわ、腰は重てエわ、落ちこむとひでエ有様だわ。ってか、もう説教中にぼけっとすんなよ神父サン。この間のミサなんて聞いてらんなかったぞ」

「……あれは悪かった。那珂川さんから言われた」

「那珂川のばアちゃん、ナイス。頼りになるウ」

顔を逸らした私を、若者二人が揃って笑う。涼やかに、ムクドリの嵐を払うように、楽しげに

。「——うん。オレも、おっちゃんのとこのミサに出てみたい。だから、すぐには行けないけど、ちゃんと大人になって行くから。また、行くから」

ユウヤと私は、別に打ち合わせたわけでもないけれど、視線を交わして笑った。

「ああ、待ってる」

「来るときはちゃんと俺に連絡よこせよ。ってか、前々から思ってたんだけどお前ケータイとかパソとか持たねエの？」

「高校生の間は駄目だって、兄ちゃんが」

「——あっ、そォ。あんのクソ兄貴」

途端に不機嫌顔で舌打ちするユウヤに、シオンは首を傾げて苦笑した。

「兄ちゃんは、あんまり間違ったことは言わないよ。ちょっと厳しいし、怒るとすっげ一怖いけど。だから、ユウヤが怒ったときはびっくりした」

「怒るだろフツー。あんな言われて悔しくねエのかよ」

「うーん……でも、オレが悪いんだし。ちゃんとしてれば大丈夫だよ。勉強とか、帰る時間とか……あっ」

急に背筋を伸ばしたシオンに、私も、憤然としていたユウヤも虚をつかれた。

「帰らないと！ 日が暮れる。ごめん、えっと、また連絡するから！ 手紙とかになっちゃうけど」

「手紙って……なんつーアナログ」

「……私はそっちの方がありがたいがな。最近の機械はよく解らん」

がっくりと頭を垂れたユウヤは、私の呟きを聞いて、何故か肩に手を置いてきた。低い声で、この浮世離れコンビが、と唸るのが聞こえた。

察するに、『今どきケータイくれエ持てよ』と言いたいらしい。……私が持ったところで、どう使うんだ。

「あはは。オレも欲しいなとは思っただけだね……。じゃ、オレ帰るね」

ひらりと離れて手を振るシオンに、私たちも手を振り返す。

そのまま自転車を押して公園から出て行きかけたシオンだったが、何故か唐突に足を止めた。一度振り向いて、薄茶色の瞳が真っ直ぐに私を見る。低くなった夕日の光を帯びて、それは不思議な色に変化している。

「……おっちゃん。あのさ——」

そこまでは聞こえた。距離が少し離れたからか、ムクドリの鳴き騒ぐ声が増えたせいか、口が動くのは見えたが、その後は聞きとれなかった。

私の怪訝な顔にそれと察したか、シオンは口をつぐんですぐに口角に笑みを象り、それから気恥ずかしそうに笑った。

「いいや、ごめん。今日はありがと。ユウヤもありがと！ またね！」

後は止める間もない。あっという間に自転車に乗って駆け去るシオンに追いつけるはずもなく、私とユウヤは顔を見合わせる。

「……なんだったんだ？」

「さァ。俺も聞こえなかった。気になって夜も眠れなかったらどうしてくれんだあいつ」

「眠れなかったら聖書を読め。箴言を開けばお前なら三十秒だ」

「うわァ痛エほど分かれてる。出来ればそこにひとつまみの優しさを」

笑いながら、私たちも帰ることにした。

夕食は、ユウヤに誘われてラーメン屋に行った。

ラーメンって聞くと食いたくなるよねエ、なんでだろーね、という話題になったので、しばらくはそのことで盛り上がった。

## Father, Sheep, and the King epi.1-5

---

5.

『おっちゃん、こんにちは。約束したので手紙を書きます。この間はごめんね。会いに来てくれてありがとう。ユウヤがあんなことになっててびっくりしました。でも分かちあえる人がおっちゃんしかいません。それはちょっと残念。あ、おっちゃんに文句があるわけじゃないからね！ .....あー、でもおっちゃんも同罪か。隠れてたんだもんね！ .....』

『おっちゃん、元気ですか。オレは元気だよ。今日は学校で書いてます。天気が良いから、屋上に来てるんだ。ちょっと風が強くてびんせんが飛びそう。字が変になるなあ。読みにくかったらごめんね。今日は歴史の授業でちょこっとだけ神様の話が出たよ。先生が宗教の話は難しいからって、すぐやめちゃったけど。.....』

『聞いてよおっちゃん！ ユウヤがひどいんだ。オレが楽しみにしてた新商品のパンを先に食べちゃったんだよ！ しかもかじりかけくれるし。半分以上食べちゃってるし。せっかく頑張って買ってきたのにー。.....』

「.....何をしてるんだ、お前は」

「いやァ、はっは。肉体労働の後で腹減っててさァ。オリジナルソースつきのとんかつ入ってるとか、そりゃ食いてエよな」

「子どものもんを横取りするんじゃないよ」

「ってか、手紙で神父サンにチクるシオンもどうよ。あんたはPTAか」

「違うな。罪人の告解を尊き主に取り次ぐ司祭だ」

ユウヤは、ぐう、と呻いてテーブルに身を伏せた。

「あんのヤロー、わざわざ俺に持ってかせるためだけに、このタイミングで書きやがったな。可愛くねエ」

普段は郵便で来るシオンの手紙だが、こうしてたまにユウヤが持ってくる時がある。学校帰りの時間帯や休日にふらりと会いに行った折に、託されるらしい。

私から返事を出すことはない。郵送の分に住所が書かれていないのは相変わらずだし、ということは家に届いては困るということだ。途中から書く場所を学校に切り替えたのも、何か危ういものがあったのかもしれない。

手紙の中のシオンは、いきいきとしている。私とここで他愛なく話していた時のように聖書の話ばかり、ということはない。身の回りの小さな出来事や、自分が考えたことや、疑問に思うこと。そういうことを特にまとまりなく書いてくる。

「シオンは、元気そうだな」

「おオ、元気デスよー。体育祭も終わって、もーちょいしたら中間テストだってさ。ナツカシイ響き。神父サンの時って中間とかあった？」

「.....あった気はするな。あったかな。.....いや、あったと思う」

「記憶薄れすぎデスよ神父サン」

ユウヤは笑いに体を揺らしながら起き上がり、ピースを銜えて火を点けた。

違和感があった短い黒髪も、時間が経つにつれて徐々に見慣れたものになっている。そのま

まか、と聞いてみたら、飽きるまでね、と返された。どうやら会った全員と言っていいくらいにこぞって驚かれるので、それが面白いらしい。それが一段落してすっかり飽きたら、また突拍子もない色に変えるのだろう。金色が大人しく見えるくらい。

「神学校も遠いくれえだ、その前なんか余計に覚えてねえよ。そういうお前はどうかんだ」

「俺は全部忘れましてー。キレイサッパリ」

ユウヤはいっそ爽やかに見える笑顔を浮かべて胸を張った。

威張れる事か、とツッコミたいところだが、あまりに堂々としていて苦笑しか出ない。

「なァ、それよりさー。ケータイ持とうぜ神父サン。不便じゃねエの？」

「ねえよ」

「即答かよ。あんた結構人付き合いに消極的だよなァ」

「——そう見えるか」

ユウヤは、当ッたり前デショ、と顎を上げた。

「どんなジーサンバーサンだろーが、なんの職業についてようが、どんだけガキだろーが、人と繋がりにゃってヤツはそーゆーツールを使うことにためらいやしねえよ。ケータイの交換どころか、センスいいサイト作って人呼んだり、気のあったヤツらとIMとかスカイプで話したりオフ会したり、なんてもう特別なことじゃなくて、やる気がありゃ誰でも出来る。神父サンはさァ、職業でなくて、そーゆーやる気の時点で結構人から遠いんだよ。分かる？」

.....

「.....途中からついてけなくなったってエ顔だな。悪かったよ」

「——いや、すまん」

難しい顔で首を捻るユウヤに、私も首を捻って溜息を返した。あれでも結構言葉を選んでくれていたらしい。ケータイってなんだ、と思った辺りから完全に置いて行かれたと言ってもいいものだろうか。

「.....ともかくさァ。別に不特定多数と話せてわけじゃねえんだよ。俺とシオンとか、それだけじゃもったいねえってんなら他の信徒サンとか、あんたの知り合いの神父サンたちとかさ。いつでも連絡出来マスよ、ってのは結構重要だと思うんだけど。オープンハートって点で」

その後もしばらく、ユウヤは私にケータイを持つようにと口説き続けた。

安いプランがあるとか、機械音痴の高齢者でも使いやすいものがあるとか、あれこれ言っていたが、その日は結局そのまま帰って行った。

人付き合いに消極的。その通りだ。

誰かと繋がりたい、という欲求は、昔から私の中にはほとんどない。私にとって人は、何か透明な壁を隔てた向こうにいる、現実味のない存在だと言ってもいいかもしれない。彼らが笑い、泣き、怒り、いきいきと動く様子を私はどこか遠くから見つめている。かすかな羨望と、交われない諦観と、手の届かない愛しさが、私の表情に穏やかと言われる笑みを作る。

それを辛いとはもう思わないが、何故だろう、と問い続けてはいる。川床を流れる水流のように密やかに、泥混じりの冷えた感覚で。

何故、彼らはそんなに必死になれるのだろうか。

何故、彼らはあんなに屈託なく人を求めるのだろうか。

何故。

人の愛も分からない私が、何故——神の愛を説いているのだろうか？

——とかいう感傷も、一時のことだ。

ぼんやりと考える間にも日常の瑣末な仕事は溜まっていくし、今度のミサの説教の内容も考えなければならないし、報告書は書かなければならないし、そろそろ秋が来て葉が落ちるようになればそれを集めるという作業も増える。

忙しい間は何も疑問に思うことがない。それがささやかな救いであり、また愚かな状態でもあった。

朝の冷え込みが厳しかったある日。

夏の疲れが少し溜まっているのを騙し騙しつつ聖堂の清掃を終え、私はだるさを訴える体を休めるために家へと戻った。

震えるようだった気温が嘘のように跳ね上がり、まだ強い日差しがゆらゆらと動いている。セミの声はもうほとんど聞かない。ごくたまに、寝過ごしたようなはぐれものが一匹取り残されて、慌てたように弱く鳴くのを聞くことはある。

今日は静かな日だった。シオンはあれから来ない。ユウヤが来る回数も減った。一抹の寂しさはあるものの、私の生活は梅雨前と同じように戻りつつある。——そのはずだが、以前の生活が、何故か上手く思い出せない。疲れやすくもなったし、年だろうか、と一人苦笑して、少しのつもりで椅子に身を預ける。

けれどすぐに、意識が遠のいた。それは驚くほど、唐突に。

——当然のように人が周囲にいるのは、久しぶりだったのだ。

あちこちに残る残像のような気配と、記憶。それが不可思議に痺れたような頭の中で混ざり合う。睨が上がらない。体が軽くて感覚もないのに、動かそうとすると重い。

私の家と、見慣れた硬質な風景と、本当に見たのかどうかもわからない人の集まる光景が、何重にも重なって見える。

イズミ、と呼ばれた気がした。

懐かしい声だ。いや、本当にそうだろうか。私はある時点からこの声を聞き続けてきた。否応にかかわらずそれは私のそばにいて、いつでも笑みを含んだ声で私を呼んだ。これからも永遠に聞き続けるのだと、勘違いするほどに。

『——……は、本当に強情だね。ペトロとはよくつけたものだ。それでは息がしづらいだろうに』

あなたに言われたくはない、とか。あなたには分からない、とか。そんな言葉を返した気がする。本当はどう返したのだったか。今なら、どう返したかったか、は分かるのに。

『僕では駄目か。そうだねえ、カズキにもミナトにも断られたし。彼らが駄目なら僕も駄目だ、それは道理だ。なるほど』

私は——ああ、また間違った、と思ったのだ。暗い悔恨に目を伏せて、仕方ない、と思おうと

した。私はそんなに綺麗には笑えず、口元に歪んだ薄い笑みを浮かべるだけだ。結局私は、このようにあるしかない。誰であろうと、私を救うなどということは諦めて去っていく。私が救われたくないと思っているからだ。独りよがりな痛みを抱えて、一人暗闇に沈めばいいと思っているからだ。

遠い世界はより遠くなり、まるで硝子で出来たような脆い安い光にあふれ、眩しくも鋭く私を拒絶する。そうではない、私が世界を拒絶している。

救い主など、どこにもいない。sic erat in fatis——

イズミ、イズミと笑い声が私を呼ぶ。

何故かその声だけが、私に届く。

何もかも失ってしまったはずの私に、命を吹き込むように。涼しい水をそそぎ込むように。『イズミ。知っているかい。知っているならそれで良い。知らないなら知っておいても構わない。私が君にあげられるのは、そういうことばかりだ。それでいいなら、ここにおいで』

あなたの言うことは意味が分からない。

私を呼ぶ口元が、柔らかく笑う。まるで果実を口にするように小さく歯を零れさせて、指の一つで私を寄せて、そのはじまりの言葉を。

硬く、高く、鋭い金属音に強く耳を打たれて、びくりと身体が跳ねた。

軽く開いた口から息が漏れる。幾度も瞬きをする視界に、瞼の裏の幻がまだ居着いている。手が、知らず腿に爪を立てた。世界が遠い。いつの間にか銀幕でも張られたように、私は見知らぬ場所にいる。ここは、どこだ。今は、いつだ。私は——なんだ？

混迷は刹那に過ぎた。

唾を飲み、何度目かの息をする頃には、私は私の家の中にいた。傷の多い壁と、古い家具と、安いカーペットと、無人の空間。

私の家だ。誰もいない。そうだ——今は、もう。

体から力を抜いたとき、チャイムの音が聞こえた。甲高い、金属音にも似たチャイムだ。次いで、私を呼ぶ声も聞こえた。

工藤さあん、と、その微かに聞こえる声に、私は頭を振る。

時計を見ると、まださして時間は経っていなかった。せいぜい二十分といったところか。

よろめきながらも立ち上がり、私は玄関でその客を迎えることが出来た。

「ああ、お留守かと思いました。どうもどうも、お久しぶりです」

人懐っこく目元を和ませて私の前に立つ、無精髭の中年男性。上着を手に持って、汗ばんだシャツは少し色が変わっている。

覚えていないのか、と疑われる前に、私は急いで会釈した。

「山本刑事さん。お久しぶりです」

彼は、刑事はいらないですよ、と破顔した。その後ろで、部下らしい黒縁眼鏡の青年が軽く頭を下げた。そちらは正真正銘知らない人物だった。

夏の名残の麦茶はまだ有効だった。少し暑いくらいの気温の中を歩き回っていた刑事二人は、

素朴なそれをひどく喜んで飲み干した。山本刑事は柏手も打った。

「ところで工藤さん、何かお取り込み中だったのでは？」

お代わりの麦茶をもう半分ほど飲んで、山本刑事はとぼけた顔で首を傾げた。何度もチャイムを鳴らしたようだ。その初めの一回が、私をこちらに呼び戻した。後は混迷の中で聞き流したらしい。

「いえ、ちょっとうたた寝してしまして……失礼しました」

「ああ。この時期は体に堪えますからねえ」

分かります、と言わんばかりに大きく頷く山本刑事の腕を、隣に座った青年が軽くつつく。青年は、坂下と名乗った。山本刑事の後輩で、コンビを組んで一年だという。彼は紹介されながら、折り目正しく見本のような角度の会釈をした。そして、センパイ、ともう一度山本刑事を促す。

「分あかってるよ、そう急くなつての。……工藤さん、今日はお伺いしたいことがありまして、ああいよいよ、唐橋とあの——立原くんの話ではなく」

咳払いをする山本刑事に、私は生返事を返す。

彼らの話でなければ、私の話だろうか。そう思ったが、その予測も外れた。

シオンとユウヤに絡んだ、あのグループの話だと言う。

「ツルんでた奴らは大体把握出来たんですがね。どうしてもリーダー格とその数人だけが捕まえられませんが——いや、普段繋がりのない、その場限りの仲間というのは困るもんですな。お互い名前も知らない、連絡先も知らない、ただ誰でも良いから人数が集まった時だけに悪さをするつう、ワタシらにはない発想ですよ」

微妙に耳が痛い気がする。悪さはしていないが、私とユウヤとシオンも似たようなものだ。私に彼らのことを聞かれても、ほとんど分からない。シオンにいたっては、しばらく名前も知らなかったのだから。

「正確には、リーダーというよりも扇動役ですね。仲間を煽ってエスカレートさせて、自分たちは危なくなる前に逃げている連中です」

生真面目な口調で、坂下刑事が手帳を捲る。

「立原くんの時も、目を付けたのはその連中だったそうです。唆した方も唆された方もお互いのせいにして反省など程遠いようで、まったく——失礼」

咳払いをした坂下刑事を、山本刑事はにやにやと笑って見ているばかりだ。

「それで、工藤さんにお聞きしたいのは、最近の不審者の有無とですね、こちらの似顔絵の確認です。御存知ではありませんか——ってちょっとセンパイ、さっきからなんでニヤニヤしてるんですか」

「いやあ、頑張ってるな—と思ってよ。アタタカイ目で見守ってるんじゃないか」

「面白がってるだけじゃないですか、なんなんですか。ヤマさんて呼びますよ」

「ばっ、なんだお前その脅しっ。止めろ恥ずかしい」

慌てる山本刑事に溜飲が下がった顔をして、坂下刑事は私に何枚かの紙を渡した。

描かれているのは、まだ年若い五人の青年たちだった。陰影の濃い、特徴を良く捉えた似顔

絵だ。その中の一人だけが髪が長く目尻が下がっている。もう一人は縁のない眼鏡をかけていて、もう一人は鼻の横に小さな傷があり、もう一人は赤い髪を刈り上げた吊り目。最後の一人はサングラスに帽子でほとんど人相が分からない。

けれど、残念ながら私には全員見覚えがない。申し訳ない、と返したが、二人にそう落胆した様子はなかった。

「まあ、何か思い当たることがあったらご連絡ください。ところで唐橋と立原くんは、近々こちらに来ますか？」

「ああ……唐橋なら、日曜には必ず」

「日曜？」

ミサです、と微笑むと、二人は納得した顔をした。

「それとシオン……立原紫音、は——こちらにはしばらく来ないそうですので」

そうですか、と事務的に頷いたのは坂下刑事だけで、山本刑事は何故か声もなく、何度か短く息を吐いた。乾ききった笑いにも見えた。口の端を上げて、何か思い出したように右上をちらりと見て首を傾げる。

「そうですか。工藤さんも、大変ですなあ」

その口調は理解と同情に満ちていて、私も坂下刑事も驚いた。そこにはおそらく、僅かな差異があった。

「ど……どうしたんですか、センパイ」

「いやあ、気にすんな。ともかく、立原くんの方は自宅に伺ってみることにしますよ。何か御伝言でも？」

髭の伸びた顎を撫でた山本刑事は、にっこりと笑んだ。

ああ、彼は本当に理解しているのだ。立原家の中で起きたであろう私の立場の変化も、私たちが普段どう位置づけられているのかも、おおよそのことは何もかも。その上で、好意を示してくれている。

「……いいえ。彼が元気であれば、充分です。ご厚意に感謝します」

十字を切って祈りの形に手を組むと、止めてくださいよと慌てられた。その様子に坂下刑事も何か察したのだろう。しつこく問い質すことはせずに黙っていた。

刑事たち二人が帰った後、私は空になったコップを眺めてしばらく座り込んでいた。

静かになった家の中に、小さな刻み音が響く。同一の間隔で、私の鼓動よりも遅く、無機質に時の流れを告げる。

急激に落下するようなあの眠気は、もう襲ってこなかった。

その代わりに、涼しい水の欠片が耳の奥でまだ響いている。

イズミ、と笑いながら私を呼ぶ。

繰り返されるそのはじまりの言葉で、私を揺さぶる。

あなたは一体私にどうしろと言いたいのか。八つ当たりのその言葉に笑った人。

「……【いかに幸いなことか 神に逆らう者の計らいに従って歩まず 罪ある者の道にとどまらず 傲慢な者と共に座らず 主の教えを愛し その教えを昼も夜も口ずさむ人】」

掲げられた神の子に、描かれた聖母に、目に見えぬ聖霊に触れて喜びの声を上げるように、そう信じて言葉を紡げ。

「【その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び 葉もしおれることがない。その人のすることはすべて、繁栄をもたらす】」

詩編を誦んじながら、私はゆるゆると立ち上がり、コップを片づけた。そのまま台所を磨き、出すべき手紙を書き、あり合わせの食材で夕食を作った。

思いつくだけの聖句を口ずさみながら。

耳の奥の水の欠片が私を揺らさなくなるまで、ずっと。

シオンから少し厚めの手紙が届いたのは、その数日後だった。

その間にも通例のミサは行っていたし、ユウヤはケータイを持ってと折に触れて私を口説きに来ていたし、夏物を仕舞うべきかどうか迷うような寒暖の差が続いていた。要するに、ごく平穏な日々が過ぎていた。

ユウヤが郵便受けから勝手に持ってきたそれを、私は聖堂の前で受け取った。まだ落ち葉の時期ではないが、石畳に小さな砂やゴミは溜まる。急かされて、竹箒を動かす手を休め手紙を開けると、中にはいつもの便箋と、手作りのパンフレットと、細長い紙が入っていた。

「おオ？ 文化祭の招待チケット」

パンフレットをひらりと目の上にかざして、ユウヤがそこに書かれた文字を読む。

「『清涼館高校文化祭最終日は、多くの方々に我が校の生徒の日々の努力を知っていただくこと、一般の方もご来場できるよう祝日に設定しております。本校生徒のご家族に限らず、招待券をお持ちの方は誰でも来校可能となっておりますので、校門にて係員にお渡しください』……」

ユウヤが少し指を動かすと、左手に持っていた券が二枚になった。手品ではない。重ねて持っていただけだ。その左腕には紙袋が下がっている。——今日もまた、携帯電話の布教に来たらしい。私よりよっぽど熱心だ。

私はシオンの手紙に目を通して、ユウヤに必要と思われる情報だけを渡してやる。

「お前と私に一枚ずつ、だそうだ。立原久音は来ねえらしいぞ」

「あのヤローが来るんだったら冗談でも行かねえけどな。あア、でもあれか、ドサマガでイタイ目見せてやるってのも」

「物騒なことを言うな。お前じゃシャレにもならねえぞ」

「わアかってるよ。しねえよ。……しかし、高校かア。共学だよな、あそこ。そうだよな」

聖堂の前からは、坂の上にある清涼館高校の校舎の一角が見える。ビルに大半隠れてはいるが、木々に囲まれた四角い建物だ。屋上には背の高い金網が見える。人影が見えるほど近くはない。

その校舎を指し示しながら輝くような目で同意を求められて、私は嫌な予感を覚えながら頷く。

「……そうだな」

「ってエことは女子高生だな！ いいね、テンション上がるね！ なア知ってる？ あそこさア、ブレザーだけど女子の制服カワイイっつって人気なんだよ。斎藤サンとこのコもそのトモダチ

も結構レベル高エんだよね！ んでもあんまりスレてねエってエか、あれ何その目」

「……………お前を行かせていいもんかどうか、心配になってきた。後、斎藤さん親子も」

「なァんでだよ！ ってか神父サン、女子高生って聞いてテンション上がらねエの?!」

「お前の今の発言を一から反芻してよーく悔い改めろ」

少なくとも私は、そんな聖職者にはなりたかねえ。

あれ？ と首を傾げているユウヤは放っておいて、シオンの手紙の続きに目を通すことにした

『——おっちゃんに見せたいものがあるんだ。月曜日だから大丈夫だよな？ オレもクラスの当番があるからずっと一緒に回るわけにはいかないけど、来てくれたらうれしいな。待ってます』

「——神父サンは、アレだなァ」

やけにしみじみとユウヤが呟いたので、顔を上げる。

「女子高生より、シオンみたいなのがタイプなんだな痛でっ、痛ってエ!!」

ユウヤは派手な悲鳴をあげて石畳の上に転がった。それはもう見事に、見本のように。

「【口を滑らすよりは、道で滑る方がましだ。口を滑らして、悪人は速やかに没落する】」

「だからってホーキでつつ転ばす神父がどこにインだよ!! さてはマジで稚児趣」

「【[とがめられて改めるのは、なんと立派なことか。お前は故意に罪を犯さなくても済む]】

」

「イテイテイテ、ジョーダンだよ、地味にちくちくすんだろ、俺ごと掃くなよ。あァもうすげエ汚れたし」

慌てて箒の届く範囲から逃げた先で、ユウヤはぶつくさと文句を言いながら衣服を叩いている。今日はジーンズにTシャツという簡素な格好だ。ただしジーンズは破れやほころびが多いし、Tシャツは目にも鮮やかな極彩色の派手なものを着崩している。相変わらずの“S”と硝子のような石をはめ込んだアクセサリもつけていて、妙に似合うことは認めるが、黒髪の文学青年風味とは微妙なバランスだ。

私は溜息をついて、封筒に手紙をしまう。

「【下品でみだらな話をする癖をつけるな。そう言う言葉を吐くこと自体が、罪なのだから。お前が上に立つ人たちの席に連なるときには、父と母とを思い出しなさい】」

「——父と母、ねエ」

私の唱える聖書の一節に、ユウヤは短く鼻で笑った。

パンフレットとチケットを小指と薬指の間に挟んで、取り出したピースに火を点ける。私の視線に応じて、フィルターを銜えた口元を笑ませ、どこか冷めた目で空を見上げた。濃く、蒼い青だ。掠れるような雲が西から流れてくる。

「まァ、いーけど。生んでくれたのは確かだし、育ててくれたのも間違いじゃねエもんな。どんな親でもさ」

口角を上げたまま、ユウヤは何気なく私のそばに戻ってきてチケットとパンフレットを押しつけてきた。にっこりと笑うその表情に、陰りは見えない。屈折もないように見える。だからこそ、昏いものが際だつ気がした。真夏の日差しの中に立つ建物の、その向こうにある黒い影のよ

うに。

「それさァ、前にシオンも読んでたぜ。あいつシラ書とか知恵の書とか好きだもんな。で、結局無理だよなァって結論になったんだけど」

「無理か」

「無理デシヨ。特に若い男なんてそのためだけに生きてるようなもんデスよ」

あまりに堂々と胸を張るその様子に、私は思わず箒に縋って深い溜息をついた。かくも欲望という罪業は根が深い。己の心から出るものだけに、罪を罪とも思わない。善きものも、悪きものも、同じ顔をして人間に呼びかけるからだ。——私はお前にとっての救い主である、と。

それを正しく導くのが私の仕事だと言われれば返す言葉もないが、ユウヤは本当に、本当に悪びれない。正しいとか正しくないとかではなく、のびのびと、悠然と、他者に依らず己の内の基準だけに己を従わせる。

私は、ユウヤのように在ることは出来ない。……私だって、自信を失うことはあるのだ。

私の様子を見て、ユウヤは声を立てて笑った。

「なァ、その続きってなんだっけ」

「続き？ ……【さもないと、彼らの前で我を忘れ、いつもの癖が出て愚かなふるまいをしてしまう。そして生まれぬ方がよかったのに、と思い、お前は自分の生まれた日を呪うだろう】……」

相変わらず笑顔で空を見上げるユウヤの、その瞳から、感情という名の色が消えたように見えて——私は途中で口をつぐんだ。

私が言葉を止めると同時にユウヤは煙を吐いた。溜息というほど深くはなく、どちらかと言えば魔を払う異教の神の吐息のようだった。長く伸びた白い筋は瞬きの間に消えて、後にはユウヤの口元からくゆるばかりだ。

「あァ……そォだったっけ。神父サンすげェなあ。よく覚えてンよなァ。や一俺には出来ねェわ。ンな堅ッ苦しいの暗唱とか無理無理無理」

私の肩を気安く叩いて、ユウヤは瞳に楽しそうな色を取り戻した。

後一節残ってはいるが、とても言う気は起こらない。

結局、私はまだ何も知らないままなのだ。

シオンのことも、ユウヤのことも、興味もないと言えるほどに何も知ろうとしていない。

彼らの過去に触れることが怖いのだろう。過去を聞くことは、私の過去を話すことにも繋がるからだ。彼らが何も話さないからと言い訳をして、ただこのまま緩い時間が流れることを期待している。

視線を下げると、ユウヤの持った紙袋が揺れているのが目に入った。多分中に入っているのは携帯電話のカタログだろう。前にも開いてはみたがどれもこれも意味が分からなくてあまり興味が湧かず——……。

「おい、ユウヤ」

それはなにか稲妻のような閃きで、それと意識する間もなく私はユウヤを呼んでいた。

「あァ？ どしたの神父サン」

「携帯電話ってなあ、どうすりゃ使えるようになるんだ」

ユウヤは、数秒ぽかんと口を開けたままになった。啞然とした顔と言ってもいい。うえおう？とか変な声を出しながらなんとか口を閉め、指の間から落ちかけたタバコに慌て、それでも丸くなったままの目で私を凝視する。

「えー……？ 何、いきなりどしたの……、いや、ケーヤクすんの？！ する気になったの？！ ってか、もうしちゃったわけじゃないよね、よね？！ じゃアさ、ショップ行こう！ 俺のトモダチに安くしてくれんのがいるから！！」

話を振った私がちょっと引くくらいにユウヤは勢いづき、今にも手を引っ張って私を連れて行くような気配を見せた。箸を持ったままの私は慌てて押しとどめる。

「待て、待て。すぐには出られねえ。ちょっと待て」

「あア、じゃアさ、身分証明とクレジットカード！ それかキャッシュカードか、通帳と印鑑！ サイフ！ 戸締まりついでに準備しといて、そんでちょっと聞いてほしいコトあんだ！ 俺、あっちに連絡しとくからヨロシク！」

言うが早いか、ユウヤは喜色満面、敷地の外にすっ飛んでいった。取り残された私は、無意味になった止めるための手を下ろし、空を見上げて息をつく。あれほど喜ばれると何故か気まずい。

主よ、ちょっと早まった気がします。などと今更言っても仕方ない。

ともかく、今の私に出来るのは、これくらいなのだから。

私にチャンスくれたユウヤに、返事も来ない手紙を送り続けてくれるシオンに、それで報いられるかどうかは分からないけれど。過去ではなく、現在と未来を——少しだけ、あの子たちと共有してみよう。それなら出来るはずだ。

驚いた。私も、彼らの良き友でありたいと、ちゃんと思っているのだ。

それは私にとってとても嬉しいことだったし、そうなればいいと、心から思えた。柄にもなく、心が浮き立つほどに。

「あっ、まアだそんなとこでぼけっとして。神父サン早く早く」

「なんでそんなに急ぐんだ。店が閉まるような時間じゃねえだろ」

「だってあんたの気が変わったらがっかりデショ！」

「じゃあ、あんまり急かすと気い変えるぞ」

「なんだよそれズリィ！」

わめくユウヤをいなしながら、準備をし、戸締まりを済ませ、私はユウヤの車で拉致された。

見てて、と車中で与えられたカタログには携帯電話の写真と説明が山ほど載っていたが、やっぱりどれもこれも同じにしか見えなかったの途中からは眺めるだけになった。

正直、難解度においては神学校時代に読まれた原文の神学論講義書と良い勝負な気がする。

「——ところで、聞いてほしいことってなんだ」

カタログを上っ面だけ眺めながら何気なく振った話に、ユウヤはにやあっと両の口の端を上げて歯をむき出し、私を横目で見て笑った。

私がかかなり露骨に体を引いてしまったのも、そう責められたことではないと思う。

## Father, Sheep, and the King epi.1-6

---

6.

点滅するランプと共にまだ聞き慣れない電子音が鳴る。軽い、メロディを辿るだけの単純な音だ。賛美歌391番。ユウヤが入れてくれた。新約聖書の中でもナルドの香油のくだりは気に入っているらしい。バカ高い香油を女がオトコにふりかけるとか、なんか想像すると色ッぽい光景じゃねエ？ とにやついていた。雅歌を喜ぶシオンと考え方が大差ない。

ともかく、これが聞こえたら電話がかかっているということだから、フタを開ける。壊れないように。というか滅多な事じゃ壊れねエよと言われている。色みを抑えた銀色の機械は掌に収まるくらいで、意外と軽い。けれど、ずっと持ち歩いていると重い。じゃらじゃらした飾り紐を断って良かったと思う。

上部の画面には、着信とユウヤの名を告げるアニメーション。下部では数字の並んだパネルが青く光っている。全部光るんじゃなくて、押せばいいボタンだけ光ればいいのに。とにかくボタンが多くて毎度しみじみ眺めてしまうのだが、そろそろ覚えなければユウヤに何を言われたものか。

押すのは、受話器をちょっと持ちあげたようなボタンだ。慌てて受話器が横になっているのを押しはいけない。切るんじゃねエよ、と後でツッコまれる。

ピ、と音がして、着信メロディが止む。機械を耳に押し当てる。もしもし、と呟くと、くぐもった笑い声が聞こえた。

『はい四十秒一。新記録オメデト一、神父サン』

どうやら一週間の内に一分をきることは出来たようだ。やれやれ、と安堵の息をつく、耳元で笑いが弾けた。

『あっはっは！ いや、そんな緊張してる神父サンてレアだよ。しかも相手俺なのに。まアいや、そろそろそっち着くから、ヨロシク。ンじゃね』

楽しげな声を残して電話は切れ、通信音だけが響く。この音は普通の電話とあまり変わらない。そんなことにばかり安心する。

表に出るとすぐ、ユウヤの車が走ってくるのが見えた。てっきり自分で買ったものかと思いきや、借り物だという。長く休眠中の車を、ガソリン代とメンテナンス代、駐車場代折半の負担で使わせてもらっているのだそうだ。

私のすぐそばで車を止め、運転席のユウヤが窓から顔を出して助手席を指し示す。乗り込むと、ユウヤが私を上から下まで眺めた。

「お待たせー。わあスーツだ」

そういうユウヤは珍しく帽子を被っている。本日はミリタリー系らしい。髪の色も心なしか明るくなっているように見える。迷彩色のシャツとハンチングとカーゴパンツ、足元は同色のスニーカー。その上から色味の薄いトレンチコートや雑に羽織っている。体格で着こなしてはいるが、選択の基準はやはり微妙に理解しがたい。

私はユウヤの言ったとおり、普通のスーツだ。シオンの所に行った時の物とは違うが、大して代わり映えはしない。

「悪かったな、またスーツで」

肩をすくめてシートベルトを締めると、ユウヤは苦笑して前に向き直った。

「いやいや、ひがまなくてもいいじゃーん。誰も悪いとかまたとか言ってねえよ。あアでも今度一緒に服とか買いに行く？ カジュアルで似合うの見立てたげるよ」

「お前は私をどこまで妙なところに連れていく気なんだ？」

「なァそれどォいう意味？」

そういう軽口を叩き合いながら、車は滑らかに発進した。ユウヤの運転は安定していて危なげがない。車の中でかけている音楽に合わせて手足はせわしなくリズムを楽しんでいるが、ハンドル捌きやブレーキのかけ方にひやりとさせられることは一度もなかった。

汚れているのも灰皿くらいで、後は綺麗なものだ。座席カバーはシックなツートンで、しゃれたデザインの交通安全守りがミラーに一つぶら下がっている。ダッシュボードに置かれている消臭剤は、この車の本来の持主との約束なのだという。中には特に装飾もなく、ユウヤの私物らしきものといえば、何枚かのCDとピースのカートン、それからダッシュボードに置かれた携帯電話とホルダーくらいなものだ。

「たまにあの人も乗るから、すぐ引き払えるようにしないとねー。まァ一年に一回くれえだけ」

遠く離れた郷里に帰るときだけ使うのだという。そこまで使わないのならその時だけレンタカーでも借りればよかるうに、と私などは思うのだが、どうやら惚れ込んで買った愛車らしく、どうしても手放せない。

ユウヤが交わしたいいくつかの約束は、車を傷つけないためのものだ。持主が乗るときに元の状態であればそれでいい。しかし、ユウヤのこの喫煙状況で、消臭剤一個はどれほど威力を発揮するのか。

「ダイジョーブ。元々あの人も吸うから、ちょっとくらいの匂いは許容範囲」

.....まあ、本人がいいというならいいか。

後部座席を覗くと、真新しい紙袋が置かれていた。ビニールでコーティングしてある簡素な白色で、社名はない。外側はただのカムフラージュで、中身はシオンへのプレゼントだ。これが先日持ちかけられた『聞いてほしいこと』とやらの産物で、まったく、ユウヤの考えることと言えば大概は突拍子もない。

車はいくつかの角を曲がり、坂の入口にさしかかる。下から見ても傾斜の急な坂だ。ある人は坂と言うより山だと言い、ある人は山ほどもなくせいぜい丘だと言い、実際に徒歩や自転車で登る者はなんでもいいからこの坂早く終われと言う。ちなみにこの坂を自転車で登れるのは清涼館高校の学生くらいだ。まったく若さというのはエネルギーの塊である。

信号待ちの間にユウヤが手を伸ばして、CDを操作した。切り替え音の後に流れてきたのはクラシックだった。彼らしからぬ、重々しい、静かな曲。バス・ソリストが歌う。Komm, susses Kreuz, so Will ich sagen——

「.....マタイ受難曲か？ バッハの」

「アタリ。なんだっけ、あれだ。『来たれ、甘き十字架よ』」

あんたが好きそうかなと思って、とユウヤは笑った。私は応えて苦笑を零す。マタイ受難曲第五十七番。十字架を負うクレネのシモンと共にゴルゴタに行く神の子の下りだ。

「坂道を車で登りながら聞きたい曲じゃねえな」

「あア、やっぱり？ ちょっと暗めだもんなア。そもそもコレ何語なんだろうな」

「……ドイツ語だろ」

「神父サン、ドイツ語出来んの？」

と目を丸くするユウヤに、私は深々と溜息を返す。

「J.S.バッハならドイツの作曲家だろうが」

「……あれ？ そォだっけか」

ユウヤの軽い笑いに、私はひやりとした心を隠して呆れたフリで窓の外を見た。視界が斜めになるような坂だ。歩道に植えられた緑が、あっという間に視界の外へ流れていく。

私が何語を喋ろうが、それを隠そうが、ユウヤにとってはあまり意味もないだろう。けれど、今は触れなくなかったし、思い出したくもなかった。私の過去に関することは、何も。

その間もCDは回り続け、神の子の受難を歌っている。ドイツ語はそんなに得意ではないが、基本は覚えている。『Komm, susses Kreuz』——来たれ、甘き十字架よ。敢然と苦難を受諾する旋律が深く低く響く。大地から燃えたつ炎の如く、喉を震わせて。坂道を登るエンジンのうなりに合わせて、十字架を負いゴルゴタの地を進む。

「——いや、やっぱりおかしいだろ。この選曲は」

「そォ？ んじゃ遠慮なく言うけど、予想以上に眠くなりそうなんだよね、この歌。変えていい？」

「事故を起こす前に是非とも変えてくれ」

真剣に頼んだ私をちらりと見て、ユウヤはつまらなそうに舌打ちしてCDを切り替える。機械音に紛れて、小さな呟き。

「まァいいか。別に俺じゃなくても」

「……何がだ？」

ユウヤは、べっつにィ、と口を尖らせ、眠気を払うように体を揺すった。音楽は、私の知らないジャンルの騒がしいものになった。

「ところで神父サン、最近変わったことあった？」

バックミラーを片手で調整しながら、何気ない口調で話題を変える。ユウヤの常套手段だ。そう言われても特になにもない。ユウヤは目を細め、なぜか面白そうに笑った。なんとなく目を逸らしてサイドミラーを見ると、清涼館高校へ行くらしき後続の乗用車が何台か見えた。

きついカーブをいくつか経て、車は清涼館高校の敷地へ辿りつく。誘導された駐車場には多くの車が止まっていた。警備に来ているのだろうか、パトカーもある。砂利道を踏んで、校門の傍にいる係員に券を渡す。代わりに渡された校内地図という冊子には、びっしりと案内が書き込んである。

一歩踏みこめば、そこはある種の異世界だ。

派手に飾られた、林立するいくつもの校舎が、騒ぎの坩堝の中で泰然と建っていた。

屋外テントは祭りの夜店のような品揃えだった。

焼きそばにたこ焼き、クレープ、綿菓子、くじびき、ジュースに射的。古本や手作りの小物を並べているところもある。テントの内外では生徒らしい男女が仮装状態で各々奮闘していた。取引は現金だ。おそらく経済活動の経験の一種とされているのだろう。繁盛している店もあれば、なかなか苦労して呼び込みに声を嗄らす店もあった。

校内のいたるところに万国旗が連なり、電飾もそれに重なっている。夜にライトアップでもするのだろうか。

「おオ、活気ある～。すげえなア高校生」

ユウヤも少し驚いたようだ。と同時に目が楽しげに輝いていた。言われなくても分かる。彼は祭り好きだ。

客層は生徒も保護者も児童もいた。親とはぐれたのだろうか、号泣して女子生徒に慰められている子どももいる。すれ違う中には、金髪の頃のユウヤでも大人しく見えるような派手派手しい格好の集団もいた。校内放送では注意事項や連絡事項、迷子のお知らせが絶え間ない。どこか遠くの方ではパフォーマンスが行われているようだ。軽快なダンスミュージックや、日本語なのか英語なのか分からない、それこそ何語だと言いたくなるような言葉をマイクで叫んでいるのが聞こえる。

地図には屋外地図と屋内地図がある。屋外地図には体育館や校舎の大体の位置と入口、出店情報、ステージ情報、校外に出る出口やゴミ箱の位置などがイラスト入りで書かれてある。生徒の手作りだというが、なかなか分かりやすい。校舎の壁には拡大したものも貼られてあった。

全部で六棟ある校舎で、立ち入りを許可されているのは四棟。Aの一、二棟、Bの一、二棟と記号が割り振られている。後は封鎖済みのようで、その辺りはさすがにしんとしていた。

喧騒の中、そわそわと気を散らして行方不明になりそうなユウヤを引っ張り引っ張り、Bの二棟に入る。

校内地図は、校外地図より厚い。本来はこちらがメインなのだろう。各教室の展示物とその見所のアピールは写真付きで、階段や手洗いの位置といった情報も丁寧に書き込まれている。その中でも入れない区域はあるようで、斜線で塗り潰されている。実際に見てみると、そこには黄色と黒の混じったロープが一本張られていた。

階段を登って四階の、廊下を右手に五つめの教室。そこにシオンがいる——はずだ。

ユウヤは鼻歌交じりで軽快に登って行くが、私はそうは行かない。多少運動不足だ。……多少どころではないかもしれない。息の切れ始めた私の横を、人を吹き飛ばす勢いで、ごつい体格にドレスを纏ったヒゲのある姫君が急ぎ足で降っていった。捲り上げたドレープの裾から覗くすね毛はちょっと眩暈を誘う。思わず振り返って見送ってしまったが、視線を上に戻しても階上から王子が続けて降りてくる気配はない。あれが何かは分からないが、靴を落としたり髪を垂らしたりしないよう祈るばかりだ。

四階に辿りついて右手を見ると廊下は雑然としていた。一般客や生徒が行き交う横に、荷物や余った机が積み上げられている。教室の方はというと、黒い天幕を張ったお化け屋敷の看板もあれば、真面目に何かを研究した結果を展示している教室もあった。その『何か』というのをよく見てみれば、ラーメンの歴史であったりするのだが。ちなみにその教室の中では、何かくたび

れ果てたらしい男子生徒が一人、番をするフリで熟睡していた。

目的地が近づくと、行き交う人々の向こうに頭一つ抜け出した長身が見えた。迷彩色のハンチングにトレンチコート。こういうときに、彼は見つけやすい。漸う寄っていくと、よそ見をしていたユウヤは聴く振り向いた。まるで後ろにも目があるようなタイミングだ。何か真剣に見ていたようだったのでそちらを覗いてみたが、何も無いように見えた。ただの人混みだ。挙げ句、どこ見てんの、とユウヤにとぼけられた。

シオンの教室はどうやら飲食店を催しているようだ。入口の上には大きな看板がかかり、時代めいた書体で『きっさこ』と書かれている。案内役らしい、可愛らしい袴姿の女の子が何人か、入口で笑顔を振りまいている。レトロが売り物らしく、店員は全員昔の女学生と書生風味だ。柄違いの着物がかわいらしい。

「おオ、いーねエ。カーワイーイ。さっ、行こ行こ」

声を掛けようといそいそ近寄るユウヤの首根っこを押さえ、私が中へ案内を請う。女生徒はもがくユウヤにくすくすと笑みを零し、気持ちよく中に通してくれた。

「なんで俺が危険物扱いなんだよ」

とぶつくさ不平を零していたユウヤだが、それ以上抵抗することもなく大人しく席に着く。

教室を天幕で仕切って、四分の一を調理場にしているらしい。店員の出入り口は天幕を切ったのれん状にしてある。残り四分之三はそれでも広々と見えた。机と椅子は普段使っているものに明るい色のクロスと保護の透明ビニールをかけてある。机の上には一輪挿しが飾ってあった。私たちの席はコスモスだ。隣のテーブルはまだ若い南天の実で、その向こうはなんだろう。どうやらこの一輪挿しでテーブルを区別しているようだ。

私たちが案内されたのは窓際の席で、ガラス越しに暖かい日差しが差し込んでいる。隣の窓は開いていたから、開閉は自由なのだろう。特に暑くもなかったのもそのままにしておいた。壁にも大きなクロスが貼られている。小さく切って貼られているのはセピア色の風景写真や、実際に使っているコーヒーカップの写真だ。真っ直ぐではなく少し傾いで貼ってある辺りはこだわりなのだろう。

客層は若い女性から私のような年配の男性まで、様々だ。店員の給仕はぎこちないが丁寧で、女生徒の方が物怖じなくきびきびと動いている。動線の無駄はそこかしこに見られたが、そこは愛嬌というものだろう。

そうして見回してみたが、シオンの姿は見あたらない。裏方に回っているのかと思い、注文ついでに訊いてみた。井桁の着物を着た少年は、首を傾げて私とユウヤを眺め見た。

「えーと……紫音のお父さんとお兄さん……ですか？」

どうやら友人だったらしい。同じクラスなのだろうから、別に不思議はない。

「違うよん。父兄じゃないと面会禁止？」

楽しげに問い返したユウヤに、少年はいいえと首を振って笑った。

「そォ？ んじゃさ、羊飼いと羊が来たって伝えてよ。それでわかるハズだから」

「ヒツジ？」

「メエ」

返事代わりに鳴いてみせたユウヤに笑いを弾けさせ、少年はオーダーを取って去っていった。

「シオンの方が上手いな」

「あら。鳴き方が下手だと捨てられちゃう？」

「お前が主を見失わない限り、主がお前を見失うことはない」

おどけるユウヤに、私は肩をすくめて十字を切る。私もしがない羊の身だ。羊飼いななどとうめぼれられはしない。

すぐ側の窓からは校庭が見えた。広場にステージが設置され、周囲にはテントやパラソルが林立している。軽快な音楽と人のざわめき。古びたアルミサッシの窓枠と、コンクリートの壁。懐かしさに胸を衝かれた。今は遠い遠い、かつて在った場所でありもはや戻れない場所だ。心と体にずれが出てくるような、不思議な郷愁。

室内に目を戻すと、少し薄暗く見えた。先ほどと光量は変わらないのだが、外の明るさにやられたらしい。その目くらましに瞬く。

ユウヤは、ゆったりと長い手足をくつろがせて窓の外を眺めていた。机も椅子も少し小さく見えるが、器用にバランスを取っている。無意識だろうか、手が内ポケットを探っていたので、禁煙だと釘を刺した。あアそっか……と呟いたその顔はひどく淋しげで、それからやけに深刻そうに溜息をひとつ。

「んじゃ俺、三十分が限度だわ」

短すぎだ。

やがて、たくさんのビニールが擦れる音が廊下を走ってきて、結構近くのドアを開けて飛びこむ音が聞こえた。察するにここの調理場か、遠くても隣の教室だろう。昼も近いから、誰か人数分の買い出しにでも行っていたのだろうか。

その内、ええっ、という聞き覚えのある声が高く上がった。のれんを勢いよく分けて顔を出したのは、薄茶の髪と瞳の、細っこい少年。手を振ったユウヤを認めてぱっと顔を輝かせ、また勢いよく中に戻っていった。

「……神父サーン。嬉しい？ 顔見るの一月ぶりくらいだもんねエ」

あからさまに意地の悪い口調で、ユウヤが口元を指し示した。慌てて自分の口元を手で隠した私を見て、背を仰げ反らせ短く笑う。

「そんな顔すんの、よっぽどの親バカか、孫を見たジジババか、ちょっとアブナイ人だけデスよ。気をつけてよ」

「うるさい」

くつつつと笑いに体を揺らすユウヤは、目を細めて帽子を持ちあげ、風を通すように短い髪に手を通した。

「まァ、いーけど。あんたにとってシオンがそんなだけ大事な存在だってことデシヨ。そんなんってるあんたは珍しいから、俺は見てて楽しいデスよ」

にやにやとしたユウヤの目は奇妙に優しく、ますますいたたまれない。何か異様に妙なことをしでかしてしまったような、そんな居心地の悪さがある。

顔を逸らした私に、ユウヤは重ねて何か言いかけたようだが、それよりもコーヒーを持ったシオンが飛びこんでくる方が早かった。

「いらっしゃいませ！ ユウヤもおっちゃんも来てくれたんだ、ありがと！ ごめん、オレ今買い出しに行ってたから」

「おオ。似合ってンじゃねエの、それ」

給仕するシオンの着物の袖をつまんで、ユウヤが笑みかける。デフォルメされたトンボの柄の着物だ。シオンはそれにちょっと触れて、首を傾けた。

「似合う？ ……子どもっぽくない？」

「似合う似合う。寺子屋帰りのおぼっちゃんってカンジでカワイイカワイイ」

「それ褒めてないしー！ ちょっとおっちゃん、笑ってないでなんとか言ってよ！」

いつものように騒ぐシオンとユウヤに、周囲から忍び笑いが聞こえてくる。とにもかくにも、揃うと人目を引く二人だ。他愛なくじゃれあっている様は、特に女性を楽しませているようだ。

騒ぐと周りに迷惑だから、とたしなめると、シオンは慌てて口を手で押さえた。

それから声を低めて、かがみ込んでくる。

「あのさ、オレ休憩まで多分一時間くらいはかかると思うんだ。待っててもらって大丈夫？」

「ラジャラジャ。テキトーにどっか回ってッから気にすんな。どこで落ち合う？」

「えっと、じゃあ……ここの一階の、靴箱の横の廊下。立ち入り禁止ロープの前だから、人少ないと思うし」

「分かった。頑張れよ」

「じゃあ、一時くらいに行くから。後でね！」

嬉しそうに手を振って、シオンはするすると机の間をすり抜けて行った。かと思えばまたすぐ出てきて、女性客へオーダーを取っている。同じ格好をした同級生とすれ違って笑う。

「……楽しそうだな」

「そオだね」

ユウヤはもう何も言わず、頷くだけだ。口元には柔らかな笑みが浮かんでいる。その後しばらくコーヒーを飲んで雑談し、十分くらいしたところで店を出た。さて、とユウヤが呟く。

「じゃっ、神父サン。俺喫煙所探してくるから、後でね！」

言うが早いか、ユウヤは紙袋を私に押しつけ、どこかに吹っ飛んでいってしまった。

……結局三十分も保たねえんじゃねえか。あのヘビースモーカーめ。

その、一時間後。

待ち合わせ場所に時間通りたどり着いていたのは、私だけだった。

人の出入りが多い場所を避けて、陰になった所に立つ。脇を通り過ぎるのは小さな子ども連れや、白髪交じりの婦人や、物珍しげにきょろきょろしている他校生らしい少年や少女の集団。もしかしたらここを受けたいという中学生も混じっているかもしれない。

風船を持った小さな子が親と手をつないで歩いていく。腕を絡ませた若い男女がいる。教師らしき男性が、サボリ気味の生徒に喝を入れている。

ああ、人の群だ。誰も私を知らない、波のように過ぎていくざわめきだ。目を伏せて身を任せると、慣れた静けさが私の中に訪れる。顔の見えない気配と、言葉の聞こえない音。

五分ほど待ったところで、シオンが来た。

着物と袴はそのままで私の前に飛びこんできて、一度大きく息を吐いてから顔を上げた。どうやら全速力で走ってきたらしい。

「ごめん！ ちょっとお客さん多くて」

「いいのか？」

「うん、ウラは入れる人数が限られてるから、あんまり居残ってても邪魔になるんだ。一段落したし次のシフト人数も揃ったし、大丈夫。ユウヤは？」

シオンと一緒に辺りを見回したが、あの目立つ長身はどこにも見あたらない。さてどうしたものか、とお互い顔を見合わせたところで、どこからか簡単なメロディの賛美歌が聞こえた。携帯電話か、と泡を食って取り出すと、やはりランプが明滅している。

「あっ、ケータイだ！ おっちゃんの？ 買ったの?!」

「ああ、そう、この間……ユウヤに。あれ？ ん？」

手こずっている私の手元を、シオンが覗きこむ。

「わーすげー……いいなー、やっぱオレも欲しい。後一年半くらいかあ……」

シオンは羨望に満ちた声で呟き、指を一本出して携帯電話の端に触った。そうこうしている間に着信音は勝手に止んだ。つまり、切れたということだろう。……ユウヤにしては切るのが早くないか？

「メールじゃない？ ……どれだろ。なんか、手紙みたいな絵の……」

携帯電話をよく知らない二人で四苦八苦しなながら触るものの、最後にはなぜか待ち受け画面に戻ってしまう。三度ほど戻ったところで、シオンが顔を上げた。

「あっ——ワッタ！ ワッタ、ちょっといい?! こっち」

シオンが手を振って呼び寄せると、少年が一人自分の顔を指さしながら戸惑い顔でやってきた。

「ワッタさあ、ケータイ持ってたよね？ これ分かる？」

「分かる？ って……何したいんだよ」

「メール見たい」

ワッタと呼ばれた少年は、私の方を微妙に気にしながらも携帯電話を操作し始めた。その指の動きは、正直速すぎて何をやっているのか分からない。ものの数秒もしないうちに目当ての画面が現れ、無造作に差し出されたそれを、私とシオンは目を丸くして見る。

「ん」

「……うおー、すげえワッタ！ ありがと！ ファンタグレープ？」

「オッケ。後でな」

少し誇らしげに笑いながら、少年はシオンに親指を立ててみせ、私に軽く頷くように頭を下げ、ぶらぶらとやる気のない様子で去っていった。

「……礼を言い損ねちゃったな」

あまりに鮮やかな手つきと去り際に、結局私は一言も発することが出来なかった。なんとなく情けない気分だ。

「言っとくよ。一年のとき同じクラスでさ、今も結構……あっ、やっぱユウヤみたい。まだ来れ

ないって」

まあ、これにかけてこれるのは今はユウヤだけだから、ユウヤなのは間違いないだろう。

文面は、ヤボ用で遅れる、と素っ気ないほどの簡潔さだった。

「ヤボ用って何だろ」

女子生徒に手え出してなきゃいいが、と口に出してもいいものだろうか。と一瞬迷った間に、シオンはさっさと頭を切り換えてしまったようだ。

「ま、いっか。行こ。おっちゃんに見せたいものがあるんだ」

こっち、と指し示された方向に、シオンを追って歩く。

どこに行くんだ、と聞いてみたが、薄茶の髪が笑いに揺れるだけで、答は返ってこなかった。

7.

結果、シオンの行き先は屋上だった。

重ねて言うが、私は少し運動不足で、今それを悔いている。四階まで上がるだけでも息が切れたのに、まだ上の六階まで一気に登った。明日は筋肉痛になること請け合いだ。

「うわー、気持ちいい！ 風強い！ おっちゃん、……だいじょぶ？」

強く吹いた風に両手を広げて喜んでいたシオンが、振り向きざまに私を心配する。大丈夫だ、と言いたかったが、壁から手を離して挙げてみせるだけで精一杯だった。立ち止まった途端汗が吹き出して、膝がちょっと笑っている。こういう時に一気に老け込んだ気分になる。ユウヤほど鍛えたいとは言わないが、少し運動はするべきだな。

「えっと……ごめん。座る？」

シオンは慣れているのか若さなのか、息一つ乱していない。元々身が軽いし走るのも速いから、私と比べるのが間違っている。手を貸そうかというのを断って、設置されているベンチに腰を下ろした。プラスチックの座面はかなり古びていて、塗装が随分剥がれていた。ここなら雨風に晒され続けるだろうし、不思議はない。

床は、緑色のゴムめいた感触だった。バレーボール用らしきコートが描かれているがポールとネットはない。シオンが、給水塔の下に収納場所があるのだと教えてくれた。使うときはその都度立てるのだそうだ。

人の集まる運動場は反対側だ。音楽もざわめきも、ここでは遠い。無音ではないが、音量を抑えたラジオ程度だ。

見上げると、鱗雲が空一面に広がっていた。まるで青い体の魚でも空にいるようだった。びっしりと空を覆う白い鱗の向こうで、壮麗に身をくねらせる魚。

「やっぱり人いないなー。みんな体育館かな。うちの演劇部すごいんだよ。毎年人気で、見られなかった人にはビデオ上映するんだ。オレ去年は知らなくて、この間見せてもらった。なんかすごいアクションものだったんだ」

隣に座ったシオンは、同じように空を見上げて嬉しそうに目を細めた。

「今年は何だったかな。シンデレラvsアリストテレスvs織田信長～愛と哲学と覇道の行方とか何とか」

……それはツッコミ待ちなのだろうか。とユウヤに毒されたようなことを思ったが、脳裡に残るむくつけき姫君の姿が私を沈黙させた。ああ、もしもあれならそうなら相手が織田信長だろうがメフィストフェレスだろうが勝てるかも知れない。ただアリストテレス相手に哲学的論戦が出来るかは未知数だ。

「興味あるならおっちゃんも見る？ ダビングしてもらえるよ」

「……いや、いい……」

首を振ると、シオンは笑った。面白いのになあ、と言いながらも気を悪くした風もない。

シオンは、よく喋った。まるで手紙に書けなかった時間を埋めるように、ひどく浮かれた様子で。疲れ切った私は簡単な相槌程度しか打てなかったが、もし万全の状態だったとしても大し

た差はなかつただろう。

「うちの喫茶店も結構頑張ってるよ。女子でセンスいいのがいてさ、花とか揃えてくれて。クロス貼り付けるのとかは男子がやって。でも細かいところは女子が手を出してくるんだ。衣装はね、演劇部に入ってる奴が交渉して揃えてくれた。着物とか袴とか、みんな家になしさ。だから今日洗濯して、明日まとめて持ってくる予定。でも慣れないと結構肩凝るよねえ……」

奔流のような声が、魚の下を泳ぐ。白鱗が弾く光が天から降り注ぎ、時折風を吹かせ、下界の騒ぎを伝えてくる。

私がすっかり落ちついたところを見計らったように、シオンが身軽に立ちあがった。

「おっちゃん、見て。こっち」

追って立ちあがったが、休息は充分に取れたようで、膝はもう笑わない。腿を鎚で叩いたようなだるい疲労はあるが、これは仕方ない。

導かれたのは、屋上を囲う金網の側だった。ぐるりと隙なく張り巡らされて、見上げるほど高い。金網の目は足をかけられない程度に細かい。

金網越しの空はそれでも広く、いつもより近い気がする。比肩する建物がないからだろうか。眼下には生い茂った木々と、その向こうの住宅地。似たような屋根が並ぶ中にひとつ、少しだけ飛び出してぽつりと佇む――

「見えた？ あれ、おっちゃんのところ」

「……ああ。見えるんだな、ここから」

シオンが、私の見ているものを指さした。

聖堂の屋根に立つ、小さな十字架。いくつかあるビルを避け、張り巡らされた電線の中、瓦の波の上で密やかに光を弾いている。

聖堂から学校が見えるのだから、学校から聖堂も見えるのは当然だろう。けれどそれは、何か予想もしていなかった不思議なことだった。この高さなら、何もかも均一に埋もれて区別などつかないと思っていたのかも知れない。

「ここからしか見えないんだ。すぐ下の教室だと、手前のビルにちょっと隠れちゃってさ。初めて見たとき、なんだアレって思って。あ、十字架を知らなかったわけじゃないよ！ んで、教会があるんだあ、って思ってさ。なんとなく毎日見に来て」

シオンは、金網を掴んで体をぐうっと伸ばした。のびやかなその仕種は若い猫のようだ。

「カミサマとかあんまり考えたことなかったからさ。初詣も行くしクリスマスもやるし、でも信じてるわけじゃなくて、全部なんとなくだから。サンタクロースがいればいいのに、いないこと知ってる、でもどっかにいてもいいんじゃない？ くらいの。……でも、あそこにはカミサマがいるのかな、って」

体を伸ばした反動で、シオンが金網にくっつく。かしゃん、と金属の擦れる薄い音がした。薄茶色の瞳は光る十字架を真っ直ぐに見つめている。

「あそこにはカミサマがちゃんとして、そしたらあの下は天国とかにも繋がってて、なんか違う世界なのかなって。そしたらちょっと行ってみたくなった。でもオレはカミサマのこと信じてないし、そしたら居場所ないかもしれないから、見てみるだけにしてみようかなって。そんで行っ

てみたら……ウソつきでスリッパ蹴ってきてしかもチョーやる気のない神父さんがいた」

顔だけ私の方に向けて、シオンは歯を見せて笑った。

私は応えて苦笑を零す。

「そりゃ悪かった」

「スリッパ痛かった」

「悪かった」

責めているシオンも責められている私も、そうとは思えないほどのんびりと笑う。金網の向こうで青い魚が風に煽られて動く。西の方から鱗が崩れていく。

「……でも、居場所がない天国より、ずっといいやって思ったんだ。おっちゃんはオレのこと嫌がらなかったし、ちゃんと話の相手してくれたし、ユウヤだって、最初はヘンだったけど慣れたら面白かったし。天国には繋がってなくて、違う世界でもなかったけど、おっちゃんのところはオレにはすごく大事なところになったんだよ」

くるり、と体を反転させて、シオンは金網に軽く寄りかかった。

「おっちゃん、なんかねえ、おっちゃんところ行ってからオレ変わったらしいよ。変わった感じはしないんだけど、なんか、なんだろう。どっちかっていうと、みんながオレに優しい気がする。なんか、あれ？ って思うんだけどね。仲良くしてくれるんだ。オレでいいのかなって思うんだけど、やっぱりちょっと嬉しいんだ。この着物もさ」

腕を広げ、袖をつまんで引っ張るシオンの体の上で、シンプルなトンボが泳ぐ。

「オレにはコレがいい！ ってみんなが選んでくれた。ちょっと子どもっぽくなってオレは思ったんだけど、なんかどうでもよくなっちゃってさ。いいか、って。でもユウヤにはやっぱり子どもっぽって言われたけど」

不満そうに口を尖らせたシオンに、私は思わず吹き出した。ユウヤは元々シオンが可愛くて構っているのだから、子ども扱いは今に始まったことでもない。子どもと大人の境界線にいるシオンには至極複雑だろうが、少年時代の遠くなった身からすればひどく微笑ましい葛藤だった。

「……【心の状態で、人の顔つきは変わる。うれしい顔にもなれば、悲しい顔にもなる。晴れやかな顔は、良い心の表れである】」

「えっと……シラ書だ。確か」

「そうだ。よく覚えてたな」

「その次が好きなんだ」

「私も気に入ってる」

私たちは声もなく笑い合う。

「——何か、辛いことはないか？」

薄茶色の瞳が驚いたように瞬くのを見て、私はゆったりと笑いかける。

「お前はずっといいことを書いたり言ったりしてくれるけどなあ。それは勿論嬉しいし、悪いことじゃねえよ。ただ、それが辛いことから目を逸らした結果でなきゃいいんだがな、と私は思う」

驚いた顔はやがて困惑に変わって、それからぎこちない感じで口角が上がった。眉は困ったままで、シオンは首を傾げる。

「そんな——こと、ないよ。だって学校も今楽しいし、家、だって、好きだし。あのさ、オレ大丈夫だよ。やだな、おっちゃん心配しすぎだよ。オレ大丈夫だよ」

「そうか。心配しすぎか」

「うん、そうだよ」

大きく頷くシオンに、私は苦笑を返した。

「じゃあ、いい。悪かったな。年寄りにはたまに若者が心配になるんだ」

「ダメだよおっちゃん。自分で年寄りって言ったらホントに年寄りになっちゃうよ」

「それは困るな」

かなり切実な口調で答えると、シオンはやっと眉を晴らして晴れやかに笑った。

金網を掴んだまま、背伸びをするように空を振り仰ぐ。後ろに流れた薄茶色の髪が、柔らかく揺れる。

「ああー……でもさ、辛いとかってほどじゃないけど……おっちゃんどこ行きたいなあ。おっちゃんとユウヤと、またあんな風に遊びたい。喋りたい。……オレ迷惑じゃない？」

その小さな呟きは、すべて本当の言葉に聞こえた。

最初から最後まで。疑問文の後の目に見えない、無音の小さな震えまで。

溜息をついてその色素の薄い髪をかき混ぜるように撫でてやったら、シオンは首をすくめてまた口を尖らせた。

「おっちゃん、オレの頭撫でやすい？」

「……まあな」

じゃあいいけど、やっぱよくないかも、とぶつぶつ言っているシオンを横に、私は左手に持った紙袋にそっと目を落とす。

さて、これはどうしたものか。ユウヤがいれば説明も簡単なのだが。そもそもあいつはどこに行ったんだ。遅れると言ったまま、まったく音沙汰がないが——。

そう思った途端、監視していたかのように私の携帯電話が鳴った。本当にどこかで様子を見るんじゃないだろうな。そう思ってつい周りを見回したが、あいにく人影一つ見あたらない。賛美歌は延々と鳴り続けている。

「おっちゃん、切れちゃうよ？」

「いや、多分大丈夫だ……メールじゃねえなら、いつも、これくらいは……これか」

漸う通話ボタンを押して耳に当てると、まず笑い声が飛びこんできた。

『すげえ、一分五十秒。俺よく待ったなァ。最長記録も更新デスよ、神父サン』

「人を三十分以上待たせておいて勝手なことを言うんじゃないよ。何してるんだ」

『ゴメンゴメン、ちょっと数が増えちゃって手間取った。今ココ？』

ユウヤの声は軽い。何か困ったことになっている様子はなかったので、ひとまずこちらの場所を告げた。ラジャ、と言葉を残して電話は切れ、私とシオンは顔を見合わせる。

ユウヤが屋上に現れたのはそれからそう時間の経たない頃で、当然のことながら息も切らさず余裕で入口の上枠に手をかけて屋上を見まわした。私とシオンに手を振り、余った片手で風に煽られる帽子を被り直す。風をはらんだコートが一瞬足に絡み、すぐに広がってなびいた。足取りは踊るように軽い。

「お待たせー。おオ、ここ眺めいいじゃねエの。空近エな。しかもすっげエウロコ雲」  
歩きながら両手でフレームを作り、目を細めて嬉しそうに笑う。

遅いよ、とシオンが口を尖らせると、ユウヤはフレームを解いて軽く肩をすくめた。

「悪ィ。ンでもまァ、神父サンとはゆっくり話せたる。禁断症状起こす寸前だったんだからな、この人」

「人を変な病気持ちみてえに言うな」

「えエー。いいじゃねエの、ちょっとした仕返しデスよ。ったく、シオンばかり可愛がっちゃってさァ。ヒイキだよなァ」

「……ユウヤって、おっちゃんに可愛がりたいの？」

「……………」

首を傾げたシオンの言葉にユウヤは寸時沈黙し、それからゆるりと首を横に振った。

「いや、可愛がられるならイズミちゃんより熟女の方がいい」

そんな真剣な顔で言うことか。

いや、それよりも。ユウヤがこうして私を怒らせるような軽口を叩いていることに、嫌な予感を覚えるべきだろうか。特に彼が私の本名を持ち出す時は、大概何かを誤魔化したい時だ。別れて行動している間に、何かあったと考えるのが自然だろう。

だが、私が問いつめようと口を開く前に、ユウヤが私の手にあった紙袋を取り上げた。

「まァ、そーゆーことで。俺らの可愛いシオンくんにプーレゼント」

「えっ」

無造作に胸もとに押しつけられて、シオンが目を白黒させる。咄嗟に受け取ったまま固まっているのを見て、ユウヤが緩く拳を握り、中指の第二関節で軽く紙袋を叩いた。

開けるように促され、シオンは忙しなく瞬きながら中を探る。

わざとかどうかは知らないが、ユウヤは私の方を見ない。箱を取り出すシオンを涼しい顔で見ている。……これでは話を蒸し返すことは出来ない。仕方なく、問いつめるのは一旦保留することにした。

「うわあ、ケータイ!？」

箱を開けたシオンが、目を輝かせた。箱の中から、私が持っているものより更に小さく薄い機械を取り出す。色は品の良いワインレッドだ。落ちついた色なので、派手には見えない。

「えっ、でも、なんで？ 本物？ だってオレまだケイヤクとか出来ないし」

本気でびっくりしたように目を丸くするシオンに、ユウヤは至極満足そうに目を細めた。何かやるときは必ずびっくりさせないと気が済まない男だ。

「何、欲しくねエ？」

「いや、欲しいよ！ 欲しいけど……高いよね、ケータイって。……おもちゃ？」

憧れを込めてしっかり握った電話機を、シオンは恐る恐る覗きこむ。表面の液晶部分には今の時刻がデジタル式で小さく表示されている。

「本物デスよ？ スマホじゃねエけどイチバン最新機種。モニター機だから本体タダ。ソんで電源入ってるしアンテナ立ってるし、後アレだ。オレと神父サンの番号入れてッから。メールも使

えるように全部設定してるし、まァとりあえずプリペイド三千円分で、有効期間は二ヶ月くらいだったかな。リチャージは俺に言って。トモダチ抱き込んであるけど、あんまりヤバいことになるよマズいから」

「マズいからって……えええ？」

一体何が起きているのか、全く把握できていない顔でシオンが焦る。無理もない。ユウヤは説明しているつもりなのだろうが、まったく説明になっていないからだ。……しまった。ユウヤがいても説明が困難だ。どこからどう説明したものか。

「……まあ、つまりだな。シオン。お前に何かあったときの連絡手段が今はねえってことなんだ。ユウヤと私が学校帰りの時間に会いに行くか、お前が私に手紙をくれるか、それくらいだろ。学生の間は駄目だという家庭の方針に口を出すのはどうかと思うんだが、ユウヤは——あー……私も、だな。お前の、兄さんに」

「クソ兄貴でいいだろ」

ぼそり、とユウヤが口を挟む。本当に立原久音が嫌いだな。

「いいわけねえだろうが、シオンの身内に……。ともかく、警察署でお前が問答無用で殴られたことが、少し気になってる。虐待とまでは言わねえが、それに近いことはあるんじゃないか、ってな」

「あれは……だって、オレが悪かったんだし。兄ちゃんは悪くないよ、オレが」

「ああ、分かってる。お前がそう言うだろうってこともな。ただ、ユウヤと私は、お前とすぐに連絡をつけられると安心するってだけだ。お前なら妙な使い方はしねえだろうし、信頼してるから私も同意した。だから、使わなくてもいい。持ってるだけでもいらねえ、余計な世話だってお前が言うなら返してもいい。私たちが勝手にやったことだからな」

ユウヤの方を窺うと、なんとなく不満そうだったが異を唱えることはなかった。

「……オレ、二人に心配させてた？」

悄然と眉を曇らせて、シオンが浅く俯く。浮かんでいるのは困惑と、沈鬱さと、迷いだ。携帯電話を見つめる目が、ひどく葛藤している。

「心配して悪ィかよ。日常あんなンなら殴り込みに行ったっていいんだぞ俺ァ」

「そっ、れは、ちょっと」

不機嫌を隠さないユウヤに、シオンは慌てて顔を上げる。力尽くの物騒な話になった場合、立原久音の身が危ない。その後のユウヤの社会的立場も危ないが。

「いいから持ってろよ。ばれなきゃ問題ねえだろ、一年半くれえだしよ。そもそもお前神父サンにあの頻度で手紙送ってたら切手だの便箋だの封筒だのだってバカになんねえだろが。三千くらいあっちゅー間だぞ。通話機能はおまけで格安の手紙送付機と思え」

「う……えっと。……メール？」

「メール……」

「そこで拒否反応起こしてんじゃねえよ浮世離れズ」

きっぱりと一喝され、私たちは顔を見あわせ首をすくめる。最新機器を難なく扱える者には、扱うのに苦労する者の気持ちが分からないのだ。たかだかメール一通確認するのに何度も待ち受け画面に戻る謎など、言えたものではない。

首をすくめたまま、シオンが二度ほど瞬いて私の方を窺った。

「……ねえ。もしかしておっちゃんって、このためにケータイ買ったの？」

「そォ」

「……いや、お前が返事をするなよ」

「いーじゃねエの、そォなんだから」

まあ、間違っただけではないが。もう少しユウヤとシオンと連絡を取りやすくするために契約したわけだが……そう断言して、シオンの負担になっても困る。

シオンは私を見て、ユウヤを見て、それから手に持った携帯電話をじっと見つめた。葛藤の中にも、頬が少し紅潮している。欲しかったのは間違いないのだろう。家庭の方針だからと我慢していたところにこの誘惑は酷だったように思える。

ユウヤは、シオンの結論を待つことにしたらしい。それ以上は何も言わなかった。けれど、先ほどから何か雰囲気荒い気がする。立原久音が絡むからなのか、それとも私の気のせいかどうかは分からないけれど。

携帯電話の件に関して、ユウヤは非常にしつこく強引だ。その強引さが特に珍しい訳でもないが、時折心に引っ掛かる。一年半後にはちゃんと契約をするだろうシオンに、今持たせなければならぬ理由でもあるのだろうか。

なんというか、今更になって思うのも若干遅いかも知れないが。

「……あんまり、使えないかもしれないけど。こっそりになるから。家で音が鳴ったら困るから、学校だけになっちゃうし、学校でもあんまり」

「あァ。なら音が鳴らねエようにすりゃいいだろ。ってか、お前から連絡がありゃァ、こっちから掛けるこたァ滅多にねエよ」

おずおずとしたシオンの承諾に、ユウヤは表情を和らげた。何にせよ、持っていてくれるならそれでいい。そういった感じの表情だった。

その後は、若者二人で嬉しそうに新しい携帯電話をいじっていた。シオンは若いだけあって飲み込みが早く、慣れさえすれば私よりずっと速く使いこなせるようになりそうだ。私も脇で見ていたがさっぱり分からない。が、待ち受け画面に戻る謎は解けた。というか、ホールドボタン——受話器が横になったボタンだ——は滅多に押すなど叱られた。本当に、次に使うボタンだけ光ればいいのに。

「ってか、トリセツ読んだんじゃねエの？ 神父サン。俺が捨てんの止めたじゃねエの」

「トリ……？ ……取扱説明書か？ 読んだ。読んだけどそれとこれとは話が別だろ」

「話が別じゃ意味ねエだろ。だから俺がいらねエっつーたのに」

「いるもいらねえも読まねえうちから捨てる奴があるか」

「えっ、ユウヤ取扱説明書読まないの？」

「読まねエよ、ってかフツー読まねエだろあんなン！ めんどくせエ」

「読むよフツー！ ねえおっちゃん！」

「ああ、読むな」

「えっ、なんで俺少数派になってんの?!」

若者二人が驚愕しあっている間に、私はこつこつとメール画面に慣れる練習を続けた。通話の

次はメールか。道のりは長そうだ。

一時間ほどユウヤのスパルタ講義を受け、残り時間は校庭に降りて色々を見て回ることにあった。

衰えない派手な騒ぎだが、これでも昨日に比べれば保護者が来ている分だけ大人しくなっているという。昨日はどんなことになっていたのか、聞くも怖ろしい。

ちなみに演劇部の公演は大成功だったそうだ。後でポスターを見たユウヤがうわァちょっと見たかったなと残念がっていた。……結局どんな話になっていたのだろうか。

帰りの車中で、奇妙な沈黙が度々落ちた。常ならどうでもよさそうなことを楽しげに喋り続けるユウヤだが、目が泳いで話が途切れる。どうやらすべき話題を切り出しあぐねている雰囲気がある。

私には言えるがシオンには知られたくないことなのか。それとも私にもシオンにも言えない類のことなのか。五度目の沈黙が落ちた時に、私から水を向けることにした。

「……【さあ、お前の畑には茨で囲いを巡らせ。お前の口には戸を立てて、かんぬきを掛けよ。お前の金銀はしまつて錠を下ろせ。お前の言葉は秤にかけて、慎重に用いよ。口を滑らせないように注意せよ。待ち構えている者の餌食になるな】」

「うっわァ、そォォゆー言い方……いや、あの、神父サン、それはちょっと性格悪くねエ？」

「そうか」

「否定しねエし……。いやァ、そーゆー意味でアレしてんじゃなくてさァ……ってかもう、どッから嘸みついてくんだよ怖エなァ」

スピードを緩めハンドルに覆い被さるようにして身を沈め、心底困ったようにユウヤが呻く。

「ってことは何か隠してやがることは認めるんだな。潔いじゃねえか」

「お褒めにあずかりまして……」

ごによごによと語尾を誤魔化し、ユウヤは短く息を吐いて背筋を伸ばした。だからァ……と言いつつ訳が続きそうになるのを、私は手を振って止める。

「言いたくねえとか言えねえとかなら言わなくていい。隠し事を暴くのは司祭の仕事じゃねえし、友人のやることでもねえからな」

「……単にドライなんだか、信頼してくれてんだか……」

ユウヤは深々と嘆息し、ハンドルを切る。急な坂が終わって市街地に入り、また会話は消えた。音楽だけが騒がしくエンジン音と共に鳴り響き、場を埋めている。日は傾きかけ、左手から強い光を放っていた。

続きはなんだったかな、とその光を浴びながら思った。マタイ受難曲第五十七番。人の子は夕暮れに架せられた。その身に人の罪穢れを負って、すべてを捧げ、すべてを雪いだ。

Komm. susses Kreuz, so Will ich sagen—— Mein Jesu, gib es immer her.

我に苛烈なる苦難訪れし時には……。

「……お前ひとりに重すぎるなら、遠慮はいらねえから頼れ。吐き出し口くれえにはなれるだろ」

呟くように投げた言葉に、ユウヤはちらりと横目を向けてきた。口元が緩んだような声で、うん、と声を掠れさせ、それから体を揺らして笑った。

来たれ、甘き十字架よ。——苦難を共に負い救いをもたらし給え。

幻のように旋律を聴きながら、私は聖堂の前で車を降りる。見上げると、橙色の光を帯びた十字架が高く上がっていた。

「……あのさア、神父サン。俺ちょっと、しばらく来れねエから。ミサも。あー……なんかあったら連絡、とか」

車に乗ったままのユウヤは帽子を取って頭を掻き、唇を舐め、顔をしかめて言葉を探している。どうやら彼は追及よりも、私が気を悪くする方を怖れているようだ。この男にもそんな殊勝なところがあったのかと思えば、自然に笑みが浮かんだ。

「分かった。またな」

「……あア、うん……また」

ほっとした顔を見せて、ユウヤは車を走らせ去っていった。

さて、あの傍若無人の快樂主義者が一体何の荷物を負っているのか。正直に言えばそれについていい感情は抱かなかったが、今はどうしようもない。

敷地の中に入る前にふと振り向くと、一台の車が止まっているのが見えた。黒の乗用車で、ナンバーは見えにくい。フロントガラスの奥に人影も見えたが、そのうちに発進し、どこかへ行ってしまった。

ユウヤと同じ方角へ。

8.

十月も半ばを過ぎるとかなり冷えてくる。少なくとも、もう暑さは完全に鳴りをひそめてしまった。

シオンから最初のメールが届いたのは、文化祭から数日後のことだった。おそらく昼休みに送ったのだろう。昼食中に鳴らされて慌てふためいた。賛美歌391番を聞く度に焦るようになったらユウヤのせいだ。……いや、その前に私が慣れればいいという話だが。

初メールと題されたその内容は他愛ない。携帯電話の操作が難しいこと、でも少しずつ慣れてきたこと、鞆の奥にしまっているのをつい気になってしまうこと、等々。

『ああ疲れた。手紙の方がいっぱい書けりなあ。でもがんはって慣れます。またね!』

末文はそう締めくくられていて、苦闘の様が見て取れた。

人間とは不思議なもので、同じような技量で頑張っている相手を見ると、何となく、よし自分もやろう、という気分になるものだ。ということで私も返事を送ることにした。平日の昼間なら問題ないだろう。確か着信音も消す設定にしていたはずだから。と打ち始めたはいいが、送信自体は明日の昼間になりそうで少し気が遠くなった。けれど実際にはそこまでかからず、夕方には送れた。シオンは喜んだようだ。また返事が来た。

ユウヤからの連絡はない。ミサも休むと宣言されたのは初めてだが、バイトでも集中して入ったのか、それとも何か違う理由なのか。まあ、ミサも強制の義務ではない。信教しているから安息日をそのように過ごすというだけだ。他の信徒も別に熱心ではないから、そのうち私一人という日があっても不思議ではない。幸いにして今のところは一度もないが、もしそうなったら隣町にある聖堂に行ってみたいと思っている。一般信徒のフリをして紛れ込んだら彼らは嫌がるだろうか。嫌がるかもな。まあ、実際はこの聖堂を放って出ることは出来ないのだが。

通例の報告書を書きながらふと窓の外を見ると、木の葉が丁度落ちるところが見えた。かさついた茶色が風に煽られながら地面へ向かう。落葉の木々は所々色づき、空の深い青に良く映えた。まだ紅葉と呼べるほどのものでもないが、季節は変わっている。

空を高く行く風の音はひどく凍えたものになってきた。朝と夜の気温は下がり、昼の日差しが心地よく暖かくなってきた。道ばたを落ち葉が走り、からからと音を立てる。

雲の流れが速い。千切れたような雲が段々と増えていく。携帯電話の待ち受け画面には天気予報が設定されていて、晴れのち雨の表示があった。正直これだけは文句なく便利だ。いちいちテレビやラジオをつけてニュースを待たなくてもいい。けれど新聞より情報が速い。ただし一緒にくっついてくる交通情報は特に必要ない。

こうして毎日なにがしか変化していく。夏から秋へ、晴れから雨へ、緑から紅や黄色へ。一日過ごすごとに何かが変わっていく。

私は新しい友人を得たし、持つこともないと思っていた携帯電話も持った。あの頃に比べれば穏やかでささやかで、あまりに幼い変化だ。

あの人が聞いたならなんと言うだろう、と時折思う。変わる事のない闇の中、逃れる術も気力もなく横たわっていた私に、辛抱強く手を差しのべてくれた人は。私にこの場所と自由をくれた

人は。

私は少しでも、貴方の望みに近づいているのだろうか。

私にとって望みとはそうしたもので、何の疑問に思うこともなかった。送れるはずもない報告を主への感謝に変えて祈り、当たり障りのない簡易的な報告書は投函した。

そういう意味では、私は根本において何も変わっていないのだろう。世界は美しく、かつ遠く、そうあるときだけ私を魅了した。静かで現実味のない愛しさだった。

やがて、空は急に陰って一つ二つと雨粒を落とし始めた。最近の天気予報は良く当たる。どこかで女性が、洗濯物が、と叫ぶ声が聞こえた。無事ならいいのだが。

降り出した雨は夜半になっても止まず、秋雨終盤にしては激しく降り出した。気温も比例してどんどん下がっていき、寝るときは薄い毛布を足すことになった。

秋は徐々に深くなっていく。

天気予報は、遅い台風の発生を告げていた。沖縄海上で発生し、数日後にはこちらに来るという予報だった。

『おっちゃん、元気？ オレちょっと風邪気味っぽい。この間の雨から急に寒くなったもんね。気をつけないと。ユウヤにもメール送るんだけど、返事ないんだ。元気かなあ？ ユウヤなら大丈夫だよ。それではまた』

やりとりを重ねて、シオンのメールはかなり誤字が少なくなった。そして短くなった。その代わり回数が増えた。少しの量をその都度送る方がやりやすいらしい。途中保存も出来るみたいだけどまだよくわかんないから、と書いてあった。……書きかけをどこかに保存できるのか。そう思って取扱説明書を探してみた。本当にあった。

いっぱい送ってごめんね、とあったが、返事を急かされるのでなければ構わない。特に今は、ユウヤによる抜き打ちの応答テストがないので気が楽だ。昼頃に賛美歌391番が鳴っても、ああメールか、で終わる。物事に慣れるコツは、大概はその回数をこなすことだ。その点で、シオンのやり方は正しい。彼にとっても、私にとっても。保存のやり方はまた別な折に慣れれば良いのだから。いや、言い訳ではなく。

その日の朝はどんよりとした天気だった。台風の影響で日本列島全体を雲が覆っているらしい。今にも降り出しそうだから、早めに買い物に行っておくことにした。

近所のスーパーに行けば、顔なじみが結構歩いている。信徒ではない。ただの近所づきあいだ。色眼鏡で見られているのは知っているが、問題を起さなければ特別何か言ってくることもない。挨拶をすれば挨拶が返ってくるし、世間話程度なら十分可能だ。時折配達にやってくる郵便屋や宅配人と大差はない。

私を好かない人もいる。まあいるだろう。嫌う人もいる。憎んでくる人は幸いにしていない。……と思う。私自身が私の知らないところでどう思われているかなど、考えても仕方ないことだから、気にしないことにしている。

世の中の人には大概良くも悪くもなく、表面的には泣きも笑いもせずに過ごしている。淡々と暮らすその中で、感情をぶつけられる、ぶつけてもいい者、あるいは物を探している。導いてくれ

る者を切望し、恐る恐る道を辿り、時に自分ごと見失う。その内側は傷だらけだ。生きていることが不思議なほど、大小様々な傷跡から真新しい血が吹き出るのを眺めている。そしてそれを繰り返し繰り返すことで、痛みにすっかり慣れてしまう。まるで何事もなかったかのように無視するか、治しもせずにその傷を誇示する。

——人は、不可思議だ。

両手に買い物袋を提げて、アスファルトの道を歩く。西の空に重ねられた雲の群を見ながら、聖堂への道をゆっくりと辿る。野菜と肉、魚、ミネラルウォーター、小麦粉、牛乳、葡萄ジュース。結構重い。米が足りていて助かった。あれから少しずつ歩くことを心がけているが、プラス5キログラムは流石に辛い。誰かのためならともかくも、一人の時にその苦行は辛すぎる。

時折思う。人は不可思議だ。では人の身で他人事のようにそう思う自分は何なのだろう。昔はそういう自分が嫌でたまらなかった。多分若かったのだろう。自分を変える力もなく、意志もなく、苦しいだけの理論で生きようとしていた。

人とは何なのか。自由と束縛と都合の良い愛を渴望しながら生と死の間に生きるこの存在は何なのか。冗談でも何でもなく、私はそういう疑問にはまりこんでいた。そこから抜け出せなかった。生は果てしなく続く苦痛であり、死はいかにも甘美な魅力に溢れていた。それでも絶望はしていなかった。

荷重で下がり続ける腕を揺すり上げて元の位置に戻し、指に食い込む痛みを動かして紛らわす。遠くから雨の匂いがする。道の先にある誰かの家の庭らしき場所に、実の色づきかけた背の高い柿の木が見える。気の早い鳥が数羽、その上を鳴きながら旋回している。ふと何かが動いた気がして視線を下げると、回転灯をつけた無音のパトカーがゆっくりと遠くを横切っていった。

そういえば、夏の事件はまだ解決を見てなかったか。と今更のように思い出した。新しい事件が起こればまた人の口にも上るが、大体はすぐに忘れられる。人のことだからだ。自分のことなら忘れない。何年経とうが、どれ程のことをしようが、忘れない。忘れないという決心をしている限り、事件は終わらない。

終わっていない。

家の前に、白い乗用車と人影が見えた。

私を見て、頭だけを下げると、会釈をした。くたびれたスーツにすり減った靴。表情が分かるようになると、髭面に人懐こい笑みを浮かべていた。その後ろにはそっぽを向いて立つ若いスーツ姿の男性もいて、そちらは横顔がひどくふてくされていた。

山本刑事と坂下刑事。

荷物が重くて手が挙げられなかったので、私も会釈をした。

冷蔵庫に入れるべきものをまず入れて、それからお茶を出すことにした。さすがにもう麦茶はない。十月ももう少しで終わる。

山本刑事は、お構いなく、と相変わらず人懐こく笑んでいる。坂下刑事は頭を軽く下げたが、実に不機嫌そうだ。しかしその不機嫌は、どうも私ではなく隣の山本刑事に向けられているらしい。

私とその不機嫌を気にしつつ向かいに座ると、山本刑事が湯飲みに口をつけて湿らせ、前置き

なしで話を始めた。

「早速ですみませんな。唐橋の居場所を御存知ありませんか」

その瞬間、坂下刑事が結構大きな舌打ちをした。

笑顔の山本刑事とのその温度の落差が、困る。どっちに気を使えばいいんだ。そもそもここが誰の家か考えろよ、いきなりの訪問者にあんたがそこまで気ィ使う必要はねェだろ、と誰かなら言うかもしれないが、これはなんというか私の、癖だ。目の前にいる人物の気分は気になる。そういう癖だ。

山本刑事は、私が坂下刑事を気にしているのを見てとって、軽い態度で横の頭に手刀を落とした。

「オイ、納得したんだろーが。いまさら不満くせえ顔すんな」

「納得なんかしてませんよ、センパイが勝手に決めたんでしょ。お得意のヤマカんだとか神懸かりとかで」

「神懸かりとは言ってねえだろ。神様ってなあそんなポンポン降りるもんじゃねえんだよ八百万の神ナメんなガキが」

「そんなうっさんくさいモン、関わりたくありませんね！」

.....ケンカをされると、もっと困る。軽いじゃれあいなのか、お互いに手や足が出ているのがなお困る。話が見えないのも相当困る。

話は——唐橋裕也の。

「唐橋が、何か.....？」

恐る恐る切り出してみると、いさかいはぴたりと止まった。まるで止めるきっかけを待っていたようなタイミングだった。山本刑事から笑顔が消える。この世のすべてを苦もなく切り分けるナイフのようだ。その刃の名前は、おそらく正義という。

「.....これは、以前お見せしましたね。この赤い髪のヤツが、唐橋の友人であると分かりました。よくツルんで歩いていたという証言もあります。こちらの髪の長いのは、唐橋の住居付近でよく目撃されている」

懐から、五枚のうち二枚の似顔絵を取り出して広げる。紙の音ほどの低い声。

「ということで、唐橋は現状最も有力な参考人であると目されています。容疑者として決定ではありません、が、クロには近い。彼を捕捉できれば、芋づる式で全員捕らえられる可能性が高い。そういう位置です。が、ここのところ何を察知したのか、さっぱり足取りが掴めませんでね。そこで、居場所を御存知であるなら、我々にお教え願いたい。そういう、お願いです」

その口元が、薄く笑った。好意があるようなないような、判別のつかない笑み。その隣からは、ほとんど疑惑と言ってもいい視線が刺さってくる。山本刑事にではなく、私に。

私は首を傾けて目を逸らし、うなじを手で擦った。特に意味はない。なんだか色々なことに納得してしまっただが、まずどれから行くべきだろうか。そう考えた。

どれから解決すれば、一番話が早いだろうか。

「.....それは、私に話しても差し支えないことなんでしょうか？」

「ご覧の通りです。まあでも文句は言わせません」

山本刑事は、いきなり表情が変わる。からりと笑い飛ばして、坂下刑事の背を一度強く叩いた

。叩かれたほうは、かなり嫌な顔をしてその腕を乱暴に払いのける。

「文句なら言いますよ。唐橋がクロならどう考えてもこの人も怪しいでしょう。それを引っ張りもしないで独断で全部バラして、説教ですまないことになったらどうする気ですか」

「おまえが好きにしろって言ったって言う」

「あんたいい加減にしろよ！！」

結構腹に力が入った怒声だった。礼儀正しく理性的に見えても、刑事は刑事だ。感情に流されるという意味ではないが、荒事も慣れている。そういうことだろう。山本刑事は慣れているようで、落ちつけと手を振っただけで何事もなかったかのように私に視線を戻した。

「お聞きの通り、あなたも大変微妙な立場にある。まあ、唐橋に関わりのある人間は全員、と言ってもいい。その中でもあなたが納得をされにくいのは、唐橋がひどく頻繁にここに通ってきていた、という事実です。ミサの日には必ず、と仰ったが、それ以外の日にもね。ただの信心と考えるには、それはあまりに不可思議だ。それでまあ要するに、ここで誰かと繋ぎをつけているのではないか？ という話になった」

「.....私を通して」

「そう、あなたを通して。あるいは、この場所を通して」

冗談を口にするように、山本刑事の態度は軽い。それだけに読めない。

正義の刃が、今どこに振り下ろされようとしているのか、が。

ユウヤの行く先など、私も知らない。どんなところに住んでいるかも知らないし、交友関係なんてものを知らうと思ったこともない。

何かあったら連絡を、とユウヤは言った。してくれ、とも、していい、とも最後まで言い切らなかったが、まあ文脈から言って、していいということだろうと思う。その、何か、はこれだろうか。携帯電話は沈黙している。フタを開いて電話をかけたら、ユウヤに繋がるのだろうか。

口元に笑みを浮かべた山本刑事と、険しい目の坂下刑事がそこにいる。

二、三度ゆっくり瞬きをして、私は口を開いた。

「.....【友人について、また敵について、何も語るな。罪とならないかぎり、人の秘密を明かすな】」

「は？」

「聖書の一節です」

あっけにとられた二人の顔が、ますます訝しげになった。

「疑いに惑わされて人の秘密を明かすならば、私が彼やあなた方や主から信頼されるはずもない。もしも唐橋が紛れもなく有罪であるならまたご連絡ください。そうでないなら、私は彼を信じます」

「ほう。ご協力は、頂けないと」

やけににやついて、山本刑事が確認してきた。

「疑いで人を裁いてはならない。悪意を持って人を疑ってはならない。人を裁くのは律法と、いと高き方です。それから、御存知ですか。主を欺く者は相応の厳しい報いを受ける」

私も笑い返す。穏やかに、誠実に、私の中のことばに従って。

「私は、召されるなら主の御許と決めておりますので」

「……………——食べねえな！！」

何かが爆ぜたように叫んで、山本刑事が声を上げて笑った。放っておいたら椅子から落ちて床に転がりそうなほど笑い転げるものだから、私よりも坂下刑事が焦った顔を見せた。

「ちょっ、何のんきに笑ってるんですか！　こんなうさんくさい言い分、真面目に聞いているんですか！」

坂下刑事は信仰に関してちょっとばかり偏見があるようだ。そしてまだ若い。本人の目の前で、うさんくさい、とかはつきり言ってしまうほどには若い。山本刑事は可愛がって育ててるんだろうなあ、と予測がついた。

山本刑事は笑いすぎで滲んだ涙を拭き、楽しそうに人懐こい笑みをその顔に戻した。

「工藤さんの信念はよく分かりました。けど、ワタシらは疑うのが仕事です。疑うだけの力と根拠を持たん被害者のために、徹底的に疑うのが仕事です。因果なもんですが、まあ多分求める結果は工藤さんと同じでしょう。そんならこっちはこっちの信念通りにやらせて貰います」

「どうぞ、と私が言うのもおかしいですが。法の守護者に主の御加護がありますように」

十字を切って微笑むと、坂下刑事はげんなりとして横を向き、山本刑事はざらりと無精髭を撫でてなお笑った。親密感のある笑みだった。

日曜日。宣言通り、ミサにユウヤは来なかった。新しい顔ぶれがあるでもなく、いつもの特段やる気もない信徒たちだ。ハロウィンのイベントはやらないのかと聞かれたが、あれはまったく別の宗教が起源だから、しねえよ。と毎年答えている。万聖節と万霊節なら行く。ただしイベントでも何でもなく、祭日のミサだ。そう言って毎年がっかりされる。にぎやかなイベントの方がやる気が出るのは日本人だからなのか、それともここの信徒だけなのか。しかし近年はまったく関係のない近所の子どもたちがハロウィンの夜に突撃してくる。……さすがにあれは断れねえ。

それはともかく、前回で慣れたのか飽きたのか、ユウヤの不在に関しては信徒の誰も何も言わなかった。それよりも、今晚か明日にでも来そうな台風の話の方が切実で、しばらく情報交換をした後は皆足早に解散した。

雲の流れが速い。風も強くなってきた。空気全体が湿った感じがする。これは本当に今晚にでも来そうだ。

聖堂での後片付けを済ませて家に戻る。一息入れるかとお茶を入れてテーブルに行くと、置きっぱなしだった携帯電話がゆっくりとした速度で緑色の小さなランプを明滅させていた。

ああそうか、ミサ中に鳴るとまずいと思って置いていったんだ。シオンのように着信メロディを消せばいいのかもしれないが、消すにはまた説明書を一から読み直さなくてはならないし、その後戻せる保証がない。しかし相手はシオンとユウヤだけなので、別にこのままずっと音が鳴らなくても構わない気もする。

フタを開けて見てみれば、珍しいことにユウヤからの着信だった。メールではなく、電話だ。何度かはかかっている、らしい。

すまんすまんと呟きながら、おぼろげな記憶を辿って電話を掛けてみることにした。

今どこにいるのか、何をしているのか。刑事がお前を捜してうちに来たぞとか、どうして雲隠

れしてるんだとか、色々と頭を駆けめぐったが、多分私は何も訊かないのだろう。それは信じているからとかではなく、私の根本的なスタンスだ。何も訊かない。何もしない。

呼び出し音が鳴る。私なら大体四十秒から二分前くらいまで待たせる。ユウヤはいつも、何を考えて待っているのだろう。

ぷつつ、ぷつつと呼び出し音が途切れる音がして、ざわつく気配がノイズとなって伝わってきた。鳴り響いているのは派手な打撃音の多い音楽だ。低い音がリズムを刻む。その際に、聞き慣れた声が滑り込む。

『——はいはァい、あなたのダーリンユウヤでっす。元気だったァ？ 俺がいなくてさびしかった？ 夜中に枕とか下着とか濡らした？ イズミちゃんさびしがりだからなァ、ウサギだからなァ。帰ったらちゃんと抱っこしてやるからイイコで待っててな、ハニー』 浮気はダメだゾ☆』

……この野郎。

「すみません、間違えました」

『あああ待って待って待ってごめんなさい！ ちょっと調子に乗りました、ごめんなさい切らないで！ スミマセン切らないでクダサイ、お願いします！』

慌てふためいた声と、がたがたと何かを動かすような音と、遠く伝わる下卑た笑い声。ちょっとどいて、と誰かに伝える小さな声の後、唐突に音楽が消えてノイズ音が減った。ユウヤが声を潜める。

『ごめん、ごめんって、マジ入れないでよ怖エよ。あれ、繋がってるよね？ ええともしもーし』

「なんだ」

『うっわァ機嫌ワルー……ごめんってば、ちょっと事情があるんだって、あのさ、コロから今日メール来た？』

「……メール？」

来ていない——と思う。携帯電話を耳から離して眺めてみたが、通話中では確認できない。

『あっそォ……そっちにもなしか……』

低い声の向こうから、車のクラクションの音が薄く聞こえた。ユウヤが黙っていたのはほんの一、二秒で、あのさァ、と低い声のまま話は続いた。

『あんたがドコまで知ってツかわかんねエから、言うんだけどさ。俺にも結構大事なモンってエのはあって、そいつらに顔向けできねエことはしたくねエって思ってんだ。つまり、俺は今そーゆーことをやってんのね。バツカなことやってんなァ、って自分でも思ってんだけど、ちょっと——うん、放ツとけねエからさ。だから、あんたは』

ユウヤはそこで一旦言葉を切って、小さく息を吐いたようだった。言葉を探すような間が、先ほどより長くあった。

私からは何も訊かない。何もしない。それでも関係が成り立つのは、とても幸福なことだ。恵まれたことだ。

『あー……だから、あんたはさ……そこにいてよ。あんたとコロがそこにいたら、俺は結構それでいい気がしてるんだ。そういうことのために、色々やってるんだと思う。……あれ、なんかこ

れ俺のキャラじゃねえかな。ツかしいな、チョーシ狂うなア。まアあの、そーゆーことで、そのうちテキトーになんとかすっからさ、色々。待ってて、そこで』

ほんの少し明るさを取り戻した声でユウヤは笑った。いつものように人の気持ちなど意にも介さない、自由に自分勝手に強い笑みが見えた。本当にコイツは馬鹿だ。そう思うと、こちらも笑うことしか出来ない。

『……あれ、聞ってる？ 繋がってんだよね？ 聞ってる？』

「聞ってる。……お前、隠し事があると説明能力が壊滅するな」

『……………根が正直で素直でイイコでスママセンねえ！ あんたとマジ話なんかした俺がバカなんだよそおなんだよちっくしょーこっぱずかしーな』

潜めた声のままぶつくさと続く文句を聞いて、私は喉の奥で笑う。

「わかったわかった。お前の好きなようにしろ」

『うわアやる気ねえ言葉。……久しぶりに聞いた』

楽しそうに調子を変えて、ユウヤも喉を鳴らすような気配がした。そうだ。この男は私のこういうところに懐いている。鎖を引きちぎって逃げ出した飼い犬のように羨望に基づいた自由を求めている。彼の中における私の役割は、仮宿だ。疲れたときに、休みたいときに、何も言わずに軒を貸してくれる宿。それは、夏前に転がり込んできた誰かのことも連想させた。

だから、安全な仮宿であるところの私は、安全な場所にいることを求められているのだ。警察に追われるような危険なところには来るなど、シオンも来させるなど、彼は真面目にそう言っている。

救いがたい馬鹿だが——子羊を見捨てる神の使徒など、いない。

それは唐橋裕也と工藤和泉という人間二人を過剰に甘やかしているということなのだろうけど。

『ンじゃ、また電話シマス。またね、イズミちゃん。愛してるぜハニー』

電話の向こうに騒々しい音楽とノイズが戻ると同時に、そんなふざけたことをふざけた口調で残して、ユウヤの方が電話を切った。

かけ直すような気力もなく、意志もなく、疲れた気持ちだけを引きずって私も電話を切る。

人の期待に応えることは疲れる。

応えようとするのが疲れる。

外で、何かを叩きつけるような音がした。最初は軽く、徐々に強くなっていった。乾いた物を湿らせ、濡らし、漬けてもなお打ちつける音だ。黒い空が強い風とともに落ちてくる。

嵐は夜を待たずにやってきた。

携帯電話をポケットに入れた、その時の私の中での重要事項は、閉め忘れた窓がなかったかどうかと、今からでも雨戸を閉めるべきかどうかと、聖堂が雨漏りをしていないか見に行くべきかどうかということで、他には特になかった。

どこか知らないところで危険なことをしている友人と、今日は未だメールを寄越さない友人のことは、敢えて気にしないようにしていた。私がここで気を揉んでいてもどうせ届きはしない

のだ。

その、どうせ、という精神が楽なはずも心地良いはずもなく、体のどこかを不当に引っ搔かれ続けているような実に気持ちの悪い時間がしばらく続いた。まあ、ユウヤはともかくシオンに関しては完全に杞憂だろう、と私は思っていた。毎日メールを送るなど約束を交わした訳でもなく、実際メールが来ない日だってあった。気になっているのは、ユウヤから訊かれたからだ。

——『コロ』からメールが来たか、と。シオンの名を出さずに訊かれたからだ。

嫌な予感とか、落ち着かない胸騒ぎとか、そんなものの根拠は大概そういう小さな引っかかりで、実際の現象と何ら関わりはない。私の中で何かに納得がいかないから、不安定な気分になっているだけだ。

黒く沈んだ空と絶え間ない風雨、それから家屋の揺れる小さな悲鳴めいた軋みが、それを加速させているだけだ。

「【主よ あなたはとこしえの王座についておられます。御名は代々にわたって讃えられます】……」

不安を口にする代わりに唱え始めた聖句を、激しいチャイムの音が遮った。乱暴で、雑で、叩きつぶすような、手加減のない押し方だった。間をおかずに拳が扉を殴りつける音が聞こえた。

鍵を開けると、誰何する間もなく黒い塊が転がり込んできた。ぐしゃぐしゃのスーツに重い水を纏って、べったりと額に貼り付いた髪の下から敵意のある瞳で私を刺した。痩せた、色素の薄い髪と瞳の、ぎらついた眼差しの——馴れない獣。

「た」

「弟はどこですか」

名前を呼ぼうとした私を、低い声が遮った。名など呼ばれたくもない、とでも言いたげな遮り方だった。剥き出しの、憎しみの切っ先。誰の喉に向けてもためらわない目をしていて。今、私が目の前にいるからという理由ではなく、他の誰でもない私に向けたいのだと、思った。

シオンによく似た薄茶の瞳。

立原久音が繰り返した。

弟はどこだ、と。

9.

——【あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう】——

「知りません」

「嘘だ」

「本当に知らない——」

「嘘を吐くな！ ここにいるんだろう、ぼくの言うことなんか一つも聞きやしないで、こんなくだらない宗教なんか引掛かって、死んだ方がいい馬鹿だ、あいつは！ 返してください。あいつに何をさせるつもりか知らないが、子どもに妙なことを吹き込まないでください。ぼくらに二度と関わるな！」

一気に怒鳴りつけて、立原久音はそのまま家の奥に向かおうとする。咄嗟に腕をつかんで止めてしまったのは、後の掃除のことを考えてしまったからだ。足元は靴からズボンの裾に至るまで泥だらけだし、服の裾から流れ落ちるほどに水浸しだ。土足ということを鑑みても、フローリング部分ならなんとか目を瞑れるが畳と絨毯は困る。そういうことを冷静に考えた。

「離せ！ 未成年者略取で訴えるぞ！」

彼は冷静なのかそうでないのか判断がつけづらい。いや、冷静ではないのだろう。でなければ直接乗りこんでは来ない。犯罪者と目した人物のところに一人で飛びこんでくるなど、よっぽどドラマや小説に毒されているか、まともな判断が出来ないほど頭に血が上っているかの、どちらかだ。

落ちついて、と口にするのも億劫だったが、例え聞かれもしなくても言わないわけにはいかない。少しでも判断力が戻れば、話の分からない人物ではないと思うのだが——。

(兄ちゃんは悪くないよ)

シオンのその信頼の根拠を、私は知らない。

(あんな兄貴、信用出来るかよ)

ユウヤが激しく嫌悪するその理由も、分からない。

今必死に私の手を振りほどいて弟を探し出そうとしている彼が、一体何者なのか。

そんなことを一瞬考えた際に、手が滑って空を掴んだ。立原久音の身のこなしは素早い。あっという間に土足で家の中に消えた。

——住居侵入罪。不退去罪。これは違うか。器物損壊罪。これは微妙だな。ドアが壊れていれば建造物等損壊罪だったんだが。ともかく、そういう分かりやすいものに頼れば、彼は理性的になるのかも知れない。が、もうどうでもいい。今更止めたところで床が元通りになるわけでもない。

立原久音が何か怒鳴りながら家の中を探索している間に、私は上がり框に座って待っていた。ここから動いて、隠れて何かしたのだと勘ぐられるのも面倒だ。迷惑だ。シオンはここにはいない。それは探してみれば分かることだ。

シオンは、自宅にもいない。実の兄が血相を変えて探しに来るほどのこととは、何だろう。シオンからのメールはない。ユウヤが心配している。立原久音は相変わらず家の中を探し回って

いる。おそらく何度も何度も、同じ場所を。段々と頭が痛くなってきた。台風が来ているからだろう。低気圧のせいになれば、何もかも放り出せる気がした。

放り出せるわけが、ない、のだが。

荒い足音が背後に戻ってきたところで、私は大きく溜息を吐いた。畳と絨毯とシオンの心配。ユウヤと立原久音への八つ当たり。そんなものが混じっていたように思う。

気が済みましたか、と声を掛けようかと思ったが、また油を注ぎそうだったのでやめた。代わりに、

「シオンくんは、いつから帰っていないんですか」

そう訊いた。

「本当に——ここにはいないんですか」

奥歯を軋ませるような問いは、私の求めている答ではない。

「知らないと言いました」

「あんたが知らないはずがない。あいつは、隙があればあんたと——あの柄の悪い男を庇うような話ばかりだ。やめろと何度叱っても、言うことを聞かない。母さんまで絆されて、甘やかして、ぼくを馬鹿にして、だから」

——だから。

その言い方が、私のどこかに引っ掛かった。怒りの籠もった、けれどどこか言い訳めいた、接続詞。語尾が震えていた。うろたえていた。振り返って見た立原久音の顔は、真っ青だった。

立原さん、と呼んだ私の声が、なぜか遠く聞こえた。

「あなたは——シオンに、何を」

「ぼくは悪くない！」

引き攣れた声で、立原久音が叫ぶ。上手く息の出来ない音で。空気すら敵と定めたように。

「ぼくは悪くない！ 言う、ことを、聞かない、あいつが悪いんだろ！ まだ何も出来ないくせに口だけ一人前で、ぼくがどんなに苦勞してるか、母さんがどんなに苦勞してるか知らないで、のんきに学生やって、それで言うこと聞かない方がおかしいんだから、ぼくがやったのは驕だ！

馬鹿なままでこの先困るのはあいつなんだ、だからぼくは、だからぼくは……悪くないんだ」  
(身体に虐待がないから大丈夫とか、そんな理屈つけられたって俺は納得いかねえな)

……目に見える痕跡が、あったなら。私はあの時どうしただろうか。どうにかする気はあったのだろうか。立原久音は激昂しやすい。その勢いで暴力を振るうことが出来る。その素地と心的要因がある。知っていたはずだ。知っていて、私は見ないふりをした。日常ではないなら、と言いつくして、知らないふりをした。

立原久音は、音を立てて喉に息を通し、口を噤んだ。握りしめた手が震えている。体全体を一度大きく震わせて俯き、頭を振って水滴を飛ばした。

「——ここにいないなら、用はありません。失礼しました」

「立原さん」

私の横をすり抜けていく彼に呼びかけはしたが、止める気はなかった。止めたところで何が出来る訳でもない。ただ、一つだけ訊いておかなければならない。

「シオンが見つかったら、どうする気ですか」

立原久音は一瞬だけ動きを止めて、何も答えずに扉を開け外に出た。唸りを上げる風と雨の音が耳を刺す。吹き込んだ雨は冷たい。扉が閉まる。家の中は静かだ。誰もいないのだから当然だ。時計の針が音を刻む音と、蛍光灯の小さな音。外から洩れ聞こえてくる風雨の音。それだけだ。廊下が汚れている。黒ずんだ泥の足跡が点々と続いている。

眩暈がした。

長く立ちつくしていた気がしていたが、外に出てみれば立原久音の背中はまだすぐそこにあった。冷たい塊が全身を叩いてくる。黒い空が渦を巻いている。木々が強くしなる。日はほとんど暮れかけているのだろう。一段と暗く寒々しい。けれど歩けないほどではない。少し視界が利かなくてうっとうしいくらいなものだ。

「あんた」

立原久音が、私に気づいた。冗談じゃないという顔をしているが、こっちだって冗談で出てきた訳じゃない。

「手が要るでしょう」

どこにいるか分からないシオンを捜すのに。立原久音に怯えて家に戻らないのだろう、たった一人の少年を捜すのに。

「あんたには関係ない！ 邪魔しないでくれ！」

「やかましい、ぐだぐだぬかすな！ てめえだけが腹立ててると思ってんじゃねえ！！」

風の音に負けないように本気で怒鳴りつけて、立ち止まってしまった立原久音を追い越した。

「な、んっ……あんた、何」

ああ、そうか。彼は怒鳴られ慣れていない。もしくは、怒鳴られ続けた経験がある、ということか。一瞬で萎縮したその様子に、何か別なところで納得した。そうすることしか知らない人間が、他の手段を選ばないことはよくある。だからって過剰な同情をするつもりもない。

「シオンを捜す。私の大事な友人だ。文句なんか言わせねえぞ」

とは言え続けて怒鳴るのも面倒だったので、襟を掴んで近くに引き寄せて穏やかに断言してやった。彼は動揺したように目を泳がせ、それから悔しそうに唇を噛んだ。怒りと憎しみがその目に戻る。

「——ぼくは、あんたが嫌いだ！」

「ああ、そうか。どうでもいいな」

突き放すと、立原久音はよろめいた。びっしょりと濡れた顔で私を睨みつけてくる。構ってはられない。シオンを捜すために、私は門の外へ向かおうとした。

目の、端で。立原久音が目と口を大きく開くのが見えた。

私の目の前を、唐突に黒い影が塞いだ。

見定めようにも雨粒が目に入って、よく見えない。笑い声が聞こえた気がした。周囲は刻一刻と夜に向かっていく。少ない灯りを、何かが鋭く弾いた。金属。細長い、硬い物が勢いよく空を切る音。

衝撃に目が眩んだ。

平衡感覚を失って、泥水の中に突っ込んで初めて倒れたことに気がついた。

頭の全体が熱い。目の前が紅い。痛いのか、と遅れて思った。

「……—んだ、お前たち……！」

がんと痛みが響く中で、取り戻した音は立原久音の声だった。私の肩に手を掛けているのは、彼か。薄く目を開けると、跪いたズボンの膝が見えた。もう取り返しようにもなく泥だらけだ。そう思った。

「……オイ二人——どっちだ？」

「——っちでも……じゃねえか。両方……ちまえ」

「はは。どーせ……は、あのキンパツか」

途切れ途切れに飛びこんでくる笑い混じりの会話は、それでも十分に不穏すぎる。

逃げろ、と立原久音に伝えた——はずだが、音になったかは怪しい。意識が遠のく。体に力が入らない。何かが痛みのある場所から流れ出ていく。

立原久音が、立ちあがろうとしてやめて、私の肩を強く掴んだ。真っ赤に染まった視界が白くなって、何が起きているのか見えない。雨の音も風の音も、何も聞こえなくなっていく。頭の熱に、意識が溶かされていく。

「アーメン、ってかあ？」

——その濁った笑い声を最後に、何も、分からなくなった。

Kyrie eleison——Kyrie eleison——Kyrie eleison——

……誰かが歌っている。

澄んだ声だ。鈴ほども清らかな、美しい鳥のような。そのくせ芯が強くて、高い空をどこまでも泳いでいく。深くのびやかに広がる。

高い天井、美しく描かれた壁、彫刻、光を渡す色とりどりのガラス、聖別された器物、塵一つなく磨き上げられた床、満たされた空気に響き渡り浄め、清める。

その体のどこから、そんな声が出るのか、と。

不思議でたまらなかった。

グロリアよりも、クレドよりも、サンクトゥス、アニュス・デイよりも、キリエを歌う時が一番美しく聞こえた。

(まあ、わたくしがキリエしか歌えないように聞こえます)

いや、そういう意味ではありません。慌てる私に、朗らかに笑った。まるで太陽のように、聖母のように、光のように、……天使のように、笑った。

主よ、憐れみ給え——主よ、憐れみ給え——主よ、憐れみ給え——

他の誰よりも憐れみを求める歌を美しく歌う人。

この世のものならぬ清浄な何かに触れるような声。

人の手で汚してはならないと思わせるような、透徹とした聖歌。

謹厳たる聖堂の中で、人の子の坐す十字架の前で、人の体温を持ち、人の命を持ち、誰も触れられないほど清らかに笑った。

私の中のあなたは、そこで止まっている。

勝手に瞼が動いた、ように感じた。

動かそうと思ったから動いた訳ではなく、なんとなく動いた。そんな感じで視界が開けた。

雨は降っていない。室内だ。幻のように壮麗な創世記の天井画が見えて、すぐに消えた。もう見慣れた、簡素な天井だ。細長い蛍光灯が安く光っている。動かした手がすぐに落ちた。左側には衝立のような低い壁。——いや、背もたれだ。聖堂の長椅子に横にされているのだと、気がついた。

「————………っう」

少し動いただけで、頭がががつんと痛んだ。まだ殴られ続けているような痛みだ。ぐらぐらして吐き気を呼ぶ。濡れた衣服がべったりと貼り付いて気持ち悪い。誰かが私の側に来て、肩に手を掛けた。

「……まだ、動かない方がいいです。もうすぐ救急車が来ますから」

痛みにかすむ目を凝らした。この声は知っている。

「すみません、勝手にこちらを使ってしまって。ご自宅の方は荒らされていたので、被害状況を調べています。鑑識が来れば指紋も採れるかと。——こちらは無事の様子ですね」

……それは多分、立原久音が探し回った跡じゃないだろうか。そう思ったが、弁護も億劫なほど頭が痛かった。

「坂下——刑事、さん……どう、して」

元のように転がされながら途切れ途切れに呟くと、坂下刑事は困ったように苦笑した、ようだった。髪はばらばらに乱れて、眼鏡も少し濡れて汚れている。

「説明は後でしますから。止めるのが間に合わなくてすみません。一緒にいた立原さんは無事ですよ」

「そう……ですか」

少し、安心した。体の力が抜けた私を見て、坂下刑事が手を離す。

落ちついてみれば、聖堂の入口付近が賑やかなことに気がついた。ここからでは背もたれに塞がれて見えないが、何人もの人間が話す声が聞こえる。車のドアを開け閉めするような音や、エンジンを掛ける音。

「うおい、坊ちゃん。読みは外れたがカンは当てやがったな、こんガキヤア。よーやったよーやった」

笑いながら近づいてくる人物を見て、坂下刑事が嫌な顔をする。

「なんですかそれ。褒めるんなら分かりやすく褒めてください。いや褒めなくていいです。怪我人がいるので騒がないでください」

「なにおう、ナマイキな」

坂下刑事の頭を小突きながら、山本刑事はそれでも声量を抑えた。それは正直有難い。

痛む頭に触れてみると、簡単に手当をしてあった。怪我の様子自体はそう酷くなく、流血もさしてなかったが、場所が場所なので病院で検査をするらしい。大丈夫ですと虚勢を張る気はなかった。正直に言えばもの凄く痛い。これであまり流血していないと言われても信じられないくらいだ。頭が真っ二つに割れた感じすらするのに。

ところで、何が起こったのかさっぱり分からないのだが。

立原久音が来て、シオンが行方不明だと聞いて、一緒に捜しに出ようとしたところで——誰かに殴られた。私が把握しているのはそれくらいだ。

刑事二人は微妙な距離でぼそぼそと話している。声を張り上げることも出来ないので訊きにくい。立原久音は無事らしいが、どこにいるのだろう。彼なら分かるだろうか。訊いたところで今の私が理解できるかは分からないが、謎ばかりが気になる。

——シオンは、どこに行ったのか。

捜してやらなければならないのに、こんな時に動けない。

私自身のあまりの不甲斐なさに絶望して目を閉じた。眠るつもりもなかったし眠れるとも思えなかったが、そうしたら少し気分がましになった気がした。人の動く音が聞こえる。音だけがひどく鮮明だ。痛みの隙間から、小さな音を聞く。話し声と、衣服の擦れる音。外から来る雨と風と木々の悲鳴。

がたん、と音がして、入口付近の音が急に止んだ。まるで誰もいなくなったかのようだ。雨風の音だけが強くなる。

いや、違う。一人いる。荒く息を吐く音がする。

「……何の、騒ぎ？ 教会に似合いの顔ぶれとも思えねえんだけどなァ」

低い笑い声の混じった軽い口調のそれは、まるで刃物のように耳の奥を刺した。どす黒く、金気混じりの暗い音だ。……こんな声も出せるのか、あいつは。

唐橋、お前、と誰かが呟いた。多分山本刑事だと思う。

ゆっくりとした間があって、ざ、と床の擦れる音がした。

「やまもっサン。神父サンどこ？ 俺さァ、ここにいてって言ったんだけど。間違ったかな。ツタマクンなァ。ねえ。……生きてんだよね？ ソレ寝てるだけ？ でなかったら俺戻るけど」

人の存在で温まっていた空気が、一気に冷えた気がした。壁に結露でも出来そうな温度差だ。ざり、と何か引き摺りながら少しずつ近づいてくる音は、その度に低さを増す。透明で鋭利な氷の刃先に、真っ黒いものが混じる。

「戻って、あいつら全員殺してやる」

……本当に、阿呆だ。馬鹿だというよりは、阿呆だ。お前がそこまでしてやる必要がどこにあるんだ。痛みも忘れて笑い出しそうになってしまった。

私は子羊をわざわざ迷わせる司祭にはなりたかねえよ、ユウヤ。

「……物騒なことを言うな。シャレにならねえって言ったろ」

半分笑いそうになりながら口に出すと、長椅子が揺れた。億劫だったが目を開ける。背もたれの上部を掴んだ手。“S”のペンダントが垂直に落ちて、しゃらん、と鎖を鳴らした。じらじらとした光の下、金色が水を弾いて、いくつかが私の上にしたたり落ちる。あァ……と呻いた、表情の見えない顔が、力が抜けたように項垂れた。

「生きてンなら生きてるって言えよなァ……そこはやる気出してよ、俺のためにさァ」

「お前が勝手に殺したんだろうが……」

言い返す間に、ユウヤはずるずると体を落として、その場に座り込んでしまった。まだ何かぶつぶつと文句を言っているようだが、あまり聞かせる気はないようでほとんど口の中で消えて

いる。

体を起こそうと再度試みると、坂下刑事が弾かれたように動いて手伝ってくれた。動かない方がいい、と言いたげだったが口に出しては言わない。言いにくいんだろうな、と思った。

「……あーそうだよまもっサンさァ……ここ行ってよ。地下の……店の奥に、銃刀法とヤクブツがいっから」

「何い？」

ユウヤが掲げた小さな紙を見て、山本刑事が目を瞬かせる。ぴ、と放り出されたくしゃくしゃの紙が宙を舞った。慌てて受け止めた山本刑事は、そこに書かれてあるらしい字に目を通して、坂下刑事を厳しい目を見た。

「全員、かな……まだいるかも、けど。とりあえず、俺が会ったのは全員……ホネ未満だとは思うけど、途中からアツマきたから保証が出来ねえ。正当防衛で処理してくれる？」

ひらひらとユウヤが振った手は、よく見ると血で汚れていた。手首の辺りから手の甲、指へ伝ったような筋だ。半分雨に流されてはいるが、洗いきれてはいない。

支えていた私を長椅子の背もたれに預けて、坂下刑事が紙を受け取り外へ吹っ飛んでいく。もたれたまま背面を覗きこむと、ユウヤの頭が見えた。艶のある金の、懐かしくも思えるその色。

「オイコラ。お前も病院行くぞ」

「待って……まだある。もう一つ、……もう一人」

腕を取ろうとした山本刑事を制して、長椅子の背に身を預けて床に座り込んでいたユウヤが、ぐいと頭をもたげて私を見上げた。

金色の髪はぐっしょりと濡れて毛先から水が滴っている。頬に伝うのは薄い血の跡だ。カラーコンタクトは片方が外れていた。黒と緑の瞳。上着もシャツもズボンも破れて、鬱血した痣が coming out。切り傷も見えた。真新しい赤が模様のように衣服のあちこちを彩っている。

「シオンは？」

切れた口の端から押し出すように、喉の奥から強い問いをぶつけてくる。一字一字区切るように、祈るように、その意志でつかみ取るように。誤魔化しは効かない。刃は未だ鞘に収まっていない。

「わからん」

簡潔に答えた私をじっと見て、ユウヤが一度奥歯を強く噛んだ。あァそう、と言葉少なに答えて一度頭を落とし、その勢いで立ちあがる。ざっと金色の髪が揺れて、小さな水しぶきが飛んだ。

「やまもっサン、頼みがある。立原紫音。保護して。出来ればケーサツで」

「立原紫音だあ？ なんてお前、あの子が」

「さァ。なんでだろーな。なんで神父サンで、なんでシオンなんだかな。意味分かんねえからそれはそっちで調べてよ。家にいりゃア手っ取り早エんだけどなァ、それもまたビミョーか……」

「……あの馬鹿が、何に巻き込まれてるんだよ」

意外と近くから聞こえた声に、外に出ようとしていたユウヤの足が止まった。私も椅子にもたれたまま、首を回して祭壇側を見る。真っ青になったままの立原久音が、そこにいた。並んだ長椅子の一つに縋るようにして、きつくユウヤを睨みつけてよろよろと歩き、詰め寄った。

「あいつを何に巻き込んだんだよ。やめろよ。だから関わるなって言ったのに、何してんだよ。ぼくらは、普通の家で、こんな暴力沙汰なんか関係ない普通の家で、なんであいつはそういうことに巻き込まれるんだよ。おかしいだろう」

うわごとのように喋る立原久音を、ユウヤは何か異物でも見るような目で見返した。

「……なんでこいつここにインの？」

立原久音を見ながらだったが、それは私に向けての質問だった。家に帰っていないシオンを捜しにきた、と簡単に教えてやると、ユウヤは如実に愕然とした顔をした。

「ッんだそれ。ちょっと待て、じゃあマジで今どこにインだよあいつ」

「しらばっくれるな、お前がろくでもないことに巻き込んだんだろう！ でなきゃ二日も帰ってこないなんてあるはずがない！」

「二日ァ！？ ッあァくそ、ホンット俺てめエのこと嫌エだわ！ ってエか邪魔！ 本気で役に立たねエ！ 帰れクズ、二度と顔見せんな！！」

「ぼ……ぼくの台詞だろう、それは！ お前みたいなごくつぶしにクズ呼ばわりされる筋合いはない！」

「うるせエ無能！ 第一人の行方も掴めねエでエラソーな顔してんじゃねエ、帰れボケ、カス！ 気分悪ィ！」

「待て、待てっつーのお前ら、ちょっと落ち着け。ケンカしてる場合かコラ」

今にも殴りあいそうに頭に血の上った二人を、山本刑事が必死に分けている。

私はと言うとそれどころではなく——メニューから、電話帳……あ、消えた。電話帳、から……電話帳検索。なんでこんなに検索の数が多いんだ。確かユウヤが簡単にかけられるようにしてくれていた筈だが、それを覚えてなければ意味がない。全検索……唐橋裕也……。

——立原紫音。

携帯電話を耳に当てると、途切れるような音の後にやっと呼び出し音が聞こえた。それはいいんだが、すぐそこの罵りあいがるさい。頭に響いて痛いし聞こえにくい。仕方なく、履いていた靴を片方脱いで投げ付けた。山本刑事の頭上、ユウヤと立原久音の顔の間をすり抜けた靴は、向こうの壁に結構勢いよくぶつかった。

「うるせえ、黙れ」

二人が驚いた瞬間の注意は功を奏して、二人とも同一のタイミングで首をすくめ、口を噤んだ。なぜか山本刑事も首をすくめて頭を撫でている。……彼にぶつからなくて良かった。

呼び出し音は続いている。着信音が鳴らない設定だから、気づかないかも知れない。それでも、今のシオンなら出るのではないかと思った。

三人は首をすくめたまま、何か小さな声でぼそぼそと話している。内容は分からない。立原久音が何か毒づいた顔をして、ユウヤがケンカを買うような顔をした。それを山本刑事が両方の首根っこを掴んで押さえ込む。全部小声で、こちらの様子を伺いながらだ。器用だな、と頭のどこかで冷静に感心した。

一定の速度で、一定の間隔で鳴り続ける呼び出し音は無機質だ。永遠に続くような気がする。それでも悲鳴のように呼び続ける。

(Kyrie eleison——Kyrie eleison——Kyrie eleison——)

幻聴のように、彼女の声が聞こえた。主よ、憐れみ給え、主よ、憐れみ給え、主よ、憐れみ給え。嵐の中で一人怯える子どもを。貴方の子羊を救おうと足掻く未熟な司祭を。

どうか。

(【どうか、立ち上がってシオンを憐れんでください】——)

ぷつ、と呼び出し音が途切れた。

数瞬を置いて、誰かの気配がする空間と繋がった。ざああ、というノイズが聞こえる。声は聞こえない。

「——シオン？」

呼びかけると、小さくしゃくり上げる声が聞こえた。喉の奥に何かが詰まったように、弱々しい声。

おっちゃん、と不思議そうに私を呼んだ。

10.

『……あれ……？ こわれて、なかったんだ……？ なんだぁ……』

シオンの囁き声は、いつもより幼く聞こえた。何も知らない無邪気な幼子のように、どこか理解できない明るさを宿していた。

『オレ、ぜったいこわれたと思って……みず、沈んだし、踏まれた、し……ごめんユウヤ、って……思って、でも、こわれてなかった』

よかったあ、と心底安心した風に、シオンは囁く。その声の柔らかさに、肌が粟立った。

「シオン。……今、どこにいる？」

答は返ってこなかった。ノイズと、疲れたような吐息だけが聞こえる。

「シオン、どこにいる？ 迎えに行くから、教えてくれ。私でもユウヤでも、行くから」

長い沈黙の間に、こちらにいる三人が異変に気づいた。身を乗り出す立原久音をユウヤが引き戻して押さえる。そのユウヤに耳打ちされて、山本刑事が入口の方に走った。

『……………わかんない……』

「分からない？」

わかんない、と弱々しい声が笑う。

『まっくらだし……雨、すごい……。台風だっけ、きょう……』

「……ああ、そうだな。外にいるのか？」

『うん。ここで勝手に死ねって』

……吐き気がした。殴られた痛みのせいだけではなく、腹の中に湧いた黒い小さな塊に、その場で吐きそうになった。シオンと話していなかったら、多分そうしていた。

「誰に」

無意識に立原久音を見ていたらしい。彼は戸惑った顔をして、それから不愉快そうに身じろいだ。

『……わかんない。おっちゃんちの近くで……黒い、くるま、乗っけられて……ぜんぜん、知らない……』

「工藤さん、ちょっと」

いつの間にか戻ってきた山本刑事が、私の耳元で囁いた。手には小さな機械を持っていて、私の手の隙間から携帯電話を矯めつ眇めつ見る。ユウヤも来て、そちらは手間取らず私の携帯電話に素早くプラグを差し込んだ。

『でも、あっちは……オレのこと知ってた……みたい。たてはらって……オレの』

シオンは言葉を切って、大きく咳き込んだ。きつい音の、苦しそうな咳が聖堂中に響く。スピーカーを繋いだのかと、遅れて気がついた。

山本刑事の後ろに、見知らぬ青い制服姿の男がいた。帽子を被って、手元の機械をいじっている。ユウヤがその耳に何かを呟いた。それから私のところに来て、同じように呟く。

「今、基地局調べてッから。シオンに言って。分かったらそっち行く」

それでシオンの大体の位置を調べられる——らしい。なんで紫音が携帯なんか持ってるんだ、

ぼくは許可してないぞ、と立原久音がぶつぶつ言っていたが、誰も相手にしなかった。

シオンの咳が治まるのを待って、居場所を調べていることを教えたが、返ってきたのは笑うような泣き出すような、溜息混じりの——もういい、という言葉だった。

「シオン」

『もういいよ……オレ疲れた。おっちゃんも、ユウヤも、もうオレのこと考えなくていいよ。オレが早く死んでれば良かったんだよ。そうしなかったオレがやっぱりバカなんだよ』

弱い、小さな声が微笑む。

っざけんな、とユウヤが呟いた。全身を軋ませるような、憤りの声で。

立原久音は、何も言わなかった。

——おっちゃん、あのさ。

オレ、前もこんな風に殴られたことあるんだ。中学の時にさ、髪の色が目立つって言われて。上級生から、すごい殴られて。蹴られて。抵抗したけど、あっちの方が体大きくてさ。クラスでも、よく叩かれた。痛がるのを面白がられた。オレがちゃんとしてないから悪いんだって思って、でもどうすればいいのかわかんなくて、結局卒業までそんな感じだった。

だから、いいんだ。オレが悪いから、ダメだから、母さんにも兄ちゃんにもいっぱい迷惑かけて、そういうのもう疲れたから。

おっちゃん。

オレね、あの時死ぬつもりだった。

みんなと違う高校行ってもあんまり変わんなくて、もう殴られたりはしなかったんだけど、何にもしてないのに怖くて辛くて、死にたくてしょーがなくて、一日部屋に閉じこもって、そんで夜中に抜け出して——死ぬ前に、あの十字架の下を見ておきたい、って思って行ったんだ。カミサマがいるなら見たかった。

そんで、誰も知らないところに行って死のう——って思ってたのに、気がついたらおっちゃんところでごはん食べてた。その前の夜くらいから何も食べられなかったのに、食べてた。そんで話聞きながら寝ちゃって、起きたらなんか気が抜けてた。バカだなあオレ、って思ったんだ。もうちょっとカシコくなれば、ちゃんと出来るようになれば、まだ生きてていいかなって思ったんだ。

これからそう出来るかなって思ったんだ。

でも——。

シオンは言葉を切って、また酷く咳き込んだ。

口の中にすごい水が入った。仰向けだとダメだ。そう言って笑った。

——でも、やっぱりオレは変わってない。だからオレはやっぱり死んだ方がいいんだ。兄ちゃんはずっと正しいことを言ってたのに、オレがワガママで言うこと聞かなかっただけなんだ。オレが、カンチガイしてただけなんだ。

おっちゃん、迷惑かけてごめんね。巻き込んでごめんね。オレのことなんか、なかったことにしていいよ。おっちゃんって、知らん顔して変なところで優しくったりするから、オレのこともう気にしないですよ。おっちゃんはいいい人ですってカミサマには言っとくから。……あれ、オレ神の国には行けないのかな。ってというか、神の国ってどっかにあるもんじゃないんだっけ？ あれも結局よくわかんないまんまだなあ。ごめんね。

ごめんなさい。

……私に求められていたのは、居心地の良い仮宿で。

彼らが私から離れてどこに行こうが干渉せず、戻るかどうかも分からない者を灯りの下で待ち続けることで。名も必要とせず、過去も問わず、好きなようにしろという距離を保つことで。

頭の芯が、がんと痛んだ。目の前が白く赤く点滅するようで、目を閉じたが吐き気は止まらない。

私はここで何をしているのか。黒い傷跡が開く。瞼の裏で白い光と混濁した闇が混ざらずに争い始める。それは美しくもあり、神経に触れるような汚らしさもあり——。

(イズミ、君は)

(あなたは優しいから)

(精神の一番深いところが、弱い)

(だから、そうしていないと、あなたが)

(君が、壊れる)

壊れてしまうんだ——と。その距離が必要なのは、他の誰かではなく、私なのだ。

(馬鹿だ、オマエは)

「——馬鹿だ、あいつは」

震えるような呟きが聞こえて、私は薄く目を開ける。視界の中に、呟いた人間はいない。けれど声で分かる。弱った素の声は少しシオンに似ている。

「そんなつもりで言ったんじゃない。本気で死ねばいいとか思ってない。なんでぼくの言うことが分からないんだ。そのままじゃお前が苦労するから、お前が困るから、ぼくは、お前がちゃんと生きられるようになって、父さんみたいにはならないようになって、どうしてそれが分からないんだ。お前はちゃんと出来るのに」

——ちゃんと出来るのに。

立原久音が繰り返す言葉に、ユウヤが、バカはてめエだ、と吐き捨てた。

「ちゃんと、って何だよ。誰がそれを決めてンだよ。現実苦しんでンのは誰だよ。今そこで死にかけてンのは誰だよ。——バカはてめエだ」

立原久音は、茫然としていて何も反応しなかった。ユウヤはそれに構わず、山本刑事と制服姿の男と何か話して、立ちあがる。扉へ歩いていく。

「シオン」

『……うん、なに……？』

応える声は弱く、震えていた。痛めつけられた挙げ句に雨風に晒され続ければ当然だろう。放っておけば、そのまま眠るように死ぬ。生きる意志をなくして、死ぬ。

夜が明けるまでに。

鶏が鳴くまでに。

私は。

「……お前の言いたいことは、よくわかった。それなら私も死んだ方が良さそうだ」

視界の端で、ユウヤが弾かれたように振り向いた。私はゆっくりと瞬きをして息を吐き、体をずらして椅子の背もたれに頭を預ける。

正面に、祭壇が見えた。静まりかえったその壇の奥に、十字架に架けられた人の子の姿がある。蛍光灯に照らされて、淡い陰影がその白い体を刻む。両脇には聖母像と少年の像。描かれた天使の絵。何年も、何年も見てきて、そこに立ってきた。賛美歌はテープの再生で、祈りの言葉が揃ったことなど一度もない。私の小さな、愛しい世界。

「……シオン。私も死んだほうが良い人間だ。お前の言うとおりに。色々な人に甘えてここまで来たが、もういいな。私も疲れた。お前は間違っていない」

『……おっちゃん？』

弱い泣き声、途方に暮れたような響きを帯びた。私の座った長椅子が、がんと揺れた。

「なに、言ってんだ。あんた」

「真実だ」

押し殺した問いに、自分でもおかしくなるほど穏やかに答えた。

「私は早く死ぬべきだった。死にたくなくて手近なものに縋り付いた。手を差しのべてくれた人たちがいたから、甘えた。許されるはずも救われるはずもないのに、大丈夫だと信じたかったんだ。……シオン、お前の方が賢い。私も早くそうすれば良かった」

『……なに言ってんの、おっちゃん。ダメだよ、なに言ってんの。だってユウヤもオレもおっちゃんに助けられたのに。アンタはオレと違うのに、なんでそういうこと言うんだよ。オレだけでいいじゃんか！ 痛いのも苦しいのもオレだけでいいじゃんか！』

「知らねえよ。私は私の好きなようにする。頭は痛えしさつきから吐きそうだし動けねえし、このまま御許に召されんのもいいだろ。……ああ、いや、違うな。もう主の御許に行く資格もねえ、か」

——Kyrie eleison.

あなた方と同じ場所には、私は行けない。深い昏い闇の奥底に、先達もなしで降りて行かねばならない。あの美しい歌声の作る翼は、手も届かないほどの遙か高みに。

『イヤだ、やめてよ。アンタが死ぬのは、オレはやだよ。オレはアンタがいて嬉しかったのに、間違いだったとか——言わないでよ。ズルいよ。ねえ、ユウヤもそこにいるんでしょ。代わってよ。止めてよユウヤ。オレそんなのやだよ！』

泣き叫ぶようなシオンの悲鳴を聞いて、ユウヤが背もたれを掴んだ手に力を込めた。迷うような、ためらうような、息を詰める気配。

そうだろうな。この状況が理解できたなら、お前は何も言えない。どちらを選ぶことも出来ない。それなら、シオンを選べばいい。おそらくそれが正解だ。

「お前も死にたいんだろう、シオン。——どうして私を止めるんだ？」

ノイズの向こうで、息を呑む気配がした。暫くの沈黙の後、唸るような嗚咽が聞こえてきた。

野良猫のような、毛を逆立てるような唸り声だ。私は小さく口角を上げる。

『……に、たいよ。生きてても苦しいだけだから、迷惑かけるだけだから、もうやだって思うてるよ死にたいよ！ でも……死ぬのはやだよ。死にたくないよ。こわいよ、やだよ。おっちゃんはズルいよ。そんなん分かってて訊くのはズルいよ！ でもさ、でも』

嗚咽混じりの言葉の途中で、伝わるノイズの感覚が、ふっと変わった。シオンが喉を鳴らして、声を震わせる。がしゃん、と薄い音がした。

『死ぬのはダメだよ。生きててよ。オレも死ぬのやめるから、やめてよ。お願いだから』

生きててよチクショ一、と叫んで、もう一度がしゃんという音がした。しばらく荒い息だけが聞こえた。黙って聞いていると、ぽつりとシオンが呟いた。

『……おっちゃんがそんなこと言うから……カミサマ怒ってるじゃん……』

「……怒ってる？」

『怒ってるよ……なんか、赤いよ……赤く、光ってる。カミサマが』

——神様が。

(ここからしか見えない)

「……っうわ！」

いきなり跳ね起きた私に、ユウヤがびくりと叫んで体を引いた。

動いた瞬間に物凄い眩暈と痛みが襲ってきたが、構ってられない。へたり込んだ立原久音を踏みそうになりながら、外に出る。転びそうになるのを扉に縋って一旦支え、入口にいた白い服の誰かを突き飛ばして、暴風雨の中へ。

敷地内には、パトカーと救急車が止まっていた。戻ってきていた坂下刑事が、目を丸くしている。何か叫んだようだが、聞こえなかった。

もつれる足で振り仰ぐ。支えるものもなく、そのまま尻餅をついた。後ろ手の指先が雨に浸る。全身を叩きつける雨に洗われる。

聖堂の上には、十字架が。赤色灯に照らされて——赤く。

まるで怒りの炎に炙られているように。

頭を砕くような痛み息を吐いた。意識が遠くなる。

まだ、もう少し——主よ。

「Bの——二棟——屋上——！ ユウヤ！！」

自分でも、どこから声が出たか分からない。けれどその叫びは確かに届いて欲しかった相手に届いて、聖堂の入口から金色の風が走った。動けない私の横をすり抜けるようにして門へ向かうその後ろから、誰かがそれを追いかけた。

門の所に辿りつく前にユウヤを掴まえて、立原久音が怒鳴る。

「ぼくも行く！」

「あア？！ ヅざけんな、てめエどのツラ——」

「うるさい、ぼくの弟だ！ ぼくの弟なんだ、あいつは！！」

——立原久音がその時どんな顔をしていたか、私からは見えなかったけれど。ユウヤは驚いたように目を見開いて一瞬黙り込み、それから舌打ちをした。

「……乗れ。飛ばすぞ。やまもっサン、清涼館高校！ 先に行く！」

身を翻したユウヤと立原久音は、それぞれ運転席と助手席に乗りこんで、急発進した。山本刑事にどやされて、坂下刑事が慌ててその後を追う。走りまわってばかりだな、あの人は。ちょっと気の毒だ。

「——シオン？」

『なに』

少し機嫌の悪い声で、シオンは応えた。石畳の上に転がりながら、私は笑う。

「ユウヤが迎えに行った。……抵抗すんなよ」

『しないよ……ホント、バカみたいだオレ。おっちゃん、あれウソでしょ』

怒ったような、半分泣いているような声で、シオンが糾弾してくる。

『ウソでしょ。そうだよ？』

私は喉の奥で笑う。体を丸めて揺らし、至極楽しそうに笑う私を、山本刑事と白い服の誰かが戸惑ったように見ている。

「ああ。嘘だ」

『——ウソつき！』

叩きつけるような、安堵と泣き笑いと怒りの混じった複雑な怒鳴り声の後に、ぷつん、と通話が切れた。

私は笑う。白い服の手が私を助け起こす。赤い十字架が、私を見おろしている。遙か高みから、雨と風の翼を纏って。

体から力が抜けて、意識が遠くなった。沈黙した携帯電話が、するりと私の手から逃げていった。

主よ、お許してください。この罪を御手に委ねます。主の裁きに従います。

許されるならばどうか、友を救いに走る者に、友のために死を思いとどまる者に、憐れみのもたらされんことを。

「——オマエは、馬鹿だ」

一言一言噛み砕くように言われて、私はベッドの上で首を縮めた。耳を塞ごうかとも思ったが、後が厄介なのでやめておく。

病室だ。狭い一人部屋には広い窓が一つ。ベッドとテレビ、洗面台と小さな来客用の安いソファ、それから自由に動かせるパイプ椅子。窓を開けておいたら寒くなったので先ほど閉めた。窓越しに差し込む日差しは暖かいのに詐欺だ。この時期は毎年そう思う。

先ほど来た見舞い客は、パイプ椅子に座って沈痛な面持ちを見せている。彫りが深くて癖っ毛の中年男だ。同い年だ。昔に比べてちょっと年を取ったなあと思う。私もか。

「ほんっとおおに馬鹿だ。オマエなあ、そろそろ自分が馬鹿だって自覚しろよ」

「してるよ」

「してないだろ。死にたがってる子どもに自分も死ぬって脅しただ？ 馬鹿。イノチの電話なめてんじゃねーぞ。その状況で踏みとどまったその子が偉すぎるんだよこの馬鹿。久しぶりに直で連絡してきたと思ったら聞くこと聞くことオマエが馬鹿すぎておれは涙が出る」

そんなことをしかめっ面で言っているが、どう見ても泣きそうにない。それよりも一息で喋る間に何度馬鹿と言っただろうか。こっそり数えようと思ったら、ベッドを蹴られた。

「真面目に聞け。大体オマエ、あの報告書は何だよ。天下太平、なべて世は事もなしってしゃあしゃあと書いてこの様は何だ。つつかオマエの報告書はそもそもおかしいんだよ。いらんところ細かいくせになんで肝心なことは飛ばすんだよ。おれはこの状況をどう報告すりゃいいんだよ」

台詞に合わせて連続で蹴られ、ベッドが揺れる。加減はしてくれているので落とされるほど大きな揺れではないが、小刻みに揺らされてちょっと気持ち悪い。

「いや……報告書を書いた時点では何もなかったんだ。先週だろ。この間の日曜だってミサは無事に済んでたし、その後色々激変しただけでだなあ」

「言い訳すんな」

「その一言で切り捨てられると困るな」

困れ、と言い放って、彼は鼻を鳴らしてパイプ椅子の背に尊大に身を預け、腕を組んだ。ベッドへの攻撃も止んで、私は少し力を抜いて首も元に戻す。

彼は、しばらくの間苦い顔で私を見ていた。人差し指が神経質に二の腕を叩いている。……言いたいことは分かる。それを言いたくないことも、分かる。

反省してるよ、と苦笑すると、どうだか、と顔を背けて舌打ちされた。

「反省してる、本当に。あのままあの子が死んでいたらと思うとぞっとする。……でもまあ、出来れば報告は穏便にしてほしいんだがな」

「穏便に一ねえ。突然の入院で、万聖節も万霊節も執り行えません。次の安息日も怪しいもんです。入院理由は暴漢に襲われたからで、理由は不明です。ことによっちゃあまた襲われるかも知れません。オマエこれどーやって穏便に報告すんの？」

「……………期待している」

「期待すんな、厚かましい！」

先ほどより強くベッドを蹴られて、少し床を擦って位置がずれた。流石にバランスを崩しそうになって、私は布団の上に身を伏せる。

「つつつても下手な報告あげたらすっ飛んで来そうだしな……ああくそ、オマエと同期になんかなるんじゃないなかった。つつかオマエの近くの教会になんか来るんじゃないなかった。手がかかるったらありやしねー。ったく」

苛々ぶつぶつと靴を履き直して——ベッドを蹴るためにわざわざ脱いだのだ。妙に律儀だ——、私の旧友であり、隣町の教会の主任司祭である彼は、長い手足を器用に操って身軽に立ちあがった。両手を腰に当てて私をじろりと睨み下ろし、嫌そうに溜息をつく。

「放っとくわけにもいかねーから、ミサ関連はうちで面倒見てやる。いつまでもうだうだしてっオマエんとこの信徒全部かっさらってやるからな。全部済んだらとっと戻ってこい」

それから、いかにも頭が痛いといった態で髪を掻き回し、彼は大股で病室の入口へ向かった。

「あ、そうだ鴻崎。多分な、ハロウィンの夜に近所の子もたちが来るから」

「……………ああわーかったよ泊まり込んでやるよ！！ アタマ縫うついでに馬鹿も治して貰え馬鹿！！」

がつん、と大きな音を立てて跳ね返る勢いで扉を閉め、怒ったような足音が遠ざかっていった。

いや、ような、ではなく、あれは怒ってるな。物凄く。

縮めた首を伸ばす前にまた扉が開いたので、何か忘れ物かと思えば、顔を出したのはユウヤだった。あちこち包帯を巻いているが、また派手なアロハシャツを着ている。もうすぐ冬だということにどこで買ってくるんだ、そういうのを。

ユウヤは扉の上枠に手をかけたまま廊下を見て、不審そうに眉を顰めた。

「何、今のガラの悪いヤツ」

——あいつが聞いたらまた嘔みつくだろうなあ。こいつにだけは言われたくねーぞ、とかなんとか。

室内に目を向けたユウヤは、緑色の目を剣呑に細める。

「……ベッドずれてるし。何されたんだよ」

「何も。……大丈夫だ、友人だよ」

「あア、そォ……」

ユウヤは洗面のまま、ベッドを元に戻してくれた。それからパイプ椅子をぐるりと反転させて跨ぐように腰を下ろし、背もたれに腕をかけて顎を乗せる。

「具合はどォ德斯か」

「しばらく安静だ。ついでに色々調べて貰えとさ」

「メタボとか？」

「それはさすがにしねえんじゃねえか？」

……いや、するのだろうか。一瞬真剣に悩んだ私に、ユウヤはふっと口元を緩めた。病院内は禁煙なので、口寂しそうだ。

「ちょーどイイから全部調べてもらいなよ。それでなくてもあんた、なかなか教会から離れねエし。これ、みんなからお見舞い。それと着替えに入院セット。那珂川のばアちゃんはそのうち顔出すかもよ。後、やまもっサンたちも来るってサ」

ユウヤは持ってきた紙袋を軽く叩く。サイドテーブルに載せてくれた腕には、白い包帯が巻かれていた。

「すまん。お前も怪我人だろうに」

「あア、俺のは全部大したこたアねエよ。ンでも派手にやられたカンジは出てたデシヨ。あれやると雑魚はイイカンジで口が軽くなんだよね」

包帯を少し触って、に、と歯を見せて笑ったユウヤは、雰囲気少し尖っていた。あの真っ黒い氷の刃ほどではないが、あまり笑っていない視線が痛い。

鴻崎といいユウヤといい、今日は怒っている人間ばかり見舞いに来る。

金色の髪を無造作に掻き回して、ユウヤは小さく嘆息した。

「まアでも、その辺りは落ちついてからゆっくりね……。俺もあんまり同じこと何度も説明したくねエし。そんじゃ俺帰るから」

「……ああ。ありがとう」

拍子抜けするほどあっさりユウヤは席を立ち、またパイプ椅子をぐるりと反転させて悠々と扉へ向かう。背筋は凜と張っていて揺らぎがない。こんな男だったかな、と頭の片隅で思った。タバコを銜えていないからだろうか。それとも結構な数の包帯が見え隠れするからだろうか。

あァそーだ……と、ユウヤがゆらりと顎を持ちあげた。扉に手を掛けた状態でこちらに視線だけを寄越し、傲然と口元が微笑する。

「俺もね、あんたはすっげェバカだと思うよ。……ンじゃ、お大事にィ」

ひらりと手を振り、少し身を屈めるようにしてユウヤはそのまま出て行った。

……………。

その後、ベッドに撃沈したままの私のところに山本刑事と坂下刑事が訪れ、ちょっと心配されたりしたのだが——その辺りはまあいいだろう。

坂下刑事は、私を疑って周囲で張り込みをしていた、と言った。道理でタイミング良く来たはずだ。改めて謝罪をされたが、坂下刑事がいなければ私と立原久音はどうなっていたか分からない。十字を切って感謝したら、困られた。

それからユウヤの予言通り、那珂川さんも見舞いに訪れた。最年長の貫禄で穏やかに私の無茶をたしなめ、それから彼女の仲間に紹介をしてくれた。どうやらこの病院の常連のようだ。看護師や医師からも親しく声を掛けられていた。

ユウヤが持ってきてくれた荷物の中に聖書が入っていたので、彼らの暇つぶしついでに説教もした。真面目ではない聴衆には慣れているから、聴き手の間で話がずれていっても特に止めない。目に余る過大解釈の時だけ方向を修正する。その態度は日々退屈している患者の一部には気に入られたい。入院中は、わざわざ呼びに来てくれることもあった。

万聖節も、万霊節も、個人的に祈りを捧げるだけで過ぎていった。退院は少しだけ延びたが、最終的には異常はないと診断された。鴻崎は忙しいから来ない。ユウヤは途中でもう一度だけ顔を見せたが、すぐに帰った。

シオンの話は、一度も聞かなかった。

「——ソんで、なんで帰ってイチバンに教会の掃除なんだろうね、あんたは」

呆れたようなユウヤの声を背中で聞きながら、私は真新しい布をバケツの水に漬けた。水はもうかなり冷たい。夏の頃は放っておいても熱かったのになあ、と思う。

「知ってると思うけど、自宅の方がスゲェよ？ あれデシヨ、荒らされた上にカンシキ入ったんデシヨ。鴻崎神父サンも呆れてたよ？ それでもあっちを先にヤンねェんだ？ 俺ァあんたの優先順位が謎でたまらんわ」

一つ抜けている。ユウヤが、私の着替えを持ってくるためにあちこちひっくり返した分が。

「私には、お前がそこでずっと見物していることの方が謎だがなあ。暇なのか」

布を固く絞って跪き、祭壇を拭く。昔から使っている古い祭壇だ。祭壇布は外して日に干している。少し白みがあった石の側面には、御使いと花がひっそりと彫りこまれていて、前回の掃除からそんなに時は経っていないはずなのに、なぜか久しぶりにその姿を見る気がした。

「ヒマって一かねェ。その鴻崎神父サンに頼まれまして」

「何を」

「工藤和泉がまたバカをやらかさねエようにテキトーに見張ッときと」

ごっつ、と額の辺りで音がした。……しまった。祭壇に頭突きをしてしまった。急いでその部分を拭き直す。額がじわりと痛んだが、そこ以上に頭の奥の方が痛い。

どうやら鴻崎とユウヤは私の留守中に意気投合してしまったらしい。お互いに嫌がりそうなタイプだと思っていたのだが、特定の人物への共通認識というものは水と油でも近づけるようだ。

……その特定人物が私でなきゃ、何も言わねえんだがなあ……。

ちょっと振り向くと、ユウヤは並んだ長椅子の中ほどに座ってにやにやしていた。口元にはいつものピース。金色の髪に緑の瞳。派手で趣味の悪い服。胸もとで煌めく“S”のアクセサリ。

私は目を逸らして、また祭壇を拭き始める。

「……鴻崎はそういう言い方をするだけだ。真に受けるな」

「あんたが言っても説得力がねエよ」

私の抵抗を気持ちいいくらいにすっぱりと切り捨てて、ユウヤはくつつつと笑う。目を細めて、ゆったりとくつろいで。けれどどこか芯が通った、穏やかに強い眼差しで。

お前、雰囲気が変わったなあ。と言ったらユウヤはどういう反応をするだろうか。もしかしたら変わったのはユウヤではなく、私の見方かもしれない。

「あの人、鴻崎神父サン。あんたの同期っつーてたけど。みんなびっくりしてたよー。こんな厳肅なミサをよそはやってんのかって。那珂川のばアちゃんの真似してなんとかついてったけど、肩凝った、疲れたってさ」

……ミサは元々厳肅なもんだがな。本来はな。

鴻崎の所には退院したその足で報告と礼に行った。司祭館の一室でパソコンの画面から目を離さずキーボードを叩きながら、というぞんざいな扱いではあったが、私と会うときは大概そんなものだ。

その時に言われた。

オマエのとこの信徒は、付け焼き刃的に行儀が良いな——と。

まあ、どういうことが起きたのかは大体分かる。生真面目と不真面目の化かし合い勝負で、生真面目が上を行った。そういうことだ。

感謝しろよ、とついでのように言われた。

分かってるよ、と答えたら、どうだか、と返された。

ユウヤが笑う。

「ねエ。分かってんだよね？」

拭き終わった部分から布を下ろすと、白い翼が美しく見えた。祝福の中を翔る御使いは、花を手を持ち喜びの表情を見せている。

分かっている。それは私には、あまりに優しすぎる。

バケツの中に布と手を浸すと、すぐに冷えていった。指先が幻のように痛む。そういうものを、私はずっと見続けてきた気がした。

それで、今——この手が掴もうと思えば掴めるものは、それとはほんの少し違うものである気がする。

例えば目の前の翼のような、その輝く羽の一枚であるような、そんな。

馬鹿な錯覚を起こしてしまうような、優しさ。

「——なあ、ユウヤ」

「なんデスカ」

「シオンの連絡先を教えてくださいねえか」

ユウヤは楽しげに吹き出して笑った。

「本人に訊けよ」

「私の携帯電話は壊れたんだぞ」

「そりゃアそうデショ、あんだけ水浸しにすりゃア再起不能にもなるよ。ちなみに俺のも壊されちゃったよ。がっかりデスよ。損害賠償請求してエけどどこにすりゃイイんだろなと思ってマスよ。そんでシオンのも壊れたんだよね。耐水耐ショックの試験機でもビックリの有様だったってよ。あれだねエ、やっぱ神様が味方してくれてたんだよね。地味にね」

……。

「だから、本人に訊きなよ。あア、そーだ。鴻崎神父サンの連絡先訊いとかねエとな。なんか俺これからあの人と密に連絡を取りあう気がする」

……………。

「げっそりした顔すんなよ神父サン。面白エから」

爽やかに見えるほど上機嫌に笑むユウヤの背後。開け放した扉の向こう、青い軽乗用車が門の前で止まるのが見えた。扉の開閉音が薄く聞こえる。少し間をおいて、門の辺りで何かが動いた。

細っこくて薄茶色の髪と瞳で、警戒した動物の動きでこちらを覗きこむ。ちょっと車の方を気にして、隠れて、またこちらを覗く。

「……大変だったんデスよー。怒ったり心配したり落ちこんだり急に前向きになって飛び出しかけたり。俺も苦労したのであんたも苦労しろ。ってエことで俺はここで退散」

のっそりと立ちあがって踵を返し、ユウヤは紫煙をゆらりとくゆらせながら後ろ手で私に手を振る。

「……後で一緒にケータイショップに行けることを願ってるよん」

ふざけた風に私を脅して、よく晴れた青空の下に悠々と歩いていった。

見上げると、簡素な天井が目に入る。すぐそばには祭壇があって、少し視線を巡らせれば、埃を払ったばかりの聖母像と十字架と少年の像がある。暖かな日差しが差し込み、冷えた風を遮り、私の愛する小さな世界はここにある。

門の辺りでユウヤは立ち止まり、何かを話しかけてから細い身体を陰から引きずり出した。容赦など全くない。行け、とその細い背をこちらに向かって押す。

少しつつのめるように二、三步進んで、彼は背後に向かって文句を言う。知らん顔のユウヤに食い下がるのを諦めて、こちらに向き直った顔はしかめっ面だ。怒っているようにも見えるし、泣きそうなのを我慢しているようにも見える。いや、多分怒っている。あちこちに包帯を巻いたまま、肩に力を入れて歩いてくる。

——彼が、救いを求めに来る子羊なだけではなく、私の友人でもあるなら、私からも歩み寄る

べきかな。

そう思って、布とバケツを置いて立ちあがった。ちょっと膝と腰と足首が痛んだ。

主よ、天にまします我らの父よ。

苦難と救いの十字架を私にもたらし、信仰と希望と愛とをくださる方よ。

願わくばこの小さな迷える子羊たちに、恵みの与えられんことを。

アーメン。

## Father, Sheep, and the King

<http://p.booklog.jp/book/24657>

小説内での引用は以下の通りです。

聖書 新共同訳：

(c)共同訳聖書実行委員会

Executive Committee of The Common Bible Translation

(c)日本聖書協会

Japan Bible Society , Tokyo 1987,1988

著者：穂積りょう

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/r-hozumi/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24657>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24657>